目次

思想戰の意義（法輪）……本多日生
一、緒言…二、本實上の教訓…三、秩序の效實…四、思想の惡化…五、危險思想の恐るべき所以…六、危險思想の防止（其一）…七、危險思想の防止（其二）…八、危險思想の傳播…九、言論自由の誤解
聖德太子の雲法に就て……本多日生
佛教信仰の正統……本多日生
佛法の奈處……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日咸
宗門史料……山根青村
生活の問題より生命の問題へ……中川日史
改造運動と信仰……武田顯龍
年頭の願望……熊井本光
維摩の娘……野村香明子
記事、報道十數件

第廿五年一月號

伊勢國四日市市安樂寺建立淨財勸募之辭

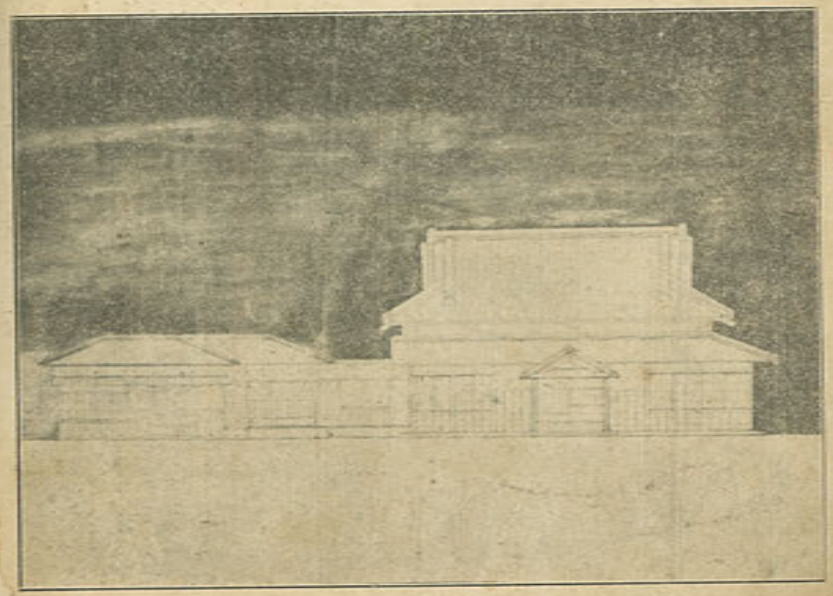
寺は精舍なり、人心を清淨ならしむること、米を精白にするが如く、又寺は功德林なり、この處に詣する者は功德を成就すること、園林に入つて華果を採收するが如く、復寺は金剛道場なり、この處に詣づる者は金剛不壞の佛身を成就す、經に云く、佛寺を建立する處は、其地皆金剛より成り、異滅の變あること無しと、今茲に伊勢の國四日市市に於て、法華經の正義を尊重する信男信女等、心を協せて一寺を建立せんとす、幸に靜岡縣下に存する久根の安樂寺を移して、其寺號を剪用せんとす、安樂寺は醍醐法皇の建立にして由緒正しき梵刹なり、建立の計畫已に成つて將に造營に着手せんとす、希くば隨喜の諸氏この擧を贊助し、淨財を喜捨し、以て發願を成就せしめられんことを

維時大正九年九月

發願人　本多日生
　　國友日斌
　　山路元吉
　　兒玉小治良
　　佐藤柳
　　服部隆

寄附金勸募要項

一、敷地　金五千圓也　山路元吉寄附
一、本堂兼庫裡七拾坪　金壹萬圓也
一、工事完成　大正拾年貳月
一、寄附金は東京府品川町妙國寺、名古屋市新榮町當德寺、又は四日市市新丁向山路方統一團分擔宛申込及納付ありたし、



伊勢國四日市市安樂寺正面圖

法幢

思想戰の意義

本多日生

目次

一　緒言……二　事實上の教訓……三　秩序の尊重……四　思想の惡化……五　危險思想の恐るべき所以……
六　危險思想の防止(其一)……七　危險思想の防止(其二)……八　危險思想の傳播……九　言論自由の誤解

一、緒言

こゝに思想戰の意義と題して、聊か所見を披瀝致したいと思ふ。今の日本にはいろ〳〵の缺陷がありませうが、就中尤も大きな缺陷は何かと云ふに、私は思想戰の意義を領解し得ない者が多いことでありはせぬかと思ふ。先數も內務大臣の官邸に於て、民力涵養に關する今後の活動方法に就て協議會が開かれ、政府の當局と民間のそれ〴〵の人が相集つて種々協議を致しました、政府の提案のある所を聞きますれば、明治天皇の神宮が落成を吾ぐるに依つて、その機會に於て全國の青年團の代表者を東京に集めて、一週間又は十日に至る講習會を開いて、その講習を通して彼等の自覺を促したい、その內容は時を重んずる風習を作る事、又道路を修復するやうな良き習慣を作る事、その他地方に於て善良なる風習があればそれを保

存し、又生活上の弊害があればそれを改善するやうな事を、講習を通して彼等に教へたら宜からうと云ふが主なる點でありました。或は青年の高聲に唄ふ歌を拵へて、その歌を通して彼等に健全なる思想を養はしめたら宜からう、又地方の戸主會、自治會、婦人會等をも指導して行くやうにしたいといふ事でありました。皆何れも結構な事であつて、吾々も贊成を表したのであるが、但し一言自分等の考へのある所を申したのは、成る程時の事も、道路の事も、良き風習も皆結構である、生活改善も結構であるが、今日の我國に押寄せて居る最も重大なる緊急切實なる問題はこれ等の事では無くして、即ち國民が思想の戰に對する覺悟が十分に定まつて居らぬ事である、今の時代に對して第一に普及徹底を圖らねばならぬのは、やはり國民教化の事で、この國民を教化する目標は、危險なる思想に流れ行かないやうに、又一般に人心の墮落をしないやうに、又思想の取捨に就て輕躁浮薄な觀念を持たないやうに、又經濟上に於ても投機的な考へを持たぬやうに教ふるが、餘程大きな問題であらうと考へて、その事に就て卑見を申述べて置きました。相集つた有力なる人達は、皆御同感の由を述べて居られたやうでありましたが、どうも私の考へる所では、一番大きな問題は、國民が思想戰に對して、十分の覺悟を有つて居らぬことであると思ふ。

二、事實上の教訓

併し最早や今日になつては、如何に痴鈍な又は浮足の人でも、思想の戰ひの恐るべきを自覺することが出來やうと思ふ。それは事實に依つて教へられる場合には、如何なる痴鈍な者でも領解することが出來るからである。今日は幾多の事實が吾々の目前に展開して居るが、就中その大なる教訓は先般のニコライエフスクの虐殺事件である。今迄はこう云ふ場合はその國の責任であつて、露西亞の國家を對手として其罪を問ふことが出來た、けれども今は露西亞といふも國といふ團體を壞してしまつた、政府の政府も權力は共産に及ばぬ、又本國のモスコーの政府も、ニコライエフスクの暴擧などは自分等が責任は帶びられぬと云ふさうであります、外交上の事、軍事上の事はそれ〴〵の人がありますから、吾々の容喙すべき限りではありませぬが、さう云ふ事の起つて居るのは確かに思想の戰であらうと思ふ。國といふものばかりが敵だと思つて、敵國を對手にしなければ戰爭は無いと云ふ風に、國と云ふことのみに依つて日本人が敵愾心を持つとか、或は犧牲心を持つといふ一事になつて居るのは、時代に對する理解が無いと思ふ。又愛國心といふ事でも、國と國との對立的なる衝突、即ち敵國が現れてその國と戰爭をして居る時には、大和魂が燃え立つて來る、今や日露開戰をしたとか、日獨開戰をしたとか言はなければ、日本人はボンヤリして居る、ニコライエフスクの事件でも、あれが露西亞といふ國が責任を帶びて居るのであつて此の事件に依つて日露開戰の宣戰の詔勅が出たといふ事になれば、始めてこれは大變だと自覺するのであらうと思ふ。所がこれは今申す通り、向ふに於てはその國家としては知らん事だと云ふやうな風になつて居る、事實露西亞の政府はそこに權力が及ばぬのであらう、又國家の方針としてやつた事でもないであらう、併ながら我國の歷史に曾て見ざる所の多數の國民が最も悲慘なる方法に依つて虐殺されて居る、これを不問に置くといふ理由は斷じて無い、故に當局者に於ても既に北樺太の一時占領其他それ〴〵の決定を下された次第でありますが、吾々の同胞七百人が、殘忍酷薄なる方法に依つて殺されたそれを本國に居る所の同胞が深く嘆みないで、唯だ浮いた調子で酒を飲み、活動寫眞を見て居ると云ふ事であつたならば、これは實に道德心の缺乏したる國民と言はなければならぬ。彼等は全く浮ぶ瀬も無く、永遠に怨みを呑んで居るであらう、氷の下に埋められ、火に焼き殺されたといふから、生きながら八寒地獄、八熱地獄の苦みを與へられて、その死骸もどうなつたか分らぬと云ふやうな譯で、一人の生存者も無いと云ふ事である。この靈を慰めるに於ては、どうしても同胞の吾々は相當の方法を執らなければならぬが、斯の如き歷史に無いやうな悲慘な事が現れたのは、これは全く思想の禍である、國と國との利害關係に依つて起つたのではない、馬賊に等しいやうな者が暴れて來たといふけれども、それは一部分の者ではない、非常な廣い範圍に蔓延して來て居るのであつて、それは即ち一種の思想的團結である、即ち佛教でいふ所の「邪定聚」

である、謬つた立派な思想の團結とは言へぬけれども、誤つた意見を以て掠奪を事とし又惨殺をする、男も女も一緒になつて惨害を逞うするといふやうな一つの團結である、所謂邪見外道の毒思想を以て團結して居るのである。左樣な者が勢力を得て到る處に跋扈するといふ事になつたのであるから、活きながら人間界が修羅の巷であり地獄の巷となつたのである、最早や人間の世界とは言へない。尼港の虐殺事件は全く國家の利害關係から起つたのではない、利害關係から生じたのならば、日本人を殺せば、後でそれだけの膺懲を受けなければならぬと考へるであらう、全く誤れる思想の團結として同國人、異邦人を虐殺するに至つたのであります。さうして彼のバルチザンと稱する意味は、義勇軍とか自衛團とかの義であつて、志を同じくする者が團結を組んで、他の迫害に備へたことから起つたのであると云ふが、今度はバルチザンの名に依つて他を迫害する、自衛團にあらずして他を惨害する所の惡魔の徒黨である。さういふものが尼港にのみ居るのではない、必ずや此の盜膺懲をしないで居たならば、到る處にさう云ふやうな集團が出來て、露西亞のみならず支那にも出來るだらう、朝鮮などにも日本の力が衰へたならば出來るだらう、此のバルチザンの中には、報知新聞に寄眞の出て居るのを見れば、支那人や朝鮮人も居れば樣々なる人種が寄つて居る。思想が斯の如くに墮落し惡化して行つたならば、行く所として左樣な殘忍な事が起り得るのである、一つ社會の秩序を壞した時には、强い者勝ちであるから、さう云ふやうな者が忽ち跋扈するに至るのである。日本でも國家が安寧秩序を維持する力が衰へた時に於ては、何處の國民でもさう云ふ事をやるのである、今東京にした所が警察權が衰へ、治安の維持が破れた時に於ては、今日此の儘で到る處に虐殺、姦淫、掠奪が行はれ得るものであると思ふ。

三、秩序の尊重

左樣な譯であるから、人間は思想が十分に鍛へられて居ない時は、忽ち左樣な事が起るのである。この國家の秩序を維持するのも思想である、今は國家の秩序を維持せんならぬといふ思想と、左樣な秩序などは維持しないでも宜い、各〻勝手にやれば宜しいと云ふ思想との戰ひになつて來て居るのである。唯だ自然々々に社會の秩序が壞れるのではない、壞すべしといふ思想を宣傳して來て居るのである。社會の秩序を維持せんならんといふ事も思想である。先年の米騒動のやうな事が起れば、その間は社會の秩序は破れて居るのであるから、理由無くして火を附けられるとか、掠奪されるとか云ふ事になる、それを繰返したならば、その部分々々に於ては社會の秩序が破壞されて居るのである、東京で勞働者が運動をやると云ふので、芝公園に集つて、刑事を苛めあげて、刑事が學生の風をして居つたとか云ふので、帽子を引つ奪つてお辭儀をさしたとか云ふやうな事は、即ち國權を行つて居る所の警察官を侮辱するのは、その場合は既にその處の秩序は破れて居るのである。それを面白がつてやるやうな風になつて來たならば、やはり社會の秩序を破る事を何とも思はぬやうになるのである。又同盟罷工なども、當然の要求に於て極く穩健な方法に於てやると云ふ事は、或は認められるかも知れんけれども、濫りに團結して人民を脅かすとか、度々不當の要求を繰返すと云ふやうな事柄は、やはり社會の秩序を破る一つの方法である。八幡の製鐵所のストライキに於ても、東京の電車のストライキに於ても、惡性を帶びて居ることは明白である、あゝいふ事を繰返すことに依つて、やはり此のバルチザンの下拵へをすることになると思ふ。何も餘所事では無い、露西亞ばかりが人を殺すものぢやと思うて居ると違ふ、秩序が破れたら日本人でも虐殺を始めるに違ひない、露西亞人ばかりが凌辱を恣にするものではない、東京でも若し社會の秩序が破れたならば、女を捕へて搾ぎ込んで行くと云ふやうな者が出る、如何にも恐るべき事である。さうして社會の秩序とか武力とか云ふものは移に屬するけれども、それが今日破られるのは、敵國から來て破るは容易でない、敵國が來て日本の軍隊を撃滅すると云ふことは容易に無いけれども、國民自ら之を輕んじて、遂に秩序を破るやうな事が出來るのである。

それ故に私は先般のニコライエフスクに於て同胞數百人が、怨を呑んで殺された事は、これは思想の誤り遂に此處に至つ

たものであるから、思想ほど恐るべきものは無いとの大自覺を起すべきであると思ふ。今迄は敵國ぐらゐ怖いものはない、經濟の戰ひ位怖いものはない、武力の戰ひ位怖いものはないと云ふ事を領解して居たであらうけれども、今日は思想の害毒、遂に我が同胞を狂氣にしたと云ふ、此の新らしき事實を意識せなければならぬ。外交を以て責める對手が無くて困つて居ると云ふ、此の對手が無くて困つて居ると云ふ事が、思想の害毒の明白なる證據である、謀つた國家がやつたのであれば、直ちに宣戰の布告でもするとか、外交談判に移つてどうすると云ふことになるけれども、對手を捉へてそれだけの交渉を開く事も出來ないと云ふのは何であるか、これは思想の害毒が斯の如き事になつて來たのであるから、其處で外に對しても思想の惡るべき事を知ると同時に、內に於ても思想を戒めてかゝらなければならぬ。これは私の愚見であるが、決して露西亞一つに止らない、一歩を誤れば支那も同じやうな傾向を取るかも知れぬ。支那と日本は親密なる交際をして、兎に角日支親善を標榜し、何處までも支那の領土保全を圖り、あらゆる點に好意を以て支那に對して居る譯であるし、日支の間は兎に角平和な關係を有つて居る、であるから左樣な暴虐なる團體が來て、日本人を虐殺する場合には、支那の軍艦が居れば日本人を收容して、一時の急を救ふなり、又支那軍艦の軍隊が上陸して、日本軍と力を協せて之を膺懲するなりするが當然であらう、その位の事は誰が考へても直ぐ腦に浮ぶべき事であるにも拘らず、日本人を虐殺するを傍觀して居る、已に支那人はさう云ふ邪惡なる思想に感染れて行き居る事が、そこに證明されるのである、所謂惡魔の仲間に成り易き性質を有つて居る、既に惡魔の仲間になつて居るのもある、それはニコライエフスクだけではない、あの大きな支那の中に於て、此の過激精神が蔓延しつゝあるので、あれが同じやうな惡魔に變つた時は、實に恐るべきである。朝鮮に於ても恐るべき惡思想があつて、最近の新聞にもあつた通り、日本の皇族を朝鮮の世子殿下に娶せられると云ふ事は、非常な優待である、若しこれが他の國に併呑されたのであつたならば、その王者は何等かの方法に於て殺してしまふか、或は島に幽閉すると云ふやうな態度に出るのが普通である。然るに日本の皇室はその地位を保全して皇族の班に列し、日本の皇族のお姫樣を世子殿下に娶せられると云ふやうな事は世界に類例の無い惡典であると思ふ。然るにも拘らず朝鮮人はそれを考へずして、朝鮮獨立の妨害であると言つて、世子殿下の婚儀の式典の日を以て爆烈彈を投ぜんとした、今や日本の法律に同はるべく收監されて居ると云ふ事も最近の新聞が傳へて居る、これも思想の禍である。

四、思想の惡化

この惡思想が露西亞、支那、朝鮮に蔓つて來て居る今日、日本に牽固な國民性が維持されて居れば宜いが、これも或る所から喰ひ込んで行つて、いろ〳〵な者が出て來る、即ち最近に收監された或る教授が、過激思想宣傳の爲めに書籍版に刷つて、之を配つた爲に、日本の國法に問はれて居る。過激思想の宣傳に就ては、彼等は非常な熱心を有つて居る、先年の大逆事件が既に之を證明して居ると思ふ、最早や事は十年前に屬するが、明治天皇の御代に幸德傳次郎等二十六人が或る事を謀企んで爆烈彈を投げる計畫をして、既に爆彈の製造も出來上がり、籤を引いて順番で誰が一番に投げる、二番は誰、三番は誰といふ手配までしてあつた。その中には女も這入つて居るし、いろ〳〵の者が居る、左樣な計畫に二十六人が加擔して居つた、それは皆社會主義者であり危險思想の徒である、當時大逆事件と稱して諸君等も耳にせられたであらう。既に十年前に於て左樣な思想があつたのであるから、これから露西亞の革命も起り、世界の思想の變動を經て、今や斯樣な惡思潮が樣々の方面に侵染しつゝあるので、英吉利に於ても勞働運動の中に危險性が這入つて居ると云ひ、亞米利加にも這入つて居ると言はれる今日、日本が蓋をあけて見ないからであるが、蓋をあけて見たならば、どの位喰ひ込んで居るか隨分恐るべきものがあらうと思ふ。さうして直接その惡い思想で無くとも、その惡い思想の傾きを取り、惡い思想の間接的援助を爲す者は、愈々勃發すれば一つになつてしまふのである。

五、危險思想の恐るべき所以

此の過激思想の行動は、さう大勢の人を要しないので、「ナーニ過激思想が五百人や千人出來たつて、日本は六千萬人居るから叩き合ひしても決して負けはせぬ」と言つて安心する人があるかも知れぬが、それは成る程五百人なり千人なりが、棒を持つて殴り合ひをしに來るならば、五千萬六千萬の國民が叩き合ひに負ける筈はない、彼等を叩きつける事は何でも無いが、過激思想の者は吾々健全なる國民と棒でど突き合ひをしやうと云ふのではない、彼等は僅かな力に依つて多くの影響を與ふべき方法に就て種々なる研究を積んで居るものである、「一と握の砂を以て電氣會社を壞すことが出來る」と彼等は言つて居る、一と握の砂を發電所の機械にパッと投げつければ、それで機械が破損して、一遍に何千軒、何萬軒の家にある電燈が消えてしまふのである。一人の人間が軍艦の火藥庫に寸一本に火を點じて爆發せしむれば、帝國を擁護する所の數萬噸の軍艦も、瞬間に爆發して海底の藻屑となり終るのである。惡い思想が一人と一人とで取組合をするといふならば、六千萬人の中三千萬人になる迄は安心だといふやうな譯だけれども、さう云ふ鈍間のものではない、彼等は五十人あれば東京を眞つ暗がりにして終ふことが出來ると場言して居る。第一に夜中に監獄に行つて、門番を短銃で打殺してしまつて、中へ飛込んで居眠りして居る押丁を縛り上げて、監獄を解放して囚徒を出して終ふ。人殺囚や强盜囚や千五百人も居る奴を皆解放して、「サア皆出て來い、お前等を救つてやるのだ」と云ふから皆喜んで出て來る、「その代りにお前は何處に行つて火を放けろ」「お前は何處に行つて爆烈彈を投げて來い、サア之をやる」と云ふやうな譯で、一時間位の間に千五百人の囚徒を味方につけて、さうして分隊を作つて一方は三越白木屋、一方は深川の米倉庫、一方は大臣富豪の邸宅を襲へといふやうな工合にしてやらうと云ふのである。餘り解しく言ふと氣持が惡くなるから言はぬけれども、さう云ふやうな計畫をして居る、中々恐るべきものであるが、私共の知つて居る範圍に於ては、彼等は自分の見込が立つて居る間は、未だ〳〵穏かな方法を採るので、愈々窮迫の狀態になれば、最後はどんな手段でもやると云ふのである、それは水道の水にも毒を流すのである、彼等の社會には毒藥の辭典が出來て居る位であつて、日本にはどう云ふ草が毒になると云ふ事が調べられて居る。さうして愈々となれば毒も蒸り煮くし、ベストの黴菌も蒸り煮く、虎列刺に罹つた奴の吐いた吐物を紙に包んで、少しづゝ向ふの便所、此方の芝居小屋、停車場といふやうな所に撒いて歩く、さうすれば一人の力と雖も東京に一遍に虎列刺病を蔓延さすことが出來ると云ふ、實に惡魔の働きであるから、一人と一人が棒でど突き合ひをすると思うて居ると違ふ。一人の惡い思想に囚はれた者の恐るべきは、實に虎や獅が飛んで來たやうなものではない、虎が動物園から飛出したと言うても、鐵砲を以て打殺せばそれで濟むけれども、人間の惡思想に囚はれた奴は、隱れて居るのだから困る。女でも惡い思想に囚はれたのが、やはり人並にお白粉をつけてヘナ〳〵笑つて居る、一寸分らない、さうしてそれが人知れぬ所に於て惡い事をする、中々恐るべきものである。思想の恐るべきは、柔和な婦人と雖も非常な事を計畫する、今度のニコライエフスクのパルチザンの參謀長といふのは、二十八歳になる女だと云ふ、革命の當時露西亞に於て多くの寺を皆ブチ壞したのも女である、昔から毒婦とか妖婦と言ふが、一ツ惡い思想が這入つたならば、どんな事でもやるのである。今度のパルチザンの中には女が澤山居るあんな事をやる時分には女が居らなければ元氣づかぬ、誰の女房とも分らないでゴタ〳〵やつて酒を喰つて居る、それで勢力を得るのである、秩序を破壞して左樣な不倫の事をやつて、さうして正義の人達を惨殺して行くといふ、そこに彼等は面白味を感ずるのである。

六、危險思想の防止（其一）

これは唯だ一と通り表面から巡査が附いて廻つて取締の出來るものではない、無闇に鐵砲を打つて取締の出來るものでもない、どうしたら此の取締が出來るかといふと、先づ三點の方法に依らなければならないと私は考へた。その第一は、さう云ふ思想が一般の國民に感染しないやうにする事が必要である。虎列刺病が流行つて來たならば、他の者に虎列刺の黴菌が傳染せぬやうにするが最も大事なことである、火事が起つたならば、他に類燒せぬやう消防夫が飛んで行く、さうして燒

けて居る家よりも未だ燒けない所に水を注ぐ、又平生から防火壁を置いて、煉瓦で家の境を拵へて置いて、隣までは燒けて來てもそこで喰ひ止めるやうな、防火準備が大都市には出來て居る、それと同じ事である、惡思想の火事が燃え上つても、或る區域に於て止まつて他には傳染せぬといふ、煉瓦塀の高いやつを拵へて置けば宜い。所が今の社會は、柿葺の長屋が軒並びに建つて居るやうな狀態である、だから火が一つ燃え上ると、あつちに飛火しこつちに飛火し、そこに暴風が吹いて來るならば、淺草の火事が本所に飛んだ、そら深川にうつつたと云ふやうな譯で、振袖火事のやうに蔓延して行くものだと私は思うて居る、虎列刺菌が神戸に來たといふと、非常に皆が騒いで居る、成る程虎列刺菌は恐るべきものではあるけれども思想の毒は更に恐るべきものである。肉體の生命の大切なる事は教へなくても知つて居る、「お前は虎列刺菌を飲むか」と言つたならば、「そんな物は飲まん」と云ふに相違ない、けれども「惡い思想菌を呑むか」と言へば場合に依つたならば「砂糖でもつけて舐らうか」と云ふやうな事になるのであるから、思想ほど恐るべきものはないのである。虎列刺病の事は一々調合を出したり宣傳をしなくても、大抵氣の利いた者なら注意するけれども、思想の事に至つては學者、識者と言はれる者でも「一パイ位呑んで見やうぢやないか、味も知らんでは學者と言へないから」と云ふやうな事を言つて呑む、今日は呑んだ者の方が氣が利いて居るやうな事になつて來て居る、恐るべき次第である。これだから私は思想に就ては他に傳染せぬやうに、他に類燒せぬやうにする事が第一に必要であると思ふ。この類燒を防ぐ爲に、火事であれば煉瓦塀を築くのだけれども心に煉瓦塀を立てると云ふ事は中々難かしいことナンである、煉瓦屋を頼んでも大工を頼んでも、この人間の心に煉瓦塀は立たないのぢや、之を醫者に頼むことも出來ず、學者に頼むことも出來ないと云ふ事になつて、今日はこの心の煉瓦塀の仕事師が缺乏して居るのである。心に防火壁を立てなければならぬ、それにはどうしたら宜からうかといふと、實は先年も私はあらゆる宗教家を先づ覺醒せしめて、ブラ〳〵して居眠りをして居る坊さんが、兎に角この煉瓦屋になつたら宜からうと考へて相談をした、所がいろ〳〵横道の方に話が行つて、遂に煉瓦塀を立てると云ふ事に本當に力を入れる迄に至らなかつた、煉瓦の買入もしない中に話がオチャンになつてしまつた、尚にこれは殘念な事であるが、併し我ら考へてもこれが先づ一番大事なことである。即ち第一樂としては、國民の思想にさう云ふ惡い黴菌を受け付けないやうに、左樣な惡思想に感染せぬだけの完全なる思想の調化、所謂國民教化を徹底せしめて置かなければならぬのであります、唯だ側に寄るナ〳〵といふだけで、神戸に虎列刺菌が來たから神戸の土地に下りるなといふだけではいかぬ、それでは消極的である、虎列刺菌が來ても健全な身體ならば、虎列刺菌を少し位喰つても胃液の作用で殺してしまふと云ふだけに、健康體にして置かなければならぬ、肺病菌が怖いからと言つて、東京のやうな塵の立つ中に居つては、その塵の中に肺病菌が飛んで居るから、山の中に逃げ込んでしまふといふので、三百萬の市民が皆山の中に逃げ込むのでは仕方が無い、その塵を吸ひながら肺病に感染せぬやうな健康體を維持すべき方法を講じなければならぬ。いろ〳〵な思想が這入つて來ても、心の働きで之を吟味して、惡い思想は精神の力で撃退するやうな國民を造つて行かなければならぬのである。

七、危險思惡の防止（其二）

第二の手段は、此の惡い思想に感染れて行く者とても、始めから惡い事とは思うて居らぬので、やはりそれが善いと思うて進つて行くのであるから、その誤りに居る者を改過遷善せしむべく、之に向つても教化を加へて行かなければならぬ、唯だ外部の取締のみにては段々と彼等は深く惑ひに陷るのである。譬へて見ると念佛と法華のやうなもので、念佛は念佛、法華は法華で、此方は題目をやつて居れば宜いといふのでは、何時まで經つても念佛信者は救はれない、だから念佛といふものは斯う云ふ意味に於て佛教の中の方便の教に屬して居る、此處に足らざる所がある、消極的の教である、或は國家の興廢を餘所に見るものであるといふやうな所から段々に說いて分る者はその非を改めるやうにすると云ふ運動が起らなければならぬ。向ふからやつて來るのを唯だ防禦すると云ふので、防火壁を築いてその中に籠城して居ると云ふのではいかぬから、

第一の準備と同時に更に飛び込んで行つて、惡い思想に感染れて居る者を一人々々改過遷善すべく、攻勢に轉じて行かなければならぬ、「それは巡査が後から尾けて行けば宜い」と思うて居るけれども、巡査が後から尾いて行つて、それ鮓屋に上つた、饂飩屋に上つたと言つて尾行まはして見ても、それでは決して思想の中に喰ひ込んだことは直りはしない、これは十分殺の意見を言はして、その誤りを是正してやるといふ、思想の教化をやらなければならぬ。隨分極端な過激思想になつて居つた者を寺に置いて、改過遷善せしめて行き居る者も段々ありますが、割合に效果はあるのであります。人間といふ者は教へさへすれば領解するものである、隨分甚い過激化した男で、始終巡査が尾いて居つた人間を改過遷善せしめて、今日は健全な僧侶になつて、お寺に住職して居る者もある、それは大逆事件以後の事であるが、又最近にも改過遷善して、統一閣などに來ていろ〳〵骨を折つて居る人もある、今は立派な日蓮主義者だけれども、以前を洗へば危險なる社會主義者で、爆烈彈を投げつけるやうな考で居つた人もある。この事を皆が考へて、自分の親しい知合いの所から一人づゝでも改過遷善せしむるならば、假令これが何百人何千人過激思想になつたからと言つても、この大勢の日本國民の愛國的精神に依つてあらゆる方面から一人づゝでも取つて押へて改過遷善せしめるといふ事になつたならば、必ずその效を奏するのである。さうして段々やつて見ても、どうしても行かないといふ者があるならば、それは第三の方法に移らんければならぬと私は考へる。このどうしてもいかぬ者に就ての方法は、公開の席に於て公言すべき限りでないが、この三つの方法に就て考へて居る、その考へは今も變らぬのである。

八、危險思想の傳播

それは一般の惡思想に對する觀念でありますが、モウ一つ他の方面から考へなければならぬ事がある、それはこの惡い思想の傳染して行くといふのは、どういふ工合に傳染して行くかといふ事を知らなければならぬ。感冒が流行る時に感冒が感染らぬやうに豫防すると云ふに就ては、その傳染の狀態を知らなければならぬ、此の頃の西班牙風邪といふやうなものは、空氣傳染であるから、病人の吐いた臭から感染るとか、餘り部屋を締めて病人の息か部屋に籠つて居つたりすると皆感染るとか云ふやうに、空氣から傳染すると云ふので、看護婦でも醫師でもガーゼのやうな白い布片を口に當てゝ居る、往來を歩く人も黑い布片で犬のやうな事をやつて居る人が多かつた、それをやりさへすれば感冒が感染らぬといふ方法が分つて居るからそれをやるのである。けれども窒扶斯といふやうな病氣であつたならば、これは病人の排泄物の中の黴菌に依つて感染るのであるから、犬の眞似みたやうな事をやつても追つかぬ、便所などで下の方から感染つて來る、だから何處から感染るかといふ事を知れば、その用心の仕方があるのである。それで惡い思想といふものは何處から感染るか、便所の中から感染るか、部屋の中から感染るかと云ふ事に就て、國民が能く自覺しなければならぬ。さうすると思想の傳播といふものは、人間の方から言ふと、目と耳より他に這入つて來ない、鼻などから幾ら嗅いでも感染はしない、又舌の方も少しも影響を受けない、手で幾ら惡い本などを捲でゝ居つても感染しない、この耳と目とを警戒さへすれば惡い思想は這入つて來ない。耳は惡い言論を下手に聽かされると感染されるのである、モウ一つは惡い文章である、此の言論、文章を通ほして思想の傳播はあるのである。だから惡い思想を撃退すると云ふ事は、大勢人がワイ〳〵寄つた所が何にもならぬ、惡思想を撃退するにはどうしても言論と文章である。思想の戰ひは向ふが惡い思想の宣傳を言論、文章でするのであるから、それを驅逐しそれを全滅するといふに就ては、正義の言論を盛んにし、正義の文章を盛んにしなければならぬ。惡思想は自發的なるものは一人も無い、私はその點が幾分安心な所であると思ふ。虎列刺病も自發は少ないけれども、特發性の虎列刺といふものもあつて、食物が惡かつたとか、飲み過ぎたりすれば、何も傳染の系統の無い所に虎列刺病になる者がある、併し大體は傳染系統のあるものである、ペストになつたならば、傳染系統無くして特發性のペストといふものは殆んど無い。思想の方は不平と云ふやうな所までは自發的のものである、人間は不平を言はんならんといふ議論を聽かなくとも、親なら親が餘り窮窟なやかましい

事を言つて、年頃になつても嫁を貰つて呉れないとか、一寸夜遊びに出て、小言をいふとかいふ事になると、家の親父は頑固で分らんと云ふやうな事は、別段他から傳染して來なくても、部屋で考へて居つても特發的に來る。それであるから親父の金を盜んで逃げてやらうかといふ位は考へる、隨分惡い性質といふものも特發性に澤山ある。所がこの過激思想といふ社會の秩序を破壞し、國家の組織を破壞する思想は、決して日本人に特發的なる者は一人だつてあるものでは無い。幾ら考へて見た所が、牢の中に五年十年ブチ込んで置いても、日本の國家をブチ壞はさうといふ程の毒惡なる精神は、日本人には湧いて來ない。これはどうしても亞米利加を通ほし、露西亞を通ほして、他からさういふ思想觀念が吹き込まれて、「さういふものカナー」といふ事になつて來るのである。これも生地が無ければ感染せぬけれども、不平といふものがある所にやつて來る、併し大體は世の中にズン〳〵成功の出來ない人間、學者で言へばもつと上げて呉れさうなものだと思ふのに、何時まで經つても助教授で教授になれないとか、十五年も勤めて居るのだからもつと給料を上げて呉れさうなものだと思ふのに一向增給せられないとか、何處かで排へられて居る人間がさう云ふ思想になり易いのである。書生でもズン〳〵成功して、會社に行つても重用されゝば宜いけれども、何處の會社に行つても採用して呉れない、親類に行つてもお前の料簡が惡いからだと言はれる、あつちこつちで頭をコツ〳〵抑へられるから、そこで人生といふものは詰らんと云ふやうな不平を起す。或は病氣があつてどうしても此の先き長生は出來ない、可愛い女房を置いて行かなければならぬ、忌々しいと云ふやうな事、いろ〳〵の事が原因となつて起るのである。妙なもので人間といふ者は自分が一つ抑へられると、非常に不滿な考を起す、癩病患者などがやはりさうで、自分が癩病だといふと、他人にその病氣を感染して見たくなる、肺病でもその傾があると云ふ事を聞いて居る、これはやはり一種の過激精神であるが、さう云ふ不平があると危險思想を受容れるのである。他からこの惡思想を受けなければ、國家を破壞するといふやうな惡思想は決して起るものではない。それは生地はある、例へば虎列刺なら虎列刺が流行る時に、少しく喰ひ過ぎて胃が弱くなつて居ると云ふやうな事で、虎列刺が感染つて行くのである、風邪なら風邪が流行る時分に、夜布團を脱いだといふやうな事から、そこに流行感冒が取ついて來るやうなもので、素地はあるけれども、併し他から黴菌が行かなければ、決して危險思想にはならぬ、それは洵に思想の戰に就て頼む所のある次第である、その思想の傳染の有樣を研究して、そこに注意する事が必要である。

九、言論自由の誤解

所が今や言論文章の自由といふ事を極端にいふので、これが間接に惡思想を助けることになる、思想は自由であると云ふ事を大學の先生でも、坊さんの人達でも云ふけれども、それは思想は自由だといふ事は、一と通りの理窟である。例へば人間なら人間の出入往來は自由であると言つても、虎列刺菌の保有者であつたならば、自由を拘束されるのは當然である、自分の家の門を開いて出やうとすれば、巡査が居つて「お前は門から出てはいかぬ」といふ「俺は風呂に行くのだ」「イヤいかん、お前は虎列刺菌を保有して居る、風呂などに行くと他の人間に感染るから、虎列刺菌が無くなつたといふ健康證明のある迄は風呂に行く事はならん」と言はれる、仕方が無しに家に居るだらう。思想といふものも今や惡性を帶びて、不健全な事をし居るのであるから、さういふ惡い思想の保有者は、その思想を雜誌に書いたり演壇に立つて演說することはならぬといふは當然である。それは學問は獨立だとか、思想は自由であるとか云ふやうな事を言ふのは、人間一人歩くのは自由だと言つて、虎列刺菌を保つて居る奴が勝手に飛び歩かうとするやうなものである、虎列刺の保菌者は、虎列刺菌を保つて居る間は、どんな身分高い人でも船から上陸を許さない、一週間は消毒しなければならず、病院に拘禁されて然るべきものである、「俺は是非今日の中に日本の土地に上陸らなければならぬ用がある」と言つても、「さうは行きませぬ、あなたがその身體で虎列刺菌を振撒いたならば、東京の三百萬の人命に關するから、あなたは大事な人である、マア暫く病院に居つて呉れ」と云ふ事になる。それと同じ事で、今日は思想といふものが非常な危險な有樣を以て黴菌を撒布しつゝある。であるか

らそんな時には巡査と喧嘩などをするのが紳士の態度ではあるまい、自分が保護者であるかは知れぬといふ時には、巡査が言ふ迄もなく自分がそれだけの健康體を保證されるやうな方法を取るのが、人間の當然の責任である。それを巡査に文句を言つて「ナーニ構はぬ、出して呉れ」と言つて巡査の横面を撲ると云ふやうな事は、當識を缺いて居る馬鹿漢である。思想言論を唯だ自由ちや〳〵と云ふ、實に世の中には暗愚な人が居るのである、虎列刺で言うたならば胃も弱り、下痢もし居るやうなのが一パイ居る、殊に多くの青年とか、勞働者とか、一般民衆といふものは、虎列刺に罹らぬ中にモウ胃病で吐いたり下痢したりして居るやうな人達である、そこに黴菌を撒かうといふのだから、一度その黴菌が這入つたならば、到る處に悪い思想は傳播するのである。この場合に於てはその悪思想を一寸でも振撒くといふ事は、大いに警戒しなければならぬ。そんな事で少し位文明が後れるとか後れないとか、さういうやうな思想の事を知るとか知らぬとか言つても、そんな事を知つて見たつて何でもないぢやないか、何でも物を知つたのがえらいと思ふけれども、泥棒の仕方見たやうな事を稽古して、強盜をやるには斯うやる、人殺の時分には斯うやつて椽の下に隠れて居る……そんな事は知らないでも宜いぢやないか。

であるから私は此の思想戰に就ては、もつと大きな方面から考へなければならぬと思ふ、個人の思想の自由とか言論の自由とか言ふても、全體の大事を誤るやうな者は暗愚な人間である、自分の自由であるとか權利であるとか云ふやうな事は、全體の幸福を保全するが爲めには制限されるは當然の事である。それが分らんで何處までも自分の自由を主張しやうと云ふやうな者は、社會的に言つたならば共同生活の法式を知らぬ者である。國家的に言つたならば國民の協力一致を破る所の者であるから、どつちから考へても完全なる國民にあらず、完全なる社會の人でない、どうしても左樣な者は山の中に一人木に括つて置くとか、無人嶋にでも追ひやつて、結を取上げてこつちに渡れんやうにすると云ふのが當然である。本當に言へばさう云ふ危險性を帶びて居る思想のものは、その料簡が直ほる迄は先づ國民に接觸しないやうに、遠嶋に處して、結を取上げてしまふ位の事が當然だらうと思ふ。（未完）

聖德太子の憲法に就て（三）

本多日生

これは憲法本紀にお示しの所を申上げたのでありますが、これから十七箇條の大體を申上げやうと思ふ。

一　以和爲貴

第一條は「和を以て貴しと爲す」とお定めになつて居る。人間は私の心があり、隨つて黨派が出來るから、それが爲めに間違つた事が多く現れて來る、この社會國家を組立てゝ居る原則は何かというと、和いだ精神を以て互ひに諧和し調和することである、諧々に心を協せて行くやうにしなければ、遂に何事も壞れてしまふ。現代の文明を稱ひして居るものはこの反對の觀念で、爭ひを以て原則として來たのである、デモクラシーの思想は、要求を主として行くから爭ひである、人格を尊べ、平等を認めよといふ風に要求の側から議論が起つて居るのである、佛教に言ふが如くに人皆佛性ありと云ふやうな議論でないのである、我れに自由を與へよといふのである、壓迫された者から要求するので、その間に爭ひがあるすべて西洋の文明は左樣な革命といふ事から來て居る、革命といふのは今迄あつたものを顚倒かへして行くのである、第一が宗教革命、第二が政治革命、第三が經濟革命と言つて、

すべて革命といふ事に依つて行くのである、現在の努力して居るのは經濟革命をしやうとして居るのである。革命は皆爭ひである、革命の亂である、さうしてその革命をやつて今度社會を構成して行く時にはどうなるかというと、遂に露西亞のやうに、從來の制度を破つて現れるものがやはり極端なる壓制虐殺であつて、この和いだ精神から社會を組立てるのでないから、何事も失敗に終るので、この事を、憲法の一番始めにお示しになつて居る。我國の資本勞働の問題に於ても之を原則にしなければならぬ、クロポトキンがどうだの、マルクスがどうだのと言つた所が、これ等は反抗を說いて居る所の學者であるから、根本の觀念が間違つて居る。枝葉の事を幾ら論じても、根本の原則を間違へたやうな學者の說を採るといふ事はどうしても出來ない、我國は和魂を發揮すると申して、人の心に和いだ精神があり、その方法を盛んにして、荒らいだ精神を抑へて行くといふのが日本の神代からの敎でありますから、これが鍵となつて現れて居る、鍵は即ち和を以て貴としと爲すといふ象徵として現したるものである。

二　承詔必謹

第二は「詔を承けては必ず謹しめ」といふ事であります。これは國民が陛下の詔に對する心得をお示しになつたのである、日本は決して單に自分の考を本にして行くべきではないので、大切なる事は最初に　天照太神の神勅があり、國を建てるには神武天皇の詔があり、御歷代何れも大切なる事は皆詔から出て居る。維新の皇謨も詔である、憲法發布も詔である、敎育の勅語も詔である、その詔に依つて大切なる事はお示しになつて來て居るのであるから、その詔を遵奉して、聖旨に副うて行くといふが國民としては大切な心得であります。此處にお示しになつて居る事は、

君は天に則り、臣は地に則る。

と傳せられて居るので、これは決して國民を輕んずる意味ではない、國民は地の如く、總ての物が發生するのは大地であるからである、草木禽獸みな接息するといふのは地があるからである。けれども地があつても天之を覆はなければ、何物も成育しない、天地位して萬物所を得る、「君は君なり臣は臣なり」、臣だからと言つて抑へつけられるやうに思つたり、「親は親たり子は子たり」、子と言はれるのを忌〻しいナンと思ふのは、現代人の餘程愚な所である、西洋感染から來るから、家來と言はれたならば忌〻しいとか、子と言はれたら忌〻しいとかいふのである。けれども日本は建國以來君臣の分既に定まる、天覆ひ地載せて行くものであつて、地が忌〻しいと云ふやうな事を考へて、一遍位他の方が上にあがらうといふやうな事を言つたならばどうなるか。

天覆ひ地載せて四時順行し、萬氣通ずることを得、地天を覆はんと欲すれば則ち壞れを致すのみ、是を以て君言へば臣承はり、上行へば下效ふ、詔を承けては必ず謹しめ、謹しまずんば自ら敗る。

地といふ事は何も抑へつけられた意味ではない、地は地として萬物を載せて尊い意味を持つて居るのである、國民の力は尊いもので、先帝の御製にも國民は皆國の寶であると仰せられてあるが、そのお言葉は神代から傳はつて居るので、日本に於ては決して人民を傷害された意味は少しもない。親が汝は子であるといふことは、傷害された意味ではない、非常にそこに暖かい慈愛もあれば、子の生育を望んで居るのである。我國は神代より君臣の分定つて居る、それを今にして疑ふに至つては則ち國賊である、デモクラシーの思想が誤りを取りたがるのは、そこであつて民本とか民主とかいふやうな事をいうために、何だか自分が主人になりたいといふやうな考へが起つて來る。そこで詔を承けては必ず謹む事を忘れてはならぬといふが、憲法の第二條であります。

三　以禮爲本

第三條は「禮を以て本と爲す」と言つて、人間は禮法を守らなければならない、「鼠すら皮あり、人にして禮無からんや」と言つて、鼠でさへも着物を着て居るではないかといふ事が書經に出て居る、人間にして禮無ければ鼠にも如かざる者である、禮とは「人の體なり」といふて、人間は禮法を守る事に於て其處に價値があるのである、佛敎の中にも說いてあります、須摩提女が裸で暮して居る國の王樣の緣に行つた所が、婆羅門の眷族が素ツ裸で酒を飲んで豚の足を切つて嚙りながら亂醉をして騷いで居る、さうして此處に來て禮拜せよと言つた時に、須摩提女が、そんな素ツ裸で醉つぱらつて騷いで居るやうな者は拜まぬ、自分は佛樣の敎を奉じて居るが故に人は禮を守らなければならぬ、そんな亂醉して居るやうな者

は人で無いと言つた、婆羅門の眷族が怒つて吾々に侮辱を加へたといふので、宮城を燒討すると言つた、須摩提女は燒討しても宜しい、左樣な不作法なる者は人間でない、況してや宗教家が人から拜んで貰はうといふのは、素ツ裸で亂醉して拜めナンていふ事は無いと言つた。それから婆羅門が怒つて燒討をやりかけた所が、そこに天祐が下つて彼等は懲戒を受けるのでありますが、鼠すら皮ありと書經にいふたのも、須摩提女が人にして禮無からんやと言つて、五千人の婆羅門の輩を對手に闘つたのも同じ事であります。所が現代人はこの秩序禮法を嘲るやうになり、禮とは特權階級に對する屈從ぢやといふやうな事を言つて居る、子供が親に頭を下げるのも、下の者が上の者に頭を下げるのも皆いかぬ、上下といふやうな事はいかん、皆平等ぢやと言つて、世話して呉れた者も世話になつた者も同じやうに言つて、終らがしてしまふ。世の中はそんなものではない、家に於ては親子の關係があり、兄弟の關係がある、弟は兄に向つて頭を下げるのは當然である、社會に於ては先覺者後覺者の關係があつて、必ず世話になつて居る者がある、國に於ては國體があつて上下の分が定つて居る、西洋人のいふやうな極端なる平等などといふ事は眞理でない、左樣な事を言うて居るから、西洋の國家が潰亂の巷となるのである、そんな國の事を眞似をする必要は無いぢやないか。唯だ無闇に壓迫をして不當な壓制をするといふ事は無論惡いが、今のやうに極端なる平等を夢みることは、秩序ある社會よりも、更に大害があると思ふ。昔から政治を執つて多少の壓迫はあつたと言つても、今日のやうな激しい殘害は無い、壓迫を除いたといふその實西亞はどうであるか、最も悲慘な暴政が行はれて居るではないか。それは壓迫はしてはいかぬけれども假りに多少の壓迫があつても、一概に唯だ左樣な自由がよい、平等が宜いといふよりもよい、況してや壓迫にあらずして正當なる秩序を立てるに於て、何の爲めに反對するのか、又多數民衆には相當なる統率がなければならぬ、大勢でやつて行く時分に單に平等だといふ事ではいかぬ、誰か引締まる者がなければ、その取締が附かぬぢやないか、電車に乘らうと言つても、無闇に走らして電車が停まらんことになつたならば、どうする事も出來はせぬ。そこに必ずやそれだけの上下の分、禮法といふものが定まらなければならない。

そこで位次と言つて、位といふものがどうしても立つて來なければならぬ、即ち親は親の位があり、子は子の位がある、親は床の間の前に坐つて子がその下に坐るのは當然である、それを「昨日はお父さんが其處に坐つたから、今日は私が坐る」……そんな事を言つて位を紊るといふやうな事は天下潰亂の基であります。物事は序と言つて禮法が大事である、夫婦の間にも尚ほ且つ禮を破らんやうにせよ、毎日心安く出會ふ友達の間にも禮儀は崩すなと言つてあるので「毎日會つて居るのに挨拶ナンて面倒だ、止めやうぢやないか」といふ譯にはいかぬ、毎日會つてもやはり「お早う」とか「御機嫌よう」といふ「そんな事は昨日言つたぢやないか」……さういふものではない、やはり「御機嫌よう」といふやうに、寧ろ屢々會ふ者でも叮嚀に禮法を守れといふ事は、昔から言うて來た事である、一つ崩れかけると始末の惡くなるのが人間だから、そこで禮は大切にせよと言つたものである。それを譬るやうな議論を新しいと言つて居る、特權階級に頭など下げる事は無いと言つて、無闇に頭をフン反りかへるやうな事ばかりやつて居る、それで終ひにはその頭を打割られてしまふ、馬鹿な話ぢやないか。故に

百姓總有るときは國家自ら治まる。

即ち百姓禮を失ふ時は、國家を潰亂の巷に陥すると聖德太子は示しになつて居る。

四　明辨訴訟

その次に第四條は「明かに訴訟を辨ぜよ」といふので、裁判をするには公平を忘れてはならない。これは今の裁判上の爭ひばかりで無く、政治上に於て、總ての行政上の事でも司法上の事でも、物を裁いて行く時分には不公平なる事をしてはいかぬ、それが裁判に賄賂が行はれるやうになつて來ると、金を持つて居る者が勝つことになる。

財有る者の訟は石を氷に投ずるが如く、乏しき者の訟は水を石に投ずるが如し。

と書れて居る、金の有る者の訴は石を水の中に投げたやうに必ずそれが通る、貧乏な者の訟は水を石に投げたやうに、皆彈きつけられて終ふといふやうになつてはいかぬ、故に行政司法ともに公平を忘れぬやうにせよと示されて居るのであ

ります。今日は總ての事務が滯滯をしてグズ〳〵して居る、これは何か一物あるので、グズつくにはグズつく譯があるといふやうな事になつて居るやうでありますが、これは實に困つた事であります。

五　懲惡勸善

その次の第五條は「惡を懲らし善を勸む」といふ事、これは所謂教化を明かにするのであつて、どうしてもこの世の中には勸善懲惡の教化がなければならぬ。それは唯だ政治上法律上の賞罰をいふのではない、道德的宗教的に人心を感化して、さうして善い事は皆が效つて行くやうにしなければならぬ、その場合に惡い事をする者を放して置けば、遂に國家を覆へすに至る。それ故に何處までも惡い者は之を誡めて、さうして善を勸めなければならぬ。善の中に於ては國民は君に忠といふことが一番の道德である、此處にも書かれて居る、

人皆君に忠なること無く、君民に仁なること無くんば、

それ大亂の本なり。

上に立たれる方は下を憫れむ事を忘れ、下の者が上に忠義を盡す事を忘れたならば、日本の國は亡びてしまふ。そこで仁と忠とが交叉されて、上に立つ者は仁愛の心を養い、下の者は忠節の心を盡し、上下相結んで、始めて日本の國家の隆盛があるとお示しになつた。それから推し進んで總ての惡を懲し、總ての善を勸める意味に行くのでありますが、仁と忠とを以て我が道德の本にされたのであつて、決して自由とか平等とかいふ事が日本の道德の第一義ではないのである。それは自由といふ事もよいであらう、平等といふ事も或る意味からはよいであらうけれども、それは仁なり忠なりの道德の下に働く所のものであるといふ德目の位地、輕重本末を知らなければならぬ。女房を可愛がるは善い事ではあるが、親に孝行する道德と、女房を可愛がる道德との位分を知らなければならぬ、女房を可愛がる方を上に置いて、孝行の方を下に置くならば、それは間違つた事である。唯だ自由であるとか平等であるとか言つても、それは仁なり忠なりの下風に立つ德目であることを、國民は領解して居らなければならぬ。

六　各有任掌

その次の第六條は「各〻任掌あり」といふ事を示されたので、これは政治の上に役目が極つて居るから、その分掌した所の受持を濫らぬやうに、自分の擔任したる仕事は、能く迄も責任を果して行かなければならない。又その役向き〳〵に於て適當なる人を選んで之に任じて行くやうにしなければならぬ、情實に絡んで、蔓蔓の蔓を傳つて行くとか、種々の手蔓を以て人を取立てゝ行くとか云ふことになると、その職務に適任者を得る事が出來なくなる、そうして終ひには不適任な者ばかりが一パイその役に居るやうな事になつてしまふから、各〻その任掌職分を明かにして、適材適所といふ事に注意して、政治に私の無いやうにしなければならぬといふ事が書かれて居る。

七　早朝晏退

次に第七條は「早く朝し晏く退」といふ事。これは役人が怠けてはいかぬといふ事で、朝をそく十時か十時半に出勤して、新聞を長いこと讀んで、書類を開けたかと思ふと十二時になつて辨當を食ふといふやうな事をやつてはいかぬ、早くから役所に行つて能く事務の纏りをつけて、少々時間が遲くなつても片附けて歸るやうにしなければならぬ。中々政治の仕事は多いのであるから、グズ〳〵して居ると何でもない事に事務が遲れて、さうして人民はそれだけの迷惑をするのであるから、必ずや勤勉にして政務の滯滯しないようにしなければならぬといふ事が書いてある。これは主に政治家に關した事である。

八　信是義本

次に第八條は廣い意味に於て「信は是れ義の本」といふ事が書いてある。信といふ事はまことであつて、僞らざる心である、嘘をついたり約束を違へたりするやうでは、義を立てる事は出來ない。義とは爲まじき事はせぬ、爲べき事はするといふのである、所が言ふ事が間違つたり嘘をついたりするやうな事では、義が立たない。義は人間行爲の標準であつてこの事はしなければならぬといふ事は積極的に進んでしなければならぬ、義を見てせざるは勇無きなり、不義は如何なる事があつても我れ之を爲さずといふ、そこに人の價値が出て來るのであります。その義を努め、不義を警しむる事は、信といふまことから起つて來るのであると書かれて居る。

九　絶忿棄瞋

その次の第九條には「忿を絶ち瞋を棄てよ」といふ事が書

いてある、これは怒も瞋もどちらもいかりでありますが、一寸心の表面にブン〳〵怒つて居るのと、腹の底から怒りの火が燃えて來るといふやうな意味のいかりとの二つであつて、一時の怒で、あとで笑つてしまうからと言つてもいけない、又何年でも忘れずに考へて居るやうな瞋は無論いかない、「俺は怒つたけれどもナーニあれはその時限りだ」それでもいかんといふのが始めの怒を絶つといふ事である。腹を立てるといふ事は一時の事でもいかん、腹の底から燃え立つといふやうな強い怒は無論いかん。何故怒はいかんかと言へば、人間が腹を立てるといふのは大體慢心から起る事である、唯だ腹を立てるのではない、その前に、自分は間違ひが無い、人は間違ひがある、自分は賢い、人は馬鹿だといふ事を前提にして居るから腹を立てるのである。そこで瞋を棄てるといふにはどうしたら宜いかと言へば、

我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず。

といふ、所謂人格を認める觀念が發達して來なければならぬのである。自分は聖人ではないから、一から十まで必ずしも善いといふ譯に行かない、又向ふの人がまるきり馬鹿ではないから、彼がいふ事の中にも從はんならん點もあらうといふ譲つて行く精神である。今日はその精神が無いのである、詰らない奴が「俺が〳〵」と言つて、餘程立派な話でも寧ろ青かなくなつて來て居る、さうして煽てさへすれば何ぼでも煽てられる。その愚な調子といふものは何とも言へない、非常な立派な萬古不滅の大眞理を古臭いと言つて、屁理窟のやうな、蛙理窟のやうなガア〳〵いふ下らない事を新しいナンと言つて調子に乗つて居る、その愚かな事は實に抱腹絶倒、何と言つて宜いか分らぬ。そこでワイ〳〵蛙の鳴くやうな事を言つて、終ひには肝癪を起して、「俺の言ふ事を聞かないか」と言つて喧嘩をする、それは狂人格が出來て居らぬからだ。自分ばかりえらいやうに思うて居るけれどもさうではない、聖德太子も、

相共に賢愚なること環の端なきが如し。

と言はれた、これは實に立派な言葉である、丁度賢いとか愚かであるといふ事は環みたやうなもので、どつちが賢い、どつちが愚かといふ事は無い、グル〳〵廻つて居る、或る事は自分が賢くて向ふの愚かなことがあるけれども、又他の事に於ては彼が賢くて自分が愚かなることもあるから、互ひに或は賢或は愚なる事環の端なきが如くである、之を思へば決して左樣に腹の立つべきものではない。それを忘れて少し地位の上の者が慢心になつたら仕方が無い。今は團體的慢心も起つて居るけれども、殊に禿頭の慢心も始末の惡いものである家の中でも親父であつて一番地位が高い、親類中でも金が有ると云ふやうな親爺が、頑迷固陋の頭でブン〳〵言つて居るのは、仕方が無い。それは國家に於てもやはり地位あり權力ある者が頑固でやつて來ると困るであらう、西洋は今迄さういふのが出たから、今度は民衆の力に依つて「ヤレ〳〵ツ」と言ふに至つたので、これは皆慢心と慢心との鉢合せである。相共に賢愚なること環の端無きが如しといふ事を考へたならば、斯の如き混亂は起らぬ、教を重んじさへすれば、如何なる地位に居る者と雖も、それに從ふことになるけれども、それを人間同士で「貴樣のいふ事より俺のいふ事が」「ナニ糞ッ」と言つて反抗する、さうして唯だ利害に依つて相爭ふのであるから、斯の如くして天下が潰亂の巷となるのは當然の事である。だから先づ怒を絶つといふことでなければならぬ、總て今日の運動は、勞働運動でも肝癪玉が破裂したといふやうな譯で、革命ナンといふ事は皆これ怒りの結晶である、非常な亂暴な事をやるのであるから、それは皆憤りの中から生れたもので、無明緣起である、煩惱緣起である、その結果は知るべきのみである。

（未完）

日蓮主義畸人傳

七、四日市の兩女史

畸人傳中に編するには少し當らないが、新年の事故新寺建立に偉勳ありし兩女史を紹介する。

兩女史、名は佐藤柳、服部壓、何れも伊勢國四日市に生れて、同港場の進取的氣分の中に育てられ、曾ては八重の潮路を乘切つて海外に渡航した事がある。家の宗旨は伊勢の名物高田派念佛であつたが、日蓮主義の教を聽いて、過去世の宿緣蕾發し、遂に領解し、忽ちに宗旨を改めて、統一團分團創立の中堅となつた。二人ともその夫は改宗に反對である、こり固つた一向宗氣質に迫害と壓迫の手は次第に加つて來た、打たれる、蹴られる、或る時は兩親の涙となり、或る時は親類の品義となり、文字通りに殉教者の傳を身讀した兩女史は、霜に風に益々その操を發揮する松のそれの如く、『身命も惜しからじと御本尊に誓ひしからは、法華經の信仰を捨てよとならば寧ろ離婚せられよ』と計り、か弱き女の身に、或は雨の夜に宣傳のビラを張つたり、或は戸別に同志を勸誘して日蓮上人の教を顯力弘通したり、兩女史の至誠と忍辱と精進とは遂に頑固な夫と一族とを感化し、又山路氏を改宗せしめて新寺建立の敷地を寄進せしめ、遂に正法宣傳の道場を得るに至つた、末代今の世にかゝる大善根を積みし兩女史の偉勳を讀んで益に紹介する次第である。

（國友記）

佛教信仰の正統

本多日生

一〇、實在を意識するの信仰

次には法華經であります。それは屢〻諸君がお聞きになつた通り、先づ迹門に於ては方便品より起つて種々說いてあるが、方便品は何が說いてあるかと云へば、第一佛の智慧の廣大なる事を讃歎して居るものである。さうして又慈悲の廣大なる事に移つて、それが誰の力に依つて救はれるかといふ時に、譬喩品に至つて「唯だ我れ一人のみ能く救ひ護ることを爲す」と言つて、この釋迦牟尼の一人の力で救ふことが出來るといふことを迹門に於て、說いて居るのである。迹門の如何なる所を見ても、釋尊は「他では些と力が足らん、他の警察署の非常巡査を呼んで來い、憲兵の方からも來て貰ひたい」と云ふやうなことは、決して言はれた事は無い。十方より諸佛は集つたけれども、それは何も釋尊の力の足らぬからではない、集りし者は皆な我が力の分れである、我が分身の如來である、我れの力であるといふことは言はれたけれども、自分の力が足らぬから他の佛樣に手傳ひを賴んで來て貰つたと云ふやうなことは無い。如何に多く集つても皆なこれ一釋迦の活動の枝葉であるといふことを說かれた。迹門だつて見やうに依つたならば、如何にも釋迦が偉らい者だといふことのみ分つて行くのである。それを間違つた者は、方便品で智慧を說くとお釋迦樣を忘れてしまつて、智慧の方から實相にぬけて、實相と自分とと云ふやうな間違ひが起るけれども、迹門は佛智を通して實相を觀るといふことは、動かすべからざることである、其處が哲學と違ふのである、佛樣の智慧を通さずして、自分の智慧で宇宙の眞理を觀たならば、本當のものは見られないから、釋尊の御智慧を通して諸法の實相を紹介して貰ふのである。釋尊の智慧を通して紹介せられたるが

試に、舍利弗も尙ほ覺ることを得たのである。それでさへも釋尊は言はれた、汝舍利弗、それは我が說法を聞いて汝が理解した事に依つて覺つたのではない、汝が如來を信ずる所の信念を有するが故に覺りを得たものである。「信を以て入る事を得たり、己が知分にあらず」と智慧第一の舍利弗さへも戒められて居るのである。その意味を能く考へなければならぬ舍利弗すらその戒めを受けて居るのに、舍利弗に及ばざると遠き者が慢心して、自分で坐禪に這入つて宇宙の實相を覺られると思うたならば、假令天台と雖も傳敎と雖も、そこには少し薄馬鹿な所があるのである。彼は舍利弗には及ばざる者であらう、舍利弗すら己が智慧にあらずと戒められたのであるから、迹門と雖も信仰に這入つて、先づ佛の偉大なることに信念を捧げて、而してその敎を受ける所に智慧が開けて來るのである、信を以ての故に智慧を生ずるのである、それが即ち迹門の敎であります。

それから本門に行けば、これはもう無論の事釋尊の偉大を壽量品に於て顯本遊ばされたので、屢〻この講演に於てもお話するが如くに、絕對の本佛をお示しになつて居る。小乘敎のやうに過去に諸佛がある中の今の佛としての信仰でなくして、今の釋迦牟尼佛は久遠實成の如來である、常住不滅の如來として三世益物を說き、今この娑婆世界に居ます釋迦牟尼佛は、餘の百千萬億那由他阿僧祇の國に於て、衆生を導利すると說いてある。この娑婆世界を中心にして、十方に大活動をするといふことをお示しになつて居るのである。それであるから小乘敎の時間を中心に置いても、釋迦牟尼佛がこの中心よりして、過去に未來に三世を貫くの本佛であるといふ事を現し、他の諸經に娑婆世界の衆生は釋尊に救はれると說いてあるが、十方世界も亦みな釋迦牟尼佛の活動舞台であるといふ事を說いた。即ち三世十方を貫いた一大本佛の活動である、その本佛は今我が前に釋迦牟尼佛としてお出ましになつて居るのであるといふことを敎へられたものである。此處まで行つては最早や釋尊を尊ばざるを得ないのであつて、釋尊より以上の佛とか、釋尊以外に信仰を移すべき觀念は一點も殘らぬのである。壽量品まで來て尙ほ且つどうも釋尊に對する信賴の念が決定せぬといふに至つては、眞に罪業深き者と言はねばならぬ。

汝等智あらん者、此れに於て疑ひを生ずること勿れ。今釋迦牟尼が說いた所の、この壽量顯本の教義に對しては、決して疑ひを抱いてはならぬ。それでも罪深くして疑ひの心が斷ち切れないならば、

當に斷じて永く盡さしむべし。

この釋尊が力を加へて汝の疑ひを斷ち切つて、再び疑ひの起らぬやうにしてやらうといふことを仰せられて居る。故に若しも自分にこの佛教を聽いて、尙ほ釋尊に對する信念が決定をしない、何か氣がゝりな事が他にあつて、釋迦如來を絕對の本佛として渴仰することが出來ないとするならば、其處に殘つて居る疑ひは、佛の力を借りて之れを斷ち切らんければならぬ。尙ほ斷ち切ることが出來んならば、その人が罪業深重にして正しき信念に這入ることを得ないものである。假令それが日蓮宗の本山の住職であらうが、大僧正であらうが、大學者であらうが、そんな事は人の附けた假の名前で、實は罪業ふかき者にして本佛の絕對を信じ得ない者である。その通り經文はなつて居る、日蓮聖人もその通り說いて居る。何も其所には問題は無い、壽量品まで來て其處に未だ問題が殘るなどと云ふのは、全く罪の深い、輕く言うても學問が無いと云ふことになる。左樣な譯であるから法華經は釋尊中心の思想であると云ふ事に就ては、議論の無い話である。

それから段々進んで、妙音菩薩品に至つて、東の方から妙音菩薩が來られるのであるが、その時に東の方の世界の淨華宿王智佛といふ佛樣が、妙音菩薩に何と言つて居られるか、「お前は娑婆世界に行つたら、釋迦牟尼佛は小さい佛であるお前は大きな男であるから、こんな小さい佛があるかと思うて侮りを抱いてはいかん。釋迦牟尼佛は娑婆世界を敎化するに適當な姿を取つて居られるのであるから、表面から見た形の小さいことを以て、之れを卑しめてはならぬ」といふ事を態々と言はれて、それから妙音菩薩は釋尊に歸依を捧げる爲めに、娑婆世界にやつて來るのであります。それから觀世音菩薩普門品に至つて、西の方から觀世音菩薩が來るのも、やはり釋迦牟尼佛に歸依を捧げんが爲めに來て居るのである。故に「東西の二方を擧げて十方を總す」と云つて、十方の世界に活動して居る總ての佛の弟子達も、みな釋迦如來に渴仰を捧ぐべく集つた事が說いてある。普門品を見れば觀音が有難い、妙音品を見れば妙音菩薩が有難いと云ふやうな事になるに至つては、少しもお經を讀む所の識見を持たない者である。誰が無釋するの、何宗の議論だの、そんな事を勿體つけることとはない、それは佛教の經典を理解するだけの能力の闕除して居る者である、左樣なことを許すから宜い氣になつて何時迄も云ふのである、もう少し分かるやうに見なければ、お經を讀むの、講釋をするのと云ふ事は、勿體至極も無い事である、その意味で見て行かなければ分りはせぬではないか。神力品に於ては十方より何といふ聲が來て居るか、十方は「通一佛土」と言つて、神通の力を以ての故に、十方世界と言つても別々の區域が無くなつて、この世界あの世界といふことはない、通一佛土と言つて通じて一佛土になつた。その時に十方の佛、十方の菩薩は、皆な釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛の方を向ひて、掌を合せて悉く「南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛」と唱へて居るのである。それは阿彌陀樣であらうが、藥師樣であらうが、如何なる佛でも菩薩でも、皆な釋尊の方に向つて、吾々が釋尊を拜むと同じ樣に南無釋迦牟尼佛と唱へたといふ事は神力品の中にハツキリ說いてあるぢやないか。であるからお釋迦樣を中心にして考へるといふことは、法華經の上には何等疑ひは無い。

然らばその次に涅槃經に行つてはどうぢや、これはもう釋尊が御涅槃なさると云ふので、大勢の佛弟子が集つて、色々の事をお尋ね申し、最後のお禮を申上げるのであるから、涅槃經といふものは讚佛偈といふもので持つて居るのである。お釋迦樣の有難かつた事をお禮を申上げる事で一パイになつて居る、「あなたの御說法を聽きまして、私のやうな無智無學の人間も信心することを得ました」、私も哲學者として威張つて一人理窟を言つて居つたけれども、あなたの深い眞理の說明には感服をして、お弟子になつて、永い間お世話になりました」と云ふやうに、皆な釋迦牟尼佛の智慧の側、慈悲の側、活動の側、あらゆる方面に對する感謝を述べたものが、載つて以て涅槃經といふものが出來て居るのである、「どうもあなたに永らく御厄介になりましたけれども、あなたでは少し力が足らぬと思うて居りましたが、愈々御涅槃なさるとすれば、あとはあなたの御厄介にはなりませぬ」と云ふやうな事を言ふた者は一人も居らんのである。涅槃經三十六卷を縱橫十文

字に研究して御覧なさい、弘法大師や法然上人のやうな議論は、嘆にも出る所は無い。それと丁度正反對なる意味合ひが經文の全部に滿ちて居るのである、嘆と思ふならば大涅槃經を拔けて御覧になるが宜しい、釋迦牟尼佛に對する感謝が一パイあるのである。さうしてその中の總大終となつて居る所の大迦葉菩薩が、最後に讃佛偈を述べた時は、もう色々の人が褒めて〳〵て褒めやうがなくなつて來る。演說などでも同じやうな問題を話すことになると、前の人が二人も三人も話してしまふと、どうも言ふ事が無くなるといふやうなことがあるが、大勢の弟子が皆な佛を褒めたのであるから、同じ事が重なつて來て、終ひには言ひやうがなくなつた。それを大迦葉が一番終ひに總括りに讃佛偈を結ぶのが、日蓮聖人の何時もお引きになる所の經文である。それはどう云ふ工合に言つて居るかと云ふと、

一切衆生の異なれる苦を受くるは、如來一人の苦なり。

これは大迦葉が申したのであつて、佛樣を本當にお褒め申すには、私共の智慧が足らない、言葉が足らない。けれども飜つて居つても濟まぬことであるから申上げますが、一つの點を以て佛を讃歎するには、如來の慈悲を讃歎するより仕方が無い、その慈悲も雲の上の遠い所に御座るとか、西の方に御座るとか云ふものでは有難く無い、吾々迷へる人間の中に姿を移して、悉多太子としてお生れになり、九横の大難にも遭ひ、樣々なる難難辛苦を嘗めて下さつた、貴き御佛は決して提婆達多に石を打つけられるやうな事は起らないでも濟むのである、或は阿闍世王が醉象を放つて踏殺させるといふやうな危險を受けなくとも、紫の雲を踏んで淨土の中に居つて宜い尊いお方が、吾々を惑れむが故に、この穢れはてし人類の中にお生れになつて、種々なる難難辛苦を嘗め、愚癡蒙昧なる人々に偉大なる教を說き與へて導き給うたこの御親切、遠い高い所の御親切ではなくして、近く吾々人類の中に身を現はして、吾々に直接したる救ひをお與へ下さつた事を謹んで感謝致しますといふ事を、大迦葉菩薩が申述べたのである。これはどう云ふ意味になるか、阿彌陀樣がえらいとか大日如來がえらいとか言つても、それは遠い高い所のものである。大日如來の言ひ草ナンといふものは、第一言ひ草から變てこではないか、人間のやうな馬鹿な者には逆も本當の事は言つ

ても分らんから、そんな所に出て話すやうな佛は駄目だと云つて、人類全體を侮蔑したやうな事を言つて居る。さうして雲の上で法身の菩薩だけに內緒で話をしたから、其處で眞言秘密の教ちやと云ふ。そんな人間に聞かせられないものを、人間の中の宗旨として持つて來るのがをかしいちやないか。であるから眞言宗ナンといふものは、飛行機にでも乘せて雲の上の方に追ひ返してしまつたら、それでお終ひのものちや。又阿彌陀樣が有難いと言つても、阿彌陀樣はこの人間の世の中に近付いた、吾々人類の中に生れて濟度を爲さらん方である、西の方の佛である、その西も一寸隣り位ではない、非常に遠い所である、諸君考へて御覧なさい、西方十萬億の佛の世界を過ぎて西に國ありといふ、十萬億の佛の世界を過ぎてと言つたらどういふ事であるか、一つの佛の世界といふのは、三千大千世界を以て一佛國土と爲すと云ふのであるから、十萬億の三千大千世界を過ぎて向ふの方にあるといふ、隨分遠い、何ぼ遠くても直ぐ助けに來るといふけれども、直ぐ來るといふものならば、さう遠い事を說かないでも宜いのである、それを遠く說いてあるのは、遠く說くべき意味があるので、即ち娑婆世界の人々が直接敬くべき佛で無いといふ意味が十萬億の佛の世界を過ぎてといふことに含まれて居るのである。釋尊と混線せぬやうになつて居る、番號が一つか二つの違ひならば混線するけれども、十萬億も番號が違つたならば、電話が混線せぬといふ譯ちや。

左樣にして涅槃經に至る迄、總て佛教といふものは釋尊中心の思想であつて、洵にこれは明白な事である。私は釋迦如來を根本にして信じなければならぬといふ事は、一切經を以て之れを證明するので、その思想の龍潔明瞭なるものは法華經の壽量品であると斷言するのであります。

それから第二の佛教の歷史に就て之れを考察するとどうなるか、これは歷史も長い事であるけれども、大體佛教信仰の順序といふものは、明かに分つて居るのである。釋尊が涅槃されない以前は、活ける釋迦牟尼佛に皆な歸依渴仰を捧げたもので、釋迦が涅槃されてからして、どうしたら宜からうと云ふ問題が玆に初めて起るのである。それ迄は皆な活ける釋迦牟尼佛に救はれた。それは釋尊は智慧を以て說法されるばかりでなく、神變の力を以て釋尊に會うては如何なる者でも

皆な奇蹟的に救はれて居る。如何なる罪深き者でも、釋尊の前に出たならば皆なその邪心を變じて居る、舎衛摩羅のやうに千人斬をするやうな惡人でも、釋尊の御前にはその邪心を轉じて直ちに善人に成つて居る。又阿闍世王のやうに親を座敷牢に入れて殺したやうな惡人も、釋尊の教化に依つては善心に歸つて居る。又鬼子母神のやうな人の子を奪つて食ふといふ鬼婆も、釋尊の教化に依つては善心に歸つて居る。如何なる者でも釋迦如來に會つて惡心を轉ぜざる者なく、苦みを免れざる者無く、社會の救濟の目的は全部達せられて居る。死んでから救はれるといふやうな、そんな鈍間なものではない、會つたその時みな救はれて居るのである。

けれども釋尊が涅槃せられて、その救ひの中心であつた佛を失うた時、佛教徒の信仰が何處に行くかといふ問題が起つた。所が釋迦如來は涅槃なさつても、決して消えてしまつたものでないと云ふ考へは、その時から動いて居る、小乘經に既にその事が現はれて居る。小乘の四阿含の中の增一阿含の一番始めを開けて御覽なさい、一枚目の所に直ぐ何か出て來るか、「釋迦如來は御壽命が短かくして、肉身は涅槃にお入りになつたけれども、法身今尙ほ存す」といふ事が書いてある。又その他の阿含經を見ても、法身尙ほ存すといふ事は、皆な言うて居るのである。阿含經は佛は亡くなられたら煙のやうに消えてしまふと云ふやうな事を言ふのは、後の坊主が好い加減の事を言ふので、如何なる場合に於ても、釋迦牟尼佛が涅槃なさつてこれが消えるなどと云うたものは一人も無い。これは非常に大切な問題である、釋牟迦尼佛は誹行無常をお說きになつて、肉身の釋尊は無常の風に依つて涅槃せられたけれども、法身の釋尊は今尙ほ在ませりと信ぜられて居る。それで小乘經に於ても、大迦葉が釋尊の涅槃なさつた後に戻つて來た、迦葉は法の傳道に行つて居つたので、釋尊が御病氣であるといふ事を聞いて、驚いて拘尸那城に歸つて來ると、既に釋尊は涅槃せられて居つた。その時に大迦葉が釋尊の御足に縋つて、大變に歎いて泣いて居る。「私は教を傳へる爲めに行つて居つたのではあるけれども、佛樣の御涅槃の時に會ふことが出來なかつた、洵に殘念であります」と言つて、釋尊の御足につかまつて泣いた時に、釋尊は涅槃なさつて早や大分時間が經つて居つたけれども、身體を動かして

さうして手をお出しになつたといふことである。其處で大迦葉が非常に喜んで、「釋尊の肉身は涅槃なさつても、法身なほ存するが故に、如來を渴仰すれば直ちに感應あり」と言つて、喜んだのである。小乘經だからと言つて、佛が涅槃なさつたらそれ限りだと云ふやうなものではない。それでは全然で無宗教、無靈魂論みたやうなもので、宗教を成さない。故に釋尊の涅槃に對しては、非常に慎重な態度で、誰れ一人涅槃なさつたら消えるナンといふ事を云ふ者は無い、皆な法身今尙ほ存すと言つて佛を渴仰して居つたのである。さうしてせめてはその法身在ますといふ觀念を喚起す爲めに、釋尊の世にお居でになつた時の事を語り合つて、釋迦如來を追慕しやうといふ事が流行つた。信者が二人寄れば、「お前と私とあの靈山の說法の時に行つた、あの時のお話は斯う云ふ事で、斯う云ふ譬へがあつたが覺えて居るか」、「ウン、如何にも善い御說法であつた」といふやうに、釋尊の世に在ませし時を語り合つて、追懷の念に依つて釋尊を渴仰したものである。これは如何にもさうあるべき事で、吾々にしても親が死んだといふやうな場合は、やはりその通りであらうと思ふ。子供が寄合つたならば、「何時か花見に行つた時に、お母さんの御厄介になつた、あの時はお辨當は何で、朝晴い中から起きて吾々に拵へて下すつた」と言つて、その母の親切なことを語り合つて、母の世に在ませし時の事を思ひ起し、それと同時に母の恩を追懷するといふ事は、當然の事である。釋尊の涅槃に對してもその通りで、左樣な事が非常に流行つて參つた事蹟が、澤山の佛教の書物に現はれて居る。

それから次には釋尊の遺跡崇拜の信仰となつて、釋尊のお居でになつた場所を尋ねて歩いて、「此處が釋迦如來のお生れになつた迦毘羅衛城である」、「此所が釋尊の入滅なさつた拘尸那城である」。「これは釋尊の成道なさつた伽耶城である」。「これは釋尊の說法をなさつた靈鷲山である」といふので、釋迦如來のお居でになつた所を巡拜してさうして釋尊を渴仰した信仰であります。これが又非常に强く現れて居る、今日でもやはり日蓮上人に對すれば、小湊にお參りして、「これは日蓮聖人の誕生の地である」、龍の口にお參りすれば、「これは龍口法難の跡である」、と言つて追懷すると同じやうに、釋尊の靈地巡拜といふことがあつた。

それから一方にはその靈地巡拜と同時に起つたのが、釋尊の御舍利の崇拜であつて、釋尊を荼毘し奉つた時に、不思議な事には佛樣の御舍利といふものは金光を放つて居る。これは如何にも不思議な事で、今日の人は左樣な事を信じないであらうけれども、普通の人間の遺骨と違つて、釋尊の御舍利といふものは如何にも不思議な光を放つたものである。それを阿育大王が八萬四千に割つて、その小さな舍利一點に皆な大きな寺を建てたのである、有名な八萬四千の塔を建てゝ、それに皆な一點づゝの釋尊の分骨をしたのである。これは小さいけれども骨て世に在ませし大慈大悲の釋尊の御身體の分れであるといふので渴仰した。その思想は支那にも日本にも傳はつて、日本の聖德太子が米粒ばかりの佛舍利を得て、非常な喜びをして居られる、大和の法隆寺に安置したるものは何かと言へば、やはり釋尊の一點の佛舍利である。支那でも餘りに佛舍利渴仰の精神が强かつた爲めに、韓退之が排佛論の中にも、佛舍利を迎へるが爲めにあんなに騷ぎをしてはいけないと言つて攻擊して居る。それはその議論の善惡は別としして、兎に角當時佛舍利を渴仰する精神といふものは非常なものでまつて、五重の塔を建てるといふのでも、皆な佛舍利一點の爲めに立てたものである。今日名古屋の向ふに建つて居る日遲寺といふ寺がある、これは遲羅の皇帝が、確かに間違ひない釋尊の佛舍利であるといふ事を證明した爲めに、その佛舍利が遲羅の公使の手を經て日本に渡つて、遂に今大きな寺が建つて居る。何れの宗旨にも屬しない寺は、日本に一箇寺この日遲寺といふ寺がある、これは遲羅から御舍利を迎へて建てた寺である。斯の如く今でもやはり釋尊の御舍利に對しては、その渴仰は盡きない譯である。

それから一方には釋尊の御姿を形に現はして、或は木像とし、或は鑄物とし、或は石に彫るとか云ふ事が行はれた。今日印度にお出でになつても分かる通り、或は巖窟などに非常な勞力を費やして、巖をスツカリ彫り拔いて、さうして巖の奥から奥に佛像を彫刻する。或は又塔を立てゝ、今日でも殘つて居る釋尊の塔といふものは、實に大きな物である、淺草の十二階よりもつと高い、三十二丈も高さがあつて、周圍が十八丈といふやうな大きな石像の釋尊の塔が立つて居る、その塔の周圍に一ペイ緻密に佛像がすつかり彫つてある。これは皆な非常な金をかけてやつた事であるが、何れも釋尊を渴仰するの餘り、その像を石に刻み、或は木像にし、或は鑄物にしたのである。他のお地藏さんだの觀音樣などは一つも無い、皆なこれ釋尊に對する渴仰に外ならぬものである。今日行つて調べても、印度に彫つてあるものは阿彌陀樣だの地藏樣だのそんなものは無い、皆な釋尊である、さうしてお寺を建てるには先づ佛像を彫刻すれば出來るといふので、何處の本堂にも皆な佛像を祭つたが、これは悉く釋尊牟尼佛の像である。

それから又一方に現れて參つたのは、釋尊の御姿は涅槃に依つて見えなくなつたけれども、釋尊の御心は今尙ほ留つて居る。それは釋尊の御口より出でたる敎がお經に成つて殘つて居る、この御敎は釋尊の御心であるから、この法華經を手に取り、或は他のお經を開けて見て、「佛曰く」とか、「佛、舍利弗に告はく」とかあるのを見れば、これは釋尊の御心が文字になつて現はれて居るのであるから、このお經を通して釋尊を慕ふと云ふので、經典を敬ふ事佛を敬ふが如くすと言つて、活ける佛に遣ひ奉る觀念を以てお經を尊敬したのである。それは何もお經の文字やお經の書物を尊敬したのでは無い、又その中の意味が分かる分らんに拘らず、これは佛が仰しやつた、佛の御精神が其處に出て居るのである、「法華經とは佛の御心なり」と云ふので、之れを皆な渴仰したものである。その精神の最も能く現はれて居るのは、日蓮聖人の「守護國家論」の御文章に、法華經の勸發品を引いて說明されて居る、勸發品には、

若し是の法華經を受持し、讀誦し、正憶念し、修習し、書寫すること有らん者は、當に知るべし、是の人は、則ち釋迦牟尼佛を見たてまつるなり、佛口より此の經典を聞くが如し、當に知るべし、是の人は釋迦牟尼佛を供養するなり。

この法華經を受け持ち、或は讀んだり書いたりするのは何であるか、即ちそれが釋迦牟尼佛を供養して居ることであるといふ事が經文に說いてある。それを受けて日蓮聖人が守護國家論に解釋されるには、

この經文は、法華經は釋迦牟尼佛なり、法華經を信ぜざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り、この經を信ずる者

の前には、滅後たりと雖も佛在世なり。

前に申した通り、佛が涅槃されたと言へば、法華經を信じない人から見たら、如來は入滅されて何處に行つたか分らんと思ふけれども、法華經を信じて居れば、佛は常に世にお居でなされる、常住不滅と說かれて居るから、法華經を信ずるといふ事は、佛此處に居ませりといふことを信ずる事である。であるから「法華經を信ずる者の前には、滅後たりと雖も佛在世なり」――在世といふのは世にお居でなされるといふことで、曾て天竺に出られて法を說きつゝありし時を言ふのである。在世滅後ナンといふ事は昔の人は皆な知つて居つたけれども、今の人は些つとも知らなくなつた、「在世」とは佛の世に在ませし時である。今日は信仰を除つてしまへば、釋迦入滅後三千年になるけれども、法華經に依つて信仰の眼が醒めれば、「佛此に在ませり」今も尙ほ佛の御代であるといふ事を日蓮聖人は解釋されて居るのである。

左樣にしてこの經文を敬ふ經典崇拜の信仰となり、經典を通して如來の法身不滅の信仰となりして來ましたが、左樣な思想が佛教の歷史を傳うて居る。今日でもやはり釋尊の在世を墓ひ、釋尊の遺跡を墓ひ、それから釋尊の舍利を墓ひ、佛像を墓ひ、經典を墓ひ、その經典の中から色々分れて、或はお經の一句を書いて拜んだり、或はお經の善い所を書いたり、梵字を書いたり、塔婆などを書いて居るのも皆なさうである。字が書いてあるけれどもそれは皆な釋尊のお經である。さうして滅後に澤山寺が出來たけれども、之れを考へて御覽なさい、皆今申す木像を祭つて居るか、舍利を祀つて居るか、字を祭つて居るか、必ずさういふやうな思想がある。其處でその木像なら木像の中心は何處にあるかと言へば、皆な釋迦牟尼佛である、阿彌陀樣の像や、お藥師さんやお地藏さんなどは、紛れ者で、横から出て來たのである、物好きな奴がそんなものを拵へるので、佛教信仰の中心はさう云ふものでは無い。であるから日本でも昔奈良の六宗といふものがあつて、法相、倶舍、成實、律、三論、華嚴と宗旨は違つて居つたけれども、皆な本尊は釋迦牟尼佛である。後に至つて大日が出て來、阿彌陀が出て來たが、實に弘法、法然といふ者は佛教信仰の惑亂者である、之れを除けば日本に於ても何も無い。又大日などは今日餘り流行らんから、不動明王などが代つて

やつて居るけれども、これはもう婆羅門の方の神樣であるから何でもない、阿彌陀だけが一つ殘つて餘命が僅かに存して居る、これも長い壽命でもあるまいが、今の所ビク〳〵して居る。これはもう神聖な佛教が興れば影を潛むべきものである、何も名前がどうといふ事はないけれども、釋迦牟尼佛がお開きになつた佛教であるから、釋迦牟尼佛を中心にしなければならぬ。基督教で言へば、他の名前が莫つて基督を捨てゝしまふといふ事になれば、基督教といふものは壞はれる。又儒教にしても、「孔子や孟子は詰らん親爺だ、捨てゝしまへ」と云ふことになつてはいくまい。日本に於ては神武天皇を通して來た皇室の尊嚴といふものを、他を以て易へることは出來ないではないか、これは國體といふものを無くして、新たに國を建設するといふならば、或はどういふ方法か議する餘地があるけれども、國體すでに定まつて居るに於ては、之れを彼是言ふ餘地は無いと同じ事である。釋迦牟尼佛の御教を通じて、人類の間に佛教が興つて居る以上は、釋迦牟尼佛の御名に於て佛教徒の信仰を統一するといふのは、當然の事である、これはどうしやうといふ餘地の無い事である。である

からこの意味に於て佛教の歷史を傳うて考へても、釋尊中心の信仰が大部分のものであつたのである。

所がそれが次第に完結を告げて來る時には、實在の意義といふものが明かになつて來るので、唯今申した所の、釋迦如來は此處に在ませりといふ信仰が盛んになつて來ると、態々天竺に行つて伽毘羅衛城に釋尊降誕の事跡を訪はなくても、拘尸那城に涅槃の靈地を訪はなくても、その墓ふ所の釋迦如來は近く今此處にお居でになるといふ考へに依つて、滿足することが出來るのである。又小さな米粒ほどの佛舍利を、草鞋を穿いて尋ねて廻らなくとも、全身不滅の如來は今此處に居ませりといふ信仰を以て、之れを滿足せしむることが出來るのである。又大きな石に佛像を彫らなくても、高い錢をかけて木像を造らなくとも、活ける釋迦牟尼佛は今此處にお居でなされる、如何なる名畫工が描いても、活ける釋迦牟尼佛だけの美しき相好のある佛は描くことは出來ない。自分は貧乏で何も錢が無くても、全身不滅の尊い釋迦如來は、我が信仰の前に常にお居でなされるといふ信仰が起れば、大きな佛壇が無くとも滿足することが出來る。お經文を有難がること

も、一々面倒なお經を讀まなくても、佛教の信仰は教として斯ういふ事ぢやといふ大體さへ心得たら朝夕不斷に渇仰する。所の活ける釋迦牟尼佛に遭ひ奉る譯である。故に一々お經を繙いて見なくても、簡單なる唱へ言葉の南無妙法蓮華經を通じて本佛に遭ひ奉れば、事が足りると云ふことになる。斯の如くあらゆる思想が實在の信仰に依つて滿されるといふ事を考へなければならぬ、色々の信仰が一つの實在の信仰の中に皆な這入つて來る。在世を追懐する信仰は「滅後たりと雖も在世なり」といふことになる、遺跡を崇拜する信仰は、釋尊の靈地に行かなくとも、今現に此處に活ける佛がお居でになるといふことになる。佛舍利を尋ねて廻らなくても、全身不滅の佛が御座る、木像として造るには自分は十分の錢も無いけれども、それよりヨリ美しき佛は、我が信仰の前に存在せり、經文は一々讀むことは出來なくとも、その教を與へ給ひし活ける釋迦牟尼佛を吾々は信じて居る、足らざる所はお許しを願ひたいといふやうになつて、如何なる渇仰も實在不滅の如來を信ずるといふ意識の中に皆な包括せられて、總てが滿足されるといふことになる。

其處で日蓮聖人の教へた佛教の信仰は、この本佛を光揚し、この實在の意識を高調して、歴史的三千年の佛教の信仰を統合せんとしたるものである。お經の方から言へば先きに言ふ通り、法華經の壽量品を中心として、華嚴乃至涅槃までの一切經の思想を、壽量品の中心に依つて統合せんとしたるものである。決して小さい議論を以て他の宗旨などゝ喧嘩をするものではない、一切經の精神を統合し、多年の歴史の思想を統合して、日蓮聖人の教といふものは玆に立つて居るといふことが分かるのであります。左樣な次第であるからこの實在の意識といふものを、最も鮮明に最も正確にして置かなければならぬのである。能く人はその話を聞いた時には、「成る程」と思ふけれども、後とで直ぐ忘れるなどと言ふけれども、左樣なものでは無いと思ふ。例へば女なら女を見合ひをして「どうだ君、氣に入つたか」「ウン、氣に入つた、あれなら命まで捧げても宜いと思ふ」と言ひながら、それが二三日經つたら忘れてしまつたと云ふやうな事になれば、實はその時其女を見て、それだけの精神が起つたといふ事が嘘ナンである。人間の意識といふものに正確に寫つたならば忘れることは出

來ません、富士の山なら富士の山を始めて見た時、「成る程これが名高き富士の山か」と思つて見たならば、「君、富士の山を見たさうだがどんな山だ」「テア、どんな山だつたか忘れた、一寸眼に出て來ない」……さういふものでは無い。「それは斯ういふ形の實に立派な山であつた」といふ事は、何時でも眼に描かれて來る筈である。實在の意識といふものは、一遍心にそれが寫つて、「成る程吾が肉眼では見えないけれども、信仰の眼の前には佛在ませり、絶對無上のその姿は美くしく、その御覺りは無限である。智慧あり慈悲あり活動あり、實に何とも言へん尊い御佛が此處にお居でなさるのである」といふ事を心に本當に信じ得たならば、之れを奪ふといふことはどうしても出來るものではない、「頭を斬るからその信仰を撼てよ」と言つても、之れを捨てることは出來ないといふのが、宗教の尊い所である。それを何の迫害も無く小言も云はれないのに「ツイ、どうも忘れてしまつた」と云ふならば、それは信仰といふものではない、分つて居ないからさう云ふ事をいふのである。信心が定まつたならば、道を行く時でも、電車に一寸腰かけた時でも、或は嬉しいにつけても南無妙法蓮華經と唱へれば「あゝ有難い」と思ふ時、直ぐ實在の佛と接觸するものである。「あゝ今日は寒いな、出掛けるのが辛いな」と思ふても、「イヤ、宗教の信仰は之れを堪へ忍ばなければならぬ……南無妙法蓮華經」と唱へれば、直ぐそこに對抗力を生じて來る、簡單にしてその力を現すことの速かなるもの、宗教位のものはない。自分が人から無理な事を云はれて腹が立つて「己れッ……」と思ふ時でも、靜かに南無妙法蓮華經と唱へれば、その肝癪玉がグッと抑へられる。或は非常に弱つてしまつて、「これはもう仕方が無い」と思ふ時でも、南無妙法蓮華經を十遍ばかり言ふと、グッと元氣がついて來て、非常に力強いものが出來て來る。それは皆な活ける佛を、その度びその度に渇仰して南無妙法蓮華經を唱へる譯である唯だ當も無しに心を空虛にして、唯だこの言葉が有難いと言つて、「ナンメウ……ナンメウ」といふ聲の方ばかり力を入れるのは愚な話である。本當の信仰は南無妙法蓮華經と唱へるこの對照として、實在の佛を意識して唱へなければならぬ。日蓮聖人は龍の口に於てもさうである、口に南無妙法蓮華經を唱へられたけれども、頭が斬れない、この御利益は釋迦牟

尼佛が代らせ給ふたのであると仰せられた。或は佐渡ケ島の雪の中を凌がれたのも、佛が衣を以て覆はせ給ふと仰せられた。如何なる場合でも佛を意識しての信仰ならざるものは無いのである。其處を日蓮主義者がもつと明白にしなければならぬ、日蓮聖人は守護國家論の中に、斯う云ふ風に仰せられて居る。

佛の入滅はすでに二千餘年を經たり、然りと雖も法華經を信ずる者の爲めに、佛の音聲を留めて時々刻々念々に我が死せざる由を聞かしめ給ふ。

これはどういふ事であるか、佛の御入滅から指折り數へれば、既に二千餘年を經た、今日は二千年に近付いて居る。けれども法華經を信ずる者の爲めに、佛の音聲を留めてといふのはこのお經である。さうして時々刻々念々に、我が死せざる由を聞かしめ給ふ——お自我偈ならお自我偈を讀んで見たならば、お釋迦樣は入滅なさつたと云ふけれども、常に此に住して法を說く」「常に此に在り衆生を導く」ものであるといふ、常住不滅、實在不滅のことばかり說いてある。お自我偈の中から常住とか實在とかいふ言葉を除つたならば、お經は切れ端じになつて何も無くなつてしまふだらう。然るに法華宗の者が、朝暮お自我偈を讀んで居りながら、佛の常住といふ事を少しも考へないでは駄目ではないか。常住といふ事は、今尙ほ此處に活ける佛ありといふことである。さうして鬼子母神樣に行かなければならぬとか、奇瑞樣に行かなければならぬといふのは、佛の實在といふことを忘れるからさういふ方に信仰が走せるのである。であるから「時々刻々に我れ死せざる由を聞かしむ」で、我は汝の側にあつて何時も守つて居るといふ意味を敎へて居るのが法華經である。法華經を讀むといふことは、釋尊の實在を意識する事である。其處まで議論の徹底せぬ學問は皆な駄目ぢや、又唯だ議論をするばかりではいかん、その精神の修養が無くてはいかん。日蓮聖人のやうに、暮れ行く空の雲の色にも、有明方の月の光にも本佛いませりといふ信念に何時も活きてお出でなさる。であるから聖人は仰せられた。

如何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘れ、如何なる月日ありてか無一不成佛の御經を信ぜざらむ。

佛の方は「每に自ら是の念を作す」と言つて、夜も晝も何時も汝等を救ふべく心配して居ると仰せられるのに、此方はそれを忘れて居るといふ事は無いことである。如何なる時節ありてか每自作是念の悲願を忘ることが、出來やうぞと仰せられた。それは中々何時もかも覺えては居られぬけれども、せめてはお題目を唱へる時、お經を讀む時位は、實在の意識に活きて來なければ駄目である。お經を讀んでもお題目を唱へても、佛壇に上げてあるお札なんぞを眺めて、「あゝ、あれはこの間貰つたお札だが、大分色が黑くなつて來たナ……」そんな事を考へて居つては駄目である。この思想が無ければどうしても佛敎といふものは基督敎みたやうなものに破られてしまふ、之に反してこの壽量品の本佛實在の意識があつて、さうしてそれが統一的の佛で、身を分ければ千變萬化、佛とも成り神とも成り、無限の活動をするが、根本は絕對無上の本佛である、それが今も尙ほ此處に在ませりといふ實在の意識を以て統一的に本佛に對して信仰をして行くならば、東西文明が相交はつて、愈々と成つて打解けて話をしたならば、如何に基督敎でもこの信仰を破ることは出來ない。この思想に基督敎が反對せんとするならば、それは彼等が頑迷不靈である。彼等が佛敎に依つて事が足らぬといふのは、唯だ木像に囚はれて實在の佛が無いとか、或はお經の文句に囚はれて實在の本佛を知らんとか云ふ事に依つて、或は經典崇拜とか偶像崇拜とか言つて彼等は反對するのである。今私がお話するやうな實在の意識に依つて本佛を信ずれば、基督敎としても一言も彼れ是れ言ふ所は無い、隨つて西洋人が東洋の宗敎に對して反對すべき理由が無い、彼等は宗敎の異同に依つて、將來に於ても何處までも佛敎國などと卑しめるやうな事を考へて居る、それは彼等の間違ひである。けれどもこの間違ひを消滅するには、先づ佛敎徒たる者が壽量品に依つて醒め、日蓮の敎へに依つて正されんければ、何と言はれても仕方が無いことになるから、日蓮主義を宣傳することに依つて、この日本の文明の權威を發揚することになつて行くと、私は信じて居るのであります。どうぞ諸君は自らこの實在の意識を養ふのみならず、壽量品の敎義に依つて眞く日本人が佛敎の信仰を正しくするやうに、御盡力あらむことを希望するのであります。

從來十箇條を擧げて佛敎信仰の正統といふ事をお話し致しました、この他にも未だ箇條として擧ぐべき事はありますけれども、先づ最も重要と思ふ點を略々講じ盡したと思ひますから、この講題はこれで完結を告げて置きます。（完）

妙判

佛法の紊亂

本多日生

九十六種ノ外道ハ佛慧比丘ノ威儀ヨリ起リ、日本國ノ諸法ハ爾前ノ圓ト法華ノ圓ト一ツトイフ義ノ盛ナリシヨリコレ始マレリ。アワレナルカナヤ、外道ハ常樂我淨ト立シカバ佛世ニイデマサセ給ヒテハ苦空無常無我ト說セ給ヒキ。二乘ハ空觀ニ著シテ大乘ニス、マザリシカバ、佛誡メテ云ク、五逆ハ佛ノタネ、塵勞ノ疎ハ如來ノ種、二乘ノ善法ハ永不成ト嫌ハセ給ヒキ。常樂我淨ノ義コソ外道ハアシカリシカドモ名ハヨカリシゾカシ、而レドモ佛名ヲイミ給ヒキ、惡ダニ佛ノ種トナル、マシテ善ハトコソヲボウレドモ、佛二乘ニ向ヒテハ惡ヲバ許シテ善ヲバイマシメ給ヒキ。當世ノ念佛ハ法華經ヲ國ニ失ウ念佛ナリ、設ヒ善タリトモ、義分アタレリトイウトモ、先ヅ名ヲイムベシ。

（十章鈔、編道六七六）

この文は佛法の紊亂に就てその原因を述べられたのであります。日本の佛教が何故に今日のやうに混亂を來したか、法華經を中心にしてやらなければならぬと云ふ事は、聖德太子を始め傳教も盛んに主張し、又一切經を拔けて見ても法華經に優るお經は爾して無いのである、その比較に於ては少しも惑ふ所はない、阿彌陀經と法華經の比較といふやうな事は、一寸お經を讀んで見たならば價値がまるで違ふ、華嚴經でも駄目である、唯だお經がだだつ廣いばかりで埒も仕樣がない維摩經見たやうなものでも仕樣がない、一番終ひに行つて「曰く言ひ難し」といふやうな事で、病氣の見舞も出來ぬやうになつて來て、默々といつて見た所でしやうがない、それは哲學的に宇宙の眞理を覺らんとするには宜いけれども、信仰が宗教の生命であると決定したならば維摩經等は駄目である。又唯だ有無主義で阿彌陀經などをやつた所がやはり駄目である正しき理解を加へて行くには、どうしても佛陀觀に就ては哲學上の思想から搖ぶられぬやうな根蔕のある佛身を打立てなければならぬ、それは法華經に較べたならば他の御經といふものゝ違ひは明白で、相似て居るといふやうな譬のものではない。富士の山が秀でゝ居るが如きもので、第二の山は何といふ山だといふやうに比較るものがない、實に法華經は卓越して居る。であるから法華經の藥王品には十の譬を擧げてある、即ち法華經は水に譬へたならば海である、他の御經は河や池みたやうなものだとある、どの河を持つて行つても、海とどつちが大きいかと言つて比較するやうな河があるか、ありはせぬ。池でもありはしない、どんな大さな池を持つて來て比較べて見ても「さうだナア、寸法を取つて見ないと池の方が大きいかも知れん」……そんな池はない。又その次には お日樣を擧げてある、光の中に於ては日天子これ第一なり、法華經も亦復是の如し、他の光を持つて行つて比較する事の出來ない一番大きな光が法華經である、マアお日樣の他に大きいと言へばお月樣であるが、然しお月樣の光とお日樣の光に於て優劣を爭ふ事は出來ない、どんな大きな電燈をつけても仕方がない、お日樣の光は卓越して居る。さういふ風に十の譬を擧げるのに、皆比較が取れぬ大きなものを擧げられて居る。それ故に法華經はその深きを語れば海の如く、高きを語れば須彌山の如く明かなることは月の如く、圓かなることは滿月の如しと言つて、總ての點に於て卓越して居る。今尙ほ日本人が法華經と阿彌陀經との優劣が分らぬナンといふのはボン暗である、比較するといふ餘地が無いぢやないか、讀んで見たら分かる、阿彌陀經と言つた所が二三枚のものであるから、讀んで見給へ、何んでもない事が少しばかり言ふてある、法華經は實に大組織のお經で立派なものである。日蓮聖人がその點に於て憤慨されたので、日の光と星の光とどつちが明るいかといふのに、「一寸待つて下さい」といふ、待つて下さいといふのはをかしいぢやないか、それはお日樣の方が明るいと直ちに答へなければならぬ、待つて下さいなどといふべき必要はない。法華經はさういふ意味に於て非常に秀でて居るが、それを二圓同といふ謬見に依つて、何か似たやうなものを引張つて來て、法華經と同じいといふことから誤魔化さうとして來た、佛教が中心を失つたのはこの二圓同の考へが紊亂誘法の根元になつて居ると示されたのである。この文章は記憶して置いて宜しい。

九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起り、日本國の諸

法は爾前の圓と法華の圓と一つといふ義の盛んなりしより是れ始まれり。

これは實に格言で、私共が日蓮主義を研究する頃には、年の行かぬのに暗誦にして居つた文であります。九十六種の外道は佛慧比丘の威儀より起るといふのはどういふ事かといふと、天竺の婆羅門外道といふものは九十五派六派に分れて爭うて、色々なものになつて居つた、それは或は嚴に自分の身をぶつけて身體から血を出して行をするとか、裸中素ツ裸になつて河の中に飛込むとか、いろ〳〵難行苦行をやつて居つた、その源は何處から興つたかといつて、佛慧比丘といふえらい坊さんがあつて、この坊さんが山に入つて修行をして居つた、えらい坊さんでありますから相當な衣服も着て居つた譯であらうし、食物なども十分用意をして參つて、山の中で心閑かに佛道の修行をして居つた。そこに山賊がやつて來た佛慧比丘が山の中に入つて佛道修行をして居るといふ事は相當評判になつて居る、さうして糧米も持つて入つて居る、着物の用意有圖の用意もして、行つて居るといふ事だ、彼處を襲うたならば相當な獲物があらうといふので、山賊が申合せて不意にやつて來て、着物から糧米から悉皆奪ひ取つて、素ツ裸にして、身體には疵を負はして後手に木に縛りつけて何處かに行つてしまつた。所が他の修行をする所の佛教徒が、佛慧比丘が山に入つたといふことが何でも大變善い修行を仕居るに違ひ無い、內證でそのやり方を見て來やうといふので行つて見た。さうすると後手に縛られて身體も所々斬られて血を流して素ツ裸で居る、それを見て「成る程、ア、いふ事をやらなければえらい者になれないのだナ」といふので、それから歸つて來た道中がこれが本當の佛道修行ぢやと言ふて素ツ裸になつて、身體を自分で斬つて血を出したり、縛つたりするやうな事をやつた。それが段々誤りを傳へて、遂に婆羅門外道が苦行をやりだしたといふ、物の間違ひといふものはをかしなもので、九十五種六種にまで分派したる婆羅門の苦行、外道の間違ひは、佛慧比丘の山賊の一件から起つたのである。そこで日本國の謗法、即ち佛法の案亂は今は非常に廣いものである、他の宗旨の方が多くて、法華經を中心にせよといふものは少ないやうな事になつて居る、誰でも彼でも輪袈裟を懸けた者が「ナンマイダー、ナンマイダー」とやつて居つて、佛教としてはあの方が通り相場のやうに思うて居る、佛教の講習會にでも行かうものならば、何宗から出て來た者でも數珠を繰つて「ナンマイダー、ナンマイダー」とやつて居る。我輩は「止め給へ」と言ふ、「自分の宗旨でやつて居る時には、宜いけれども佛教講習會である、佛教天通の時分にはお釋迦樣の事を言へ、せめて今日だけでも南無釋迦牟尼佛と言へ、ナンマイダーなんて言ふナ」と言つてやる。そんな事は彼等の方の內證の事ぢや、佛教講習會は先づ釋尊に敬意をはらはなければならぬ、それを何か吾々が法華經の書籍品でも講じて、釋尊中心の主張を鼓吹すれば、あれは「法華坊主だから飛でもない事を言ふ、ナンマイダー、ナンマイダー」……それは非常な間違である。併しさう云ふ風に間違が澤山になつて來ると、間違つた事でもそれが善い事、當然の事のやうに思ふやうになる。お經に就て研究しても、日本の歷史に就て研究しても、今日の思想から研究しても、法華經を最上位に置いて佛教を觀なければ、方便の枝葉から佛教を用ひては、害を與へても益が無いといふ事は明白になつて居るのぢや。これは宗旨の議論ではない、日本の文明を如何にするか、人類の幸福を如何にするか、間違つた方便の教などを盛んにして「ナンマイダー、ナンマイダー」といふやうな事を言つて居つては、今後この文明が救はれないのである。

さういふやうな事が左樣な廣い意味に纏まつたのも、實は天台の學者が二圓同ナンといふ事を許したからで、若しも彼等が何處までも方便の教と法華經の眞實の教とは非常に違ふといふ事を明かにし、一旦許しても必ずやそこにきどめを刺へて「同じい」と一旦許しても法華經に一點でも反抗する事があるなれば、この同じいといふ事は許さぬぞ、從順に法華經の前に服從するとき「同」の字を許すけれども、少しでも背き、或は法華經より上に出やうといふやうな考があれば、直ちに切捨てられるぞといふ嚴命を下さなければならなかつたのである、それを強めたが爲に斯の如く雜亂の佛教といつて、佛教の方便と眞實が顚倒するやうな事になつたのである。これは思想を研究する上に於て大に注意すべきで、日蓮聖人は斯ういふ事をその文に書いて居られる。

あはれなるかなや、外道は常樂我淨と立てしが、佛世に實にこれは立派な議論でありまして、外道の方にも常樂我淨といふ思想はあつた、この文字は差支ないけれども、その本當の意味を彼等は誤解して、常といふ事も唯だ天なら天に生れたらそれで事が足りると思ひ、又「樂」といふ事でも物質的に考へて、美味い物でも食べる——丁度今日普通の人が考へて、極樂に往生すれば牡丹餅でも食ひたひと思つて手を叩けば直き牡丹餅が來る、刺身が食ひたひと思へば直き刺身が來ると思つて居る、あの意味がこれと同じ事である、少しも

善い事を積んで善い働きに行かうとは思はない、今の迷うて居る精神の儘で、今はこんなに働かんならんけれども、極樂へ行つたら仰向に寝たきりで、手を叩けば何でも持つて來るといふ、道樂の一番よく出來る所見たやうに思つて、電話など掛けなくとも周圍に女が大勢來て、さうしてはな代も拂はなくても宜いといふやうな事を考へて居る、丁度あゝいふ思想で、外道は常樂我淨の「我」といふやうな事でも、皆さういふ風に低級な思想でこれを解釋して居た、今の文明でもやはり斯ういふやうな意味合はある、第一人間が死なない物のやうな考へが非常に强くなり、現在主義が强くなつて、享樂主義を唱へて居るけれども、併しさういふ事を言つて居るそこに却つて苦痛があるのである。パンのみ得たら幸福だと思ふが故に、そこに飢へて露西亞のやうに饑餓に迫るやうな事が出來る、享樂をのみ叫んで居るが故にそこに相殘害して、非常な苦痛が起つて來る、自我のみを主張するが故に、却つて頭をどづかれて自由はなくなつてしまふ。道德的に互に讓歩して「己れ達せんと欲すれば、先づ人を達す」といふやうな行き方をすれば宜いのであるが、そんなうま味は今の人には分らぬ、今は己れ達せんと欲すれば人をはり倒しても達するといふ、「人を達するナンてそんな餘間な事を言つて居つて間しよくに合ふか、人を突き飛ばしても引奪くれ」といふやうな、非常に淺薄な思想である。であるからさういふ風に婆羅門外道が常樂我淨と言つて居つたその字は宜かつたけれども、意味が缺けて居つたから、先づこの惡い辭を擊たんならんといふので、いきなりお釋迦樣はこれを「無常」と說いた、「常」といふ字に對しては「諸行無常」といふ事を强く說いた、何物と雖も常住なるもの無い、咲いた花は散つて行くだらう、生れた人間は死ぬだらうといふやうに、有爲無常といつて、「色は匂へど散りぬるを我が世たれぞ常ならむ」といふこの思想を盛んに說いた。それから「樂」といふよりも人生は非常に苦みが多い、人生は煩惱の巷である、三界はこれ苦なりと言つて、全く正反對の事を說かれた。これは婆羅門の弊を打破するが爲めに說いたのであるが、併し更に今度進んで釋迦が眞實を現す時には、やはり元の常樂我淨を說かれた。眞正な意味を以て法華經にも涅槃經にも常樂我淨を說いて、眞の意味の實在不滅の生活を說いたのである。この關係はモウ少し詳しく言はなければ分らぬけれども、それは非常に廣い話で、これを本當に云へば、婆羅門の敎と、小乘の敎と、大乘の敎と、廣い思想史に亘つての話しをしなければならぬ、此處では唯ださういふ意味だといふ事だけを知つて居れば宜しい。この「常樂我淨」といふ字は差支へないけれども、內容が缺けて居つた爲に正反對の議論を以てこれを打破つた、そこですつかり辭が無くなつて綺麗な白紙になつてから、今度又新しく「常樂我淨」の思想を說いたのである。これは乘馬の稽古などをするのでもさういふものちやと聞いて居る、今まで自己流で勝手に乘つて居つた奴はいけないと言つて、本當の馬の先生に就くと元やつて居つたのをすつかり忘れさせて、一番最初に立歸つて新しく敎へる。お經などでもやはりさういふやうなもので、素人が假名で讀んで來たお話はお寺に來て習ふ時には洵に困る、そこで何にも覺へて居ない新しいお經から敎へると、その方が能く行く、辭が附いてしまつて居る者は、一旦忘れさせなければどうしてもいけない、その事を言ふのである、そこで其無常觀などを盛んに說かれた爲に、二乘が又これに拘泥して、却て無常とか、空とかいふことに拘泥したので、今度はそれではいかぬと言つて、又これを攻擊して、罪ある者は佛になつても、汝等は却て佛になる事は出來ないと誡められた、何の爲に斯の如くなさつたかと言へば、卽ち辭のある者はその儘許すことが出來ないからである。

その通りで今日の念佛者なども、完全な意味に於て佛を念するといふ事は何も差支ない、本佛を念するとか、過ちのない意味に於て三世十方の佛を念ずるといふことは、佛敎の敎旨であるけれども、一向念佛と言つて阿彌陀佛を念ずる爲にお釋迦樣を排斥する、これが法然の念佛である。それを騙されて、「念佛といつても惡いことはないぢやないか、佛を念ずるのが何が惡い」と言ふが、さうではない、念ずるのは唯だ一つで捨てる方が多い。そこを考へなければならぬ、法然の念佛は「選擇集」といふものを書いたが「選擇集」に五種の正行雜行を立て、さうして阿彌陀佛より外のものは一切これを禁じたものである、第一に讀誦正行と言へば、阿彌陀の有難い事の書いてあるお經より外は一切讀むことはならぬ阿彌陀の有難い事以外の事の說いてあるお經は讀んだらそれは讀誦雜行ぢやといふ、それから禮拜正行と言つて、阿彌陀を拜むのは宜いけれども、他のものはお釋迦樣を拜まうが、天照太神を拜まうが、誰を拜んでも外のものを拜んだら、それは禮拜雜行だと言ふ、それから讚歎正行と言つて、これは讚めることであるが、阿彌陀の有難い事は讚めるが宜いけれども、他のお釋迦樣が有難いとか、天照太神が有難いとか言つて讚めたら、それは讚歎雜行ぢやといふ、それから第四が稱名正行、稱名雜行と言つて、「南無阿彌陀佛」と言ふ

より外一切稱へることはなちぬ「南無釋迦牟尼佛」と言つたり「南無妙法蓮華經」と言つたりする者があつたら、それは稱名雜行ぢやといふ、それから觀察正行と言つて、阿彌陀の有難い事、阿彌陀の世界の嬉しい事だけは考へて宜いけれども、他の事を考へてはいかぬ、お釋迦樣が有難いとか、誰が有難いとか考へてはいかぬといふ、非常にやきもちやき見たやうな考へで、「あなた、外の女の事を考へてはいけませんよ」といふやうな譯である。さやうな事を言つて、阿彌陀以外のものは見向もするなと言ふ、その雜行として捨てた中に釋迦牟尼如來を始め、三世十方の諸佛が皆捨てられて居る、我國に於ては天照太神を始め澤山の神々でも皆捨てられて居る、唯だ取るものは一個の阿彌陀だけであるから、捨てる方が多い、それを日蓮聖人が攻擊したのである。それから又親鸞は一層それを窮屈に言つて、一向宗と云ふ事を言ひ出した、その後に蓮如といふ人が出て、「改悔文」といふものを作つて、一時大分亂れて居つたのをこの改悔文で全國をずつと說教をして試驗し廻つた、それは何が書てあるかといふと、「雜行雜修を振すて〻只ひたすらに」といふ、そればかり言はせた、振すて〻〻といふことばかり言はせて來た、さうして唯だ一向專念といふ、馬車馬式にやつて來たのである。

それ故にさういふ意味に於てやつた念佛主義なるものは、法華經を失ふ事を目的として出來て居る宗旨である、法然の書いた「撰擇集」といふものは、いろ〳〵攻擊して居るけれども、目指す敵は即ち法華經である。それであるから今でも一番の敵を法華宗として居る、日蓮聖人を頭の座に据へたのも念佛門徒である、德川時代に日蓮主義を迫害したのも皆念佛門徒である、今でも法華宗の發展を抑壓せんとする者は念佛門徒である、佛敎の中に於ての決戰點は一向彌陀主義と法華經の關顯統一主義の闘ひである、所が彼は割合に隱忍である、正面の敎から言へば與し易きものだけれども、初めから邊言をして日蓮聖人を頭の座に据へたり何かする、石を打つけたり、火を放けたりするやうな方で、法門を以て邪正を爭ふのではない、前年格言運動が起つた時でもさうである、藤から裁判官の方に運動もたり、いろ〳〵緣故のある人を傳うて運動などをやつて、正々堂々爭ふ事はしない。今日でもやはりさうぢや、私等に對しても隨分いろ〳〵の妨害をするけれども、こつちはそんな事は構はずどん〳〵やるものだから妨害がしきれない、名古屋、京都、大阪、神戸、その他へも毎月行くが、あつちこつちで隱忍な反對を試みて居るが、今日は時勢が一轉した爲めに、さう云ふ隱忍な手段では抑へきれなくなつた、これが德川時代であつたならば、とうに吾輩等は牢にも入れられ、流し者にもあつて居る、日本橋の上にも何遍か曝されて居るであらう。併し今はそれが出來ない。

當世の念佛は法華經を國に失ふ念佛なり。設ひ善たりとも、義分あたれりといふとも、先づ名を忌むべし。

假りに向ふの言ひ草が善いからといつても、法華經を失はんとする目的を以て起つた一向念佛であるから、先づ念佛といふ名前からして許すことは出來ないと言つてある。これは永久にその通りである、何も法華宗は阿彌陀といふ佛樣を敵とするのではないのであつて、阿彌陀といふ佛は釋尊に就ては本地垂迹の關係から、法華經の中にも現れて來るけれども、この法然の立てた一向專念の阿彌陀佛五種の正行雜行に依つて立てた主義を攻擊するのであります。三世十方の諸佛が本佛釋尊と天月水月の關係に於て存するといふは、何も差支はない、日蓮主義は一切の佛、一切の菩薩、一切の神、皆その存在を認める主義である、少しも狹いことは言はない、唯だこの法然等が立てた所の主義は、狹隘なる排斥的なる思想に依つて法華經を壓迫して居るから、それを攻擊したものであります。

千葉縣東金の講習會

十一月廿五日より三日間東金町西福寺に於て縣下寺院并に尙風會聯合にて思想涵養講習會を開催管長本多日生猊下には非常に御多忙の處三日間御出席相成開目抄綱要を論述せられ就中佛敎徒は本佛を充分に意識せざるべからず日蓮主義者が本佛に對する意識の不透明は日本國民として御皇室の鴻恩を忘れたるものと同じと論じ實在の本佛を渴仰して日蓮主義の信念を確立し僧俗共に大に信念を啓發せられ聽講生一同非常に滿足せり尙他の講師としては日蓮主義行法論井村僧正、本尊の三大要義關田僧正、佛像私見森川僧正、科外講師として勞資協調會理事田澤義鋪氏は社會改良の二方面の題下に約二時間頗る有益なる講演にて未曾有の盛會なりき

猿の膽取り

（桃太郎さん〳〵の譜）

一、オヤルチン　オヤルチン　　オマヘノオナカノキモツタマ
　　ドウゾ　ヲタシニ　　タダサイナ
一、アゲマセウ　アゲマセウ　　キモヲカケタルカキノキヘ
　　ツイテ　クルナラ　　アゲマセウ
三、コリヤドウヂヤ　コリヤドウヂヤ　　キモヲクレズニシヨタ、ク
　　ヨツポド　オマヘハ　　ウツツキダ
四、ヲカシイナ　ヲカシイナ　　サルタハナレテキモヲガス
　　ヨツポド　オマヘハ　　バカヤロウダ

教義 日蓮聖人教義綱要「第四十一回」

井村日咸

第九章　得益

第五節　絶待の利益

吾人は我人生の何物たるかを自覚し、本佛世尊の本願力と本法妙法蓮華経の本願力とに乗托して、上に菩提を求むるの信念力となり、下に衆生を化するの活動となり、自己の反省を促すと同時に、多くの人を浄化して、現在生活に清き光ある而も意義ある新生面を開き行くのは、所謂現世相對の利益であるが、此信仰を持續して吾人の全生涯を改善し怠らなかつたならば、我等が無始已來の重疊せる煩惱の重障も自然に打撃かれて、佛身も成就する事が出來るのである、自我偈に一心に佛を見奉らんと欲して、自ら身命を惜まず、時に我及衆僧俱に靈鷲山に出づ。

とお說に相成つて居るが、一心欲見佛不自惜身命とは我々の信仰の極致を說いたのである、凡夫は劣情の爲に身命を捨てる者は澤山あるが、聖き信仰の爲に身命を捧げて惜まざる者は甚だ尠ない、命懸けで爲すことが信仰の最大なるものである事を示されたのである、佛は常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知し召せるが故に、吾人の信仰其極點に達したる時には、其尊容を吾等の前に御示視下さるゝのである、我等は顚倒の衆生なるが故に近しと雖ども見えざらしむで、實在の本佛は我等の凡見には之を拜する事は出來ないが、信仰の極致に於ては之を拜し得ることが出來るのである、法華經の結經たる觀音賢經には委細に其消息をお說になつて居ります、我々の信仰が極致に達し、本佛の尊容を拜し、本佛より直接に其教化を蒙むることが出來る樣になつたならば、此を信仰の成就と云ひ、出世間益を得たと云ふのであるが、何時其樣な狀態に至り得るかと云ふことが問題である、觀音賢經には

三昧に入らず但謠持するが故に心を專らにして修習し、心心相次で大乘を離れざる事一日より三七日に至れば普賢を見る事を得、重き障ある者は七七日の後然して後に見る事を得、復重きこと有る者は一生に見る事を得、復重きことある者は三生に見る事を得、是の如き種々に業報不同なり、是故に異說す。

と說かれてある、罪障の輕く信仰の强き者は一日乃至三七日又は七七日にて普賢を見る事が出來る、一寸お斷りを致して置くが、此經は遡遊流通の經として本門の說相が終つて多寶の塔も還り、本化の菩薩も會座に御列なき場合の御經であるから普賢菩薩を見奉ると說いたのであるが、我日蓮主義の信仰たる本門の意味から、之を開顯して見ねばならぬ、そうすると普賢を見得るとは本化の菩薩を見奉る事で、自我偈の中の「衆僧俱に靈鷲山に出づ」の衆僧の事である、本化の菩薩の手弱で本佛世尊の慈顏に接し得るのである、信仰の力の弱い、罪障の重い者は一生乃至三生までに至る、二度生れ變らなければ本門常住の三寶諸尊にお出逢ひ申すことが出來ぬものもあるとのお示しである、要は信仰の强弱に依るのである。

前章に申したが如く我々の信念は、最初の決定信の一念で成佛すべき大事は既に確定致して居る事である、然しながら凡夫の悲さ、時に異緣に紛動せられて、其信念に動搖を生ずる事なきにしもあらず、時に感情に誡せられて信念を紊る事もあり、本能に刺激せられて遂に墮落する事も多いのである凡身を離れざる限り常に動搖を免るゝことは出來ない、そこで我々の信仰が實際上に其完成を見るは今生の最後臨終の時を以て最大好機とするのである、普通の法相に於て我々の生々世々の報果は一業引一生多業能圓滿と說いて今生に於ける作業の中の最も有力なる一業が次生の引業となり、他は次生の滿業となると云ふのである、そうすると今生に於ける最有力の業とは何かと云ふと、臨終の一念が最も强烈に、最も大なる引力を有する、此臨終の一念が邪惡に墮するか、信仰に驅るゝかに依つて我々の次生の果報は決定するのであるから

臨終の一念は最も大切な事柄である、平素の信念は臨終の時の正念なる事を希ふのであると云ふても善い、聖人が

されば臨終の事を習ふて後に他事を習ふべし（縁遠一七五〇）

と仰せられたのは此意味である、臨終は我等が生活上の一轉機なるが故に、此機會に於て幸福を獲得せねばならぬ次第である、妙莊嚴王は過去に於て法華經修行の時、苦難に遭ふて遂に餘死の憂目を見た、其臨終の際に國王の行幸の有樣を見て、我も國王の樣に威風堂々の生活を試みたいと思ふた、此一念の爲に生々世々國王と生れる事は出來たが、佛道を成ずる事が出來なかつた、其時の同行者であつた三人は臨終の時に正念に住して法華經の信仰を棄さなかつた爲に佛に爲る事を得た、此三人が妙莊嚴王の墮落を救はんとして一人は其夫人と爲り二人は其子と生れて妙莊嚴王の邪心を轉じて佛道に入らしめたと云ふ事が、法華經の中に說かれてある、其最後臨終の一念の大切なる事は此實例に見ても明瞭である、最後の一念愈々今生の別と云ふ場合で、一生涯の大決算が其處に出て來るのであるから其猛烈なのは當然であり、最後の猛烈なる一念が一心欲見佛の信念として顯るれば、我等は靈山淨土に往詣して本佛の尊容を拜し得るのである、松野抄に

但在家の御身は餘念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱へ候て最後臨終の時を見させ給へ、妙覺の山に走り登り四方を御覽ぜよ、法界は寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩を以て道をさかひ、天より四種の花ふり、虛空に音樂聞え、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき給へば、我等必ず其數に列ならん、法華經はかゝるいみじき御經にておはしまいらせ候。（縁遠一六三六）

と仰せられたのは、我等が臨終を期して靈山に往詣するの狀態を御示しに相成つたのである。

我々は現在世に於ては煩惱を斷じ眞理を證るの力は無いけれども、臨終に際し正念に住し得ば、靈山淨土に往詣し本佛の慈顏に接し本佛の慈化を蒙りて見思塵沙無明の三惑を斷盡し、空假中三諦の妙理を證得して、常住の佛身を體得し得ることが出來るのである、聖愚問答抄に

法理をも知らず煩惱をもしらずといへども、只信ずれば見思塵沙無明の三惑の病を同時に斷じて、實報寂光の臺にのぼり、本有三身の覺へを磨く事疾し。

である、三惑の病を斷じ本有三身の覺へを磨くことは即ち修驗得體の絕待の益を言ふたのである、其程度に於て分別せらるゝが故に六即位と分ち菩薩位に四十二品の位が分たるゝのであるが、我等には直接必要の事でないが故に申上げない、但一寸注意して置かねばならぬ事は古來法華經には即身成佛と云ふ法門があつて他經には無き處であると云ふて、法華宗の專賣ものゝ樣に考へてそれから大分誤解が出來て居る、お題目さへ唱へて居れば其身其儘佛であると云ふ考である、然し其佛樣は一向佛樣らしい處のない、口先計の佛樣である、身口意の三業揃ふた佛樣ではない、此考は今の法華宗の人々の中に大分實く强く響いて居る樣に思ふが、お題目文唱へて居れば其儘佛であると云ふ樣な考は大に間違ふた考であると言はねばならぬ、一體即身成佛と云ふ事は一念三千の原理から出て來た事で、一切衆生如何なる者でも佛性を具して居るから何れも皆佛であると云ふ事が出來る、是は純理論であつて、事實上から佛陀の實現を言ふのではない、故に天台は六即の階位を立てゝ、何等の信仰も無いものでも佛なりとして、理即佛の位を立てた、原理として佛性あるが故に、理に即身成佛すと云ふので理即である、少々佛法の名前を聞いて佛性の發現に志を立つる者は、名字即佛の位を立てた、斯樣な論であるから、事實上の佛陀の證悟が顯れた上から言ふたのでは無い、要するに觀念の修行の上に理論として說かれたものである、我々信念の行を以て菩提を求むる者には不必要の事柄である、縱令原則として佛陀であらうが、實際に於て現に迷へる衆生であり墮落の生活を繰返しつゝある我等は但向上の一途あるのみ、佛陀の證悟を實現せんとの努力あるのみである、現在の凡夫生活を直に佛陀の生活なりと考ふるが如きは增上慢である、淺識の謗法者である、縱令唱題せる者にせよ其實際に於て無信仰の者と撰ぶ處なきならば、即身成佛は何等の意義を爲さぬものである、若純理論から言ふならば即身成佛であると同時に即身地獄である、即身畜生である、一念三千の當體なるが故である、日蓮聖人當體義抄に

當世の體を見るに大阿鼻地獄の當體を證得する人之多しと雖ども佛の蓮華を證得する人これ無し。（遺編九九八）

と、即身成佛のみを骨張して即身地獄を忘るゝならば意外の大失敗を招くであらう、大に警戒すべき事である。我々の信仰に於いては、其原理に於て佛性を具しながら、現在の凡夫生活は何たる淺聞しきことぞやと、其處に反省し改悔して信仰に入るのでなければならぬ。

史料　宗門史料

青村編

以下記述する所の宗門古記錄は延享三丙寅年九月某師の手記にかゝるもの殺漏重複の點あるも取捨を加へず讀者請諒焉

◎京妙滿寺本末寺院隊

一派總本山　山城國愛宕郡京二條寺町　妙塔山　妙滿寺

塔頭十五宇

本覺院　正行院　延壽院　法光院　大乘院
法恩院　中正院　顯壽院　法性院　成就院
心性院　遠妙院　大慈院　壽長院　常性院

末寺總計四百九十二箇寺

內　直末　百二ケ寺
孫末　二百九十三ケ寺
曾孫末　九十七ケ寺

（編者曰く末寺中巨刹の坊路は長計數に算せず）

妙滿寺直末（百二ケ寺）

山城國愛宕郡京大佛師中之町　妙法山　上行寺
同　京六波羅建仁寺境內　經王山　妙祐寺
同　東新地二條下ル寺町　妙珠山　本正寺
同　高辻東洞院西入ル町　榮珠山　善立寺
同　宇治郡山科　普門山　觀音寺
攝津國島下郡耳原村　妙法山　法華寺
同西成郡生玉筋中寺町　本立山　蓮成寺
大和國添上郡郡山　妙光山　常光寺
和泉國大島郡佛屋町寺町　取要山　妙滿寺
同　市之町寺町　要行寺
同　下之町寺町　本門山　法泉寺
同　宿院町寺町　慈運山　南王寺
播磨國明石郡大藏谷　壽量山　圓乘寺

同　飾東郡姫路上寺町　慶運山　妙立寺
同　同　勢立山　妙善寺
因幡國法美郡鳥取立川町　田中山　法泉寺
美作國英田郡土肥村　上行山　本典寺
同　勝南郡津山林田　丹後山　本蓮寺
同　木知ケ原村　永昌山　本經寺
備前國赤坂郡草生村　長福山　久成寺
同　和氣郡和氣村　豐昌山　本成寺
同　御野郡岡山鹽町　本門山　寶仙寺
同　同　町　本通山　本行寺
安藝國安藝郡廣島竹屋町　光瓊山　本四寺
同　賀茂郡廣島比治山町　法流山　妙詠寺
同　原飯田村　自性山　妙福寺
同　高田郡井原村　銀明山　高源寺
同　有留村　普陀落山　鎌倉寺
同　井原村　瑞光山　東明寺
鎌倉寺東明寺儀者空地にて候に付高源寺預り
同　吉田村　慈性山　蓮華寺
同　多治比村　瑞光山　大德寺
尾張國名古屋小川町　寶珠山　常德寺
（以下次號）

法鼓の反響

（法華經要文講義を聽きし信徒渡邊準一氏より）

拜啓法華經要文講義に就きては月々御通知に預り恭く奉深謝候不肖初名古屋縣に奉職任候處此夏岐阜縣中津川縣に轉勤仕候爾後本曾の山村に在りて晝夜日蓮上人の御遺文に親み一念三千の法門を學び居候不肖日蓮上人の敎に親炙することゝに二年一昨年西伯利の野に出征して零下四十度の極寒に過酷派計伐に從事する時常に日蓮上人の一書を懷中に致居候聯隊がベスチャンカの兵營を發して遠く黑龍州に出動するや列車の前には一臺の無蓋貨車を据えて上に狙擊砲二門を備へ三名の狙擊砲手は絕えず警戒の任に當り候夜間は寒暖計零下三七度に降り列車の進行する時機關車の先に立ちて前方を注視すれば風は烈しく顏に吹きつけ候零下三十度の烈風を經えずまともに受けつゝ進み行く苦痛は到底想像の及ぶ所には無御座候風頭は刀の如く面は割かるゝが如く足は痲痺し身體は氷の如くに候全員三十名の狙擊砲手は交々降り敷る雪に埋れつゝ此苦寒を冒して重大なる勤務に服し候不肖かゝる場合には常に日蓮上人が佐渡の國に在りて八寒を現身に感しつゝも喜び身に餘りて我等が居住して一乘を修業せん處は何れの處にても候へ常寂光の都たるべしと仰せられ又日像上人日蓮上人の池上に於て入滅の際十二歲にして妙法を京師に弘通すべき重任を托せられ其二十五歲の頃は最冬百日の間酷烈なる寒さを物ともせず雪は細字を寫し夜は由井濱の荒浪に全身を浸して久遠偈百遍題目數萬遍を唱へて曉に達せられたることなどを思ひつゝけて雪の絕え間よりさし出つる物凄き月の光にも顏に當る零下三十度の烈風にも心を慰す思ひをなして兩眼遍の如く一身悅を遍く候かくの如くにして千里異域の地に日蓮上人を慕ひ北地極寒の境に本地の風光を樂しみつゝ眼前此苦境に立ちて無悅びを味ひしこと幸とも申すはかりなく候ひき初名古屋縣奉職中は月々御講話拜聽仕候へども當地へ參り候てより月々御通知に預りながら意に任せず遺憾の至に御座候何卒よろしく御諒承下され度奉希上候　恐々謹言

思想問題

生活の問題より生命の問題へ

文學士　中川日史

生を愛し死を惡むのは、獨り人類のみではない、生きとし生ける者の總ては皆、本能的に生を憧憬し、死を懷惡するものであつて、人類の一切の事象は、この本能的なる生きんとする憧憬の心から生れ、而して社會に種々なる問題を打開し來たるものである。

斯く本能的に生を愛する人類が、社會に要求する最初のものであつて而も最根本的なるものは、生活の要素たる衣食住の問題に就いてである、現代の社會に、所謂生活問題なるものゝ力說さるゝのも、人類のこの本能的要求の上から觀て當然の事であるであらう、然るに現在の吾等の社會は、斯る人類の最根本的なる要求を容るゝに足る丈の充分な組織を持つて居るであらうか、現在の社會が一般に、社會の改造を叫んで舊き道德の權威を疑ひ、新しき道德の樹立を高調せんとする傾向のあるのも、畢竟するにこの要求から生れた必然の結果ではなからうか。

歐洲の大戰がもたらした多くの影響の中に於て、縱の力に於ても橫の力に於ても、最も深刻を極めたものは、吾人の生活問題に對する影響のそれである、今日吾人の身邊に襲來しつゝある生活難は、生きんとする人類本然の要求に對する破滅の宣言である、この生活難の逼迫が刻一刻と强烈なるに正比例して、生きんとする努力も亦刻一刻と熾烈になりつゝあつて、其所には幾多の社會問題が、喧噪に喧噪を重ねて全社會の各階級に頭を擡げ來りつゝあるのである、勞働問題のみをこの種の社會問題と見るべきではない、今日社會に論議されつゝある一切の問題は、總て强烈に吾等を襲擊し來たる生活難に對し、人類本然の要求として生に對する努力が生んだものである。

實際今日の社會は、生活難の時代である、であるから、現代の日本人は心の安定を失つて大なる不安と動搖に惱まされつゝある、とは世を憂ひ國を思ふ人々の等しく憂慮しつゝある所である、然り、現代の人心が日毎に荒みつゝある事は、誰とて否むことの能きない事實である、然らば何故に、人心は斯く不安に襲はれ、動搖に惱まされつゝあるのであらうか、固よりその原因としては三五に盡きぬであらうが、重要なるものゝ一つとしては、言ふ迄もなく、この生活難の壓迫である、換言すれば、社會政策家のいふ所の貧乏線已下の人々が、次第々々に社會に數多くなりつゝあるが爲である、この貧乏線已下に追落された多くの人達は、自己の影を生の希望の刻々に薄らぎ行く傷ましい實際生活の淋しみの中に看出すの無止事情の下に立たしめられて居るのである、斯くて日は日に、月は月に社會の全般を通じて生活難の叫が喧傳されつゝある恐らく斯く迄も生活難の叫ばるゝ事は、我國の社會に在つては、實に有史已來未曾有の事であるであらう、固より或時代に於て社會の或一部には、天變地夭の爲に、餓死をすら要求された事もあつたであらう、併しそれは偶然の出來事に外ならなかつた、然るに今日の生活難は、之を偶然の出來事として看過するには、餘りにその程度と範圍が大きく、從つて一時的な姑息な方法を以ては到底も問題は解決し得られまい、改造論者のいふが如く、總ての社會に一大改造を實行しなければ、或は到底不可能の事であるかも知れぬ。

佛國大革命の大立物であつたミラボーはいつた、人の衣・食・住の途は、働らくか、盜むかさもなくば乞食するかの外にはない、と、如何にも此等三つの方法の外に、吾等の生活の途のあるやうには思はれぬ、併し吾等は人間である限り、第二第三の方法に依て生活しやうなどゝは、夢にも考へ得られぬ、如何にもして第一の方法に依て以て生活しなければならぬ、然るに生活難の今の世は、働いて衣・食・住せん事は殆ど不可能に近からんとして居る。稼ぐに追付く貧乏なし、とは既に過去の諺として葬り去られ、今日は働いても働いても、生活難は數歩も前に先廻りして吾等の生活を脅かしつゝある狀態である、玆に於て、勞働問題を始め多くの問題は社會改造を要求し、果は恐ろしい破壞をさへ伴ふ社會問題をも惹起するが如き有樣である。

如斯、彼等は人類の本能的なる生の憧憬よりして生きんとする努力を以て、自己の生存の權利を社會に要求しつゝあるのである、この主張は固より人類として平等に正義のもので

あつて、差とて之は拒否する事の能きぬものであるから、今日は政治家は政治の運用を最善にし、經濟家は經濟の組織を最善にし、政策家は社會の施設を最善にして、人々の生活の樣式を最善のものたらしめなければならぬ時代である。

乍併、顧みて此所に至大の注意を必要とする事がある、それは彼等の生存の主張の根柢に、生存の理由の存在して居なければならぬ事である、彼等の多くの生存の主張が、果して生存の理由を意識した上のものであるであらうか、生存の理由を意識しないで、徒らに生存の主張をのみなす事は、吾人の認容し得ざる所のものである、たゞ生の憧憬が、人類として本能的のものであるとか、本然的のものであるとかいふだけの事では、未だ生存の理由を明確に意識せるものとは謂ふ事が能きぬ、從つてその生存の主張も未だ第一義的の要求と認むる事は能きなからう、生存の主張は生活の樣式に就てゞある、つて、生存の理由は生活の本義に就てゞある、暫く前者を生活の問題と呼び、後者を生命の問題と呼ぶ事が能きる。

今日の總ての社會問題を一貫して居る思想の缺陷は、多くがこの生活の樣式のみに止まつて、未だ生活の本義に想達して居ないかの憾のあることである、從つて生活の樣式たる衣・食・住の問題の解決に浮身を窶して居て、未だ生活の本義たる生命の問題に觸れて居ないのは、大に考ふ可き事ではあるまいか。

倉寒尤ちて節を知り、衣食足つて榮辱を知る、といつた事も眞理ではあるが、日蓮上人のそれの如に、衣食住の途が杜絶して朝露の日影を待つばかりの生活の中に在つて、日本第一に富める者は日蓮なる可し、と仰せられたのも亦尊い眞理である、彼は生活の樣式に重を措き、此は生活の本義に生きんとせられたのであつた、吾人の生命を翻て朝露の五十年に限つた時、人生は尊いものには相違ないが、吾人には左迄のものゝやうにも思はれぬ節のないでもない、眞實に人生の尊さは、吾人の生命が始なき始より終なき終に至るまで盡きせぬものであり、而も人生はこの久遠の生命の向上と墮落の分水嶺である事が、充分に意識せられた時に始めて味はるゝものである、この生命の問題に念ひ到つた時は、假令、衣・食・住に豪奢を極めた生活も、その生活の中に久遠の生命を墮落の深淵に沈むるやうな事があつては、衣食住のそれが如何にミジメであつても、そのミジメな中に久遠の生命を向上せしめ得た生活の方が、寧ろ眞の人生生活ではなからうか、吾人の生活は上人の仰せられた如に、世の中ものなからん時も今生の苦さへかなしゝ、況てや來世の苦をやと思食ても南無妙法蓮華經と唱へ、悅ばしからん時も今生の悅びは夢の中の夢、靈山淨土の悅びこそ實の悅びなれと思食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ退轉なく修行して、生存の理由たる久遠の生命に觸れつゝ行くものであらまほしいと思ふ。

生活の問題は對他的の要求であるが、生命の問題は對自的の自覺である、現代の人々の多くに、この對自的なる生命の自覺を後にし、對他的なる生活の要求を先にして居るかの傾向のあるのは、吾人の今直ちには贊同し得ざる所である、即ち生存の理由を明らかに意識しないで、生存の主張のみを力說高調するのは、未だ眞に人生々活の如何なるものなるかを理解せるものといふ事は能きぬ、斯くては折角生活の樣式を改造し得ても、却つて生活の本義に悖る如な事がないとも保證されまい、故に吾人は須らく先づ、生活の樣式より生活の本義へ、生活の問題より生命の問題へ、而して對他的生活の要求より對自的生命の自覺へと叫ぶものである。

改造運動と信仰（一）

文學士　武田顯龍

近時我國言論界の標語となつて居るものは、曰く束縛より自由へ、曰く差別より平等へ、曰く抑壓より解放へ、曰く秘密より公正へ、曰く軍國主義より文化主義へ、曰く資本より勞働へ、曰く產兒制限、曰く女權擴張等種々の標語が矢鱈に濫山あるが、其の主眼とし目的とする處は、要するに現在の社會狀態や、現在の社會制度や、從來の社會思潮に缺陷を感じ、不滿足を覺えたる結果、是を改善して社會を構成して居る各員、即ち權兵衛にも太郎兵衛にも誰にも普通的に都合の良い社會に造り變へやうと云ふ點にあるのである。而して此の改造運動を主唱する人が比較的に自我に眞醒めた人であり、又是に共鳴を感ずる人が矢張り比較的自我を凝視して居る人であることは勿論であるが、眞に自我に徹底した人であり、眞に自我を凝視し得た人であるか否かは此處に疑を挿まざるを得ない。

改造運動と云ふものの一體今日の社會狀態、殊に日本の社會狀態に於て改造の必要があるか否やと云ふに、梓の杖を太刀代りに横たへて、チョンマゲを樂屋頭に後生大切に殘して、ランプ亡國論を唱へ、電氣燈を見てはお星樣の世界を羨如する者と寫り、飛行機を見ては萬物の靈長が鳥獸の眞似すると云つて怒る、頑固な保守論者や、俺の若い時には五升の酒を飲んで丸木橋を高足駄で渡つたの、やれ四斗入の俵を三俵一時に持ち上げたのと云ふことが、全生涯の過去に於ける唯一の誇であり、又現在に於て其を話して若き者を嘲ることが唯一の樂である御老人ならいさ知らず、血沸き肉躍る青年並に壯年の者は、假令向上し得ざる迄も、尠くとも現在の境遇に滿足し得るものではない。現在に情弊あらば之を打破してより完全なる社會とし、現在の境遇よりもより善き境遇に進まんとするもので、是は墜えんとしても墜へ得ざる、必然的に且つ普遍的な而も妥當性を帶びた欲求である。

此の向上欲を有する以上我日本の社會狀態に所謂廣義の改造運動の起ることは無理のない事で、是を兎や角云ふのはちと聞へない話である。勿論今日改造を唱ふる人の心理狀態及び思潮には唾棄すべき點が多々あるが、其は其の人の心理狀態及び思潮を責め且つ矯正すべきであつて、一概に改造運動を惡しざまに云ふは角を矯めんとして牛を殺すの類である。

現在の日本の狀態を見るに飛行機は地を匍伏するものであり、飛んでも松の枝に引つ掛るものであり、汽車は衝突するものであり、自働車は泥掛を掛けるものであり、電車は鈴成りになるものであり、公園の樹木は此の枝折る可からずと云ふ制札を背負ふて居るものであり、停車場の改札口では傷我人を出す可きであり、景勝の地は貴族富豪の獨占すべきであり、一寸の空地あるを許さざる大東京、祖先傳來のお墓すら郡部へ移せと御命令の出た大東京に、山林原野田畑のあるべきであり、郵便局では劍突を食はされ、地方役場では平身低頭三拜九拜すべきであり、稅務官吏又は名譽職有志者公吏など云ふ者は砂利を食ひ、道を衣服とし、瓦斯を住宅とし、鐵管をも食ふべきである今日は大に改造の必要がある。劃一的形式主義教育の結果は學生は徒に日に夜を續いで昇格運動に狂奔して空名を得るに努め、教育の實績は少しも擧がらぬではないか、利を以て集る小人の集合たる今日の黨人輩に、完全なる政治の施行を望むは梯を以て天に至らんと望むと同一である、宗教家にしては御坐成りの言論のみ徒らに多くて、言はざらんとするも豈得可けんやと云ふが如き、眞に自個衷心よりの叫であり、眞に人の琴線に觸るるが如き言說の試に少きは宗教の墮落ではないか。改造運動を唱へる者が事大主義である日本は、實に時代錯誤の國柄である。貧乏の時には共鳴し、懐が暖まれば急に貴族主義に改宗する現代人、勞働問題を云爲しながら遊んで徒食する現代人、協調主義を主張しながら已のみ高閣に安居し、美衣美食に飽き、然も自個の利益の爲には他の何物をも犧牲にして憚らざる現代人、論語讀みの論語知らず、醫者の不養生、坊主の無信心と云ふ俗語に依つて最も完全に標示せらるる現代人に依つて充たされ居る今日の日本、殊に改造運動の標語が數限りなく多く、爲に思想界が紛亂雜然を極め居る今日の日本、此の大正十年初頭の日本に誰れか改造の必要なしと云ひ得るものぞ。更に思想界改造の必要より改造原理としての信仰問題に論及して見度い。（續く）

年頭の願望

熊井本光

大正十年の年頭に當つて願望する所のもの二つ、其の一は社會に向つてする宗教問題の社會化である、謂ふに彼の婦人問題といひ勞働問題といひ、其の婦人問題たるや單に婦人のみの問題に非ずして社會の問題たるが如く、亦た其の勞働問題たるや單に勞働者のみの問題に非ずして一大社會問題たるが如く、宗教問題も亦た單に宗教圈內の問題に非ずして實に社會の一大問題であらねばならぬと思ふ、夠も宗教問題には種々の問題が横はつては居るが、現代の社會に向つて最も緊要なる一事は實に宗教信念の復活問題であらうと思ふ、現代社會の思想及び現象の混亂が其の禍を唯物主義の彌滿跋扈に發するとするならば、之れが安定には精神問題の根本に觸れたる宗教信念の復活を得て始めて物心二面の調和を遂げ得ることと信ずる、果して然らば宗教の內容如何はさて措き又た宗教圈內の諸問題もさて措き、先づ以つて宗教的信念の復活運動に向つて其の全力を傾注せなければなるまい。併しながら其の宗教的信念の復活運動の先決問題として予は先づ宗教の要不要を決せんとを社會に向つてすゝめたい、何事に對しても其の徹底味を得なければ止まない現代人にして、社會の一大事象たる宗教其のものを現代の如く要するが如くまた要せざるが如く曖昧の中に存在せしむる事は余の以つて如何にも不思議に堪えないとする所である、宗教が若し不必要であるとするならば宜しく社會の力を以つて之れが駆滅を期すべ

く、然らば其の廣き寺院の境域より得る所の地所は以つて幾分なりとも都市住宅の緩和を成し得る利益だけでも有るではないか、若し又宗教を眞に必要とするならば今少し社會は宗教に向つて眞面目なる注意を拂ふべきことを要し、僧侶及び寺院をして更に社會により多く有用たらしむべく社會力を以つて之れを促進すべき必要があらうと思ふ、然る時始めて宗教の活用有り然る時始めて宗教の優劣を決すべき時機も到來すべく、然して始めて宗教の統一を達成し得べしと信ずる、要は宗教家の宗教たらしめずして、之れを社會の問題として始めて宗教の要不要も決し、宗教的信念の復活も得、其の優劣を決し、其の統一を得べき事を信ずるのである。

二は信仰の實生活化にして、是れ必ずしも新らしき問題ではないけれども、予の特に年頭に當つて提唱せんとする所以は、大正十年は實に聖德太子の千三百年祭に相當し、且つ日蓮大聖人の聖誕七百年に相當するより起る予の願望である、聖德太子は人も知る如く實に日本文明の最初の開拓者でありとも稱すべき大聖にして、然も法華經を以つて鎭護國家の中心德教として日本文明を開拓せられたのである、然して其の理想とせらるゝ所は法華信仰の實生活化たる皆順實相にありしや亦た論を俟たざる所であらう、然して日蓮大聖人の理想せられたる所も亦た法華精神を以つて國民精神の統一を期し以つて立正安國を叫び、更に法華信仰を實生活化せんとして「宮仕へを法華經と思召せ」と云ひ「佛法の爲めにも世間の爲めにもよかれかしよかれかしと鎌倉中の人々の口にうたはれ給へ」と警誡せられた、然らば則ち日蓮大聖人は實に聖德太子の理想の正系を傳へた人とも言ふべく、彼の淨土眞宗等が聖德太子の法華中心を阿彌陀經中心に說換して信仰の實生活化を唱へ、以つて聖德太子の正系を繼ぎりなどと云へるは實に以つて片腹痛き言ひ草であると思ふ、其の軌を一つにせる太子と聖人が、其の紀念すべき年を本年に俱にせられたりと云ふ事は、遇然とはいひながら亦た以つて意味深きことゝ拜せざるを得ない。

宗教運用の效果が信仰の實生活化に存する事は言ふまでもない事で有るにも拘はらず、現代の宗教をして實社會と斯くばかり緣遠き所にかけ放して置かるゝ事は、社會をして宗教を無用の長物たるが如く誤解せしめた所以であらう、若し幸にして社會が宗教を以つて看過すべからざる社會の一大事象として、之れが要不要優劣を社會的に決した曉には、吾が日蓮主義が最後の勝利者たること火を睹るよりも明かなる事であると信ずる予は、內に信仰の實生活化に努め外に宗教問題の社會化を醸成し、兩々相待つて以つて吾人が最後の理想を達獲せんとする、是れ予が大正十年の年頭に當つて衷心願望する所である。

（柳敬筆記）

脚本　維摩の娘（一幕）

野村香明子

人物、
維摩居士、
妻　無垢、
娘　月女、
舍利弗、
婆羅門貴公子、
老僕、
侍女、

場所、
維摩居士の部屋、

維摩は脇側に依り掛つて居睡つてゐる。
妻無垢が入つて來る。

無垢。貴郎！貴郎！
　呼んでも覺めさうにない。
　轉寢なんかなすつてはいけませんよ。起さて下さい。
　揺り起す。漸く目が覺める。
維摩。あゝゝ（伸をして）何の用だ。
無垢。居睡りなんかなさると風をひきますよ。
維摩。何時の間にか良い氣で眠つたとみえる。
無垢。隨分暢氣な方だから、貴郎には私の心配がお分りになりませんのね。
維摩。俺だつていゝ加減心配してるぢやないか。
無垢。だつて夫はお口だけでせう。居睡りをなさるだけでも貴郎にはずゐい所があるのです。
維摩。烏渡、居眠つたからと云つて、さう神經過敏に成られちや堪らないね。
　少し慎つてみせる。
無垢。他の場合とは違ひますからね。少しは私の氣持ちを察して下すつてもいゝでせう。
維摩。母親としてのお前の氣持ちは察しるよ。然し俺には、どうしていゝか皆目何も考へられない。

無垢。まだそんな事を仰しやつてますの。早く何とか決めて下さらない事には、私だつて本統に困るぢやありませんか。

維摩。さう俺ばかり責めないで呉れ。恁うなれば何事も成り行きに任せやう。道窮すれば通ずで、どうにか成らない事もないだらう。

無垢。何て頼りない事を仰しやるのでせうね。

落胆する。

維摩。だが考へてごらん。皆な同じやうな男を幾人も相手にして、さう手取り早く決められもしないよ。何と云つても一生の大事だからね。

無垢。然し、大勢の中から一人を撰ぶ権利は私達に有るのでせう。貴郎さへしつかりして下されば、誰にだつて自由に定められるぢやありませんか。

維摩。ではお前が撰ぶとしたら……。

無垢。私なら娘の連合ひとして、あの婆羅門の貴公子が一番立派だと思ひます。

維摩。あの男は外道の者だと云ふ事を知つてゐるだらうね。

無垢。存じてます。でも今はそんなどうでも良い事に彼是云つてはゐられないでせう、あの方はお金持ちの獨息子で、あの通り凛々しくつて、見ただけでも男らしい方ぢやありませんか。

維摩。閉ぢられをしたね。

無垢。お笑ひに成りますの？だつて大事な娘の爲ぢやありませんか。いゝ上にもいゝ良人を持たせてやりたいと思ふのは、母親の至情ですからね。

維摩。折角だが、其の阿母さん丈りに賛成は出來ないよ。

無垢。何故で御座いますの。

維摩。云はなくても、俺の反對する理由位ゐ分りさうなものだね。外道の者との婚姻は絶對に眞平だよ。

無垢。娘の結婚に宗旨の事なんか、どうでもいゝぢやありませんか。

維摩。いや俺も恁うして佛様の教へを聞いて居るからだ。婆羅門外道と親類關係を結んだと聞へちや、實に心羞かしいからね。

無垢。そんな見得坊から仰しやるのなら、その事は後でどうにでもなるでせう。

維摩。所があの男は、お前の甘い目に惚ふやうな男ぢやないよ。娘との縁組みを機會に、俺等まで自分の方へ引込まうと云ふ野心家なんだからね。

無垢。ぢや貴郎には、一體どんな男ならお氣に入るのでせう。

維摩。父親として娘の爲に良人を選ぶなら、あの瑞々しい智慧を持つてゐる舎利弗さ。

無垢。まあ！いやなこと。毎時も〳〵どろ〳〵の汚れた風姿をしてゐる、あんな貧乏男をですつて？

維摩。夫だから迷ふのだよ。いくら美い男でも生活に困るやうな者ぢや、娘をやる事も出來ないからね。

無垢。えゝ、さうですとも、お話を聴いただけで、貴郎のものの好きにも呆れますわ。

維摩。然し、あの貴公子との話はどこ迄も同意出來ないよ。

無垢。では一さうお城下の、輦車の若さん達の中から誰れかを選んではどうでせう。

維摩。大事の月女をやつてもいゝ男があるのかい。俺には見拔くやうな人物は一人も見附からないがね。

無垢。あんまり十分な事は云つてゐられませんよ。世間ではいろ〳〵とうるさい噂を致しますからね。大抵の所で決めた方が良くはないでせうか。

維摩。まあ考へて置かう。

無垢。またですか。居眠りをなさる暇はあつても、眞剣に考へては下さらないぢやありませんか。

維摩。此度は大丈夫だ。それには娘の意志を聞めてやる必要もあるから、月女を此所へ呼んでおいで……。

無垢。あの娘には本統に困りものですよ。今日も朝から出た切りなんですが……。

維摩。また佛様の許へでも伺つてゐるのだらう。

無垢。呼びにやりませう。

立ちかける。

維摩。いや、打つちやつて置け、歸つてい〻時分には歸つてくるよ。

侍女が這入つてくる。

侍女。只今貴公子様のお宅からお使がゐらつしやいました。是は今日のお贈物ださうで御座います。

立派な果實のバスケを出す。

無垢。後から御本人がゐらつしやるのかい。

侍女。はい、毎時のやうに後程、お見えになるさうで御座います。

無垢。よろしく申上げてお呉れ。

侍女。畏りました。

去る。

無垢。貴郎！これだから私困りますの。毎時も〳〵恁うして

大したお心附けなんでせう。

維摩。うむ。

無垢。あんまり先の事まで考へないで、月女はあの方に貰つて戴かうぢやありませんか。彼方には伽羅で造つた馬車があるんですつてね。

維摩。うむ。

無垢。貴石だつて遠い外國の物を持つてゐらつしやるさうですよ。何しろお金においとひのない家でせう。

維摩。うむ。

無垢。ぐず〳〵してると他所へ見替へられて仕舞ひますよ。一さうあの方に決めませうか。

維摩。もう止して呉れ。聞くのが面倒だ。

無垢。まあ！何て方でせう。貴郎の娘の事を御相談してゐるのですよ。

維摩。止せ。うるさいぢやないか。

立つて歩き出す。

無垢。ぢやもう御相談いたしません。

怒つた樣子である。

維摩。また怒つたのだな。

嘆息する。老僕が入つて來る。

老僕。旦那樣。大變な事で御座います。

維摩。何だ。

老僕。婆羅門の貴公子が、とんでもない事を云つて居るさうで御座います。

維摩。一體その樣子はどうしたのだ。もつと落ち着いて話さないか。

老僕。へえ。あんまり吃驚したもんですから。

恐縮して汗を拭く。

實は街の者の話に依りますと、あの貴公子が何でもお嬢樣を拐かさうとして、今日は大勢の供廻りを伴れて、此方へ參るさうで御座います。

維摩。愈よ、暴力に訴へても、娘を得たいと云ふのだな。

老僕。さうで御座います。親御なりお嬢樣が、緣談の申込みをお聞入れ下さればよし、でなければ、かつぱらつて也も連れて行かう算段らしいと、街では大變な噂をいたして居ます。

維摩。外道の奴のやりさうな事だ。然し事實とするなら困つた事だ。

老僕。どうぞ御用心を願ひます。事に依ると旦那樣方に危害を加へやうも知れません。

維摩。娘はまだ歸らないか。

老僕。まだお歸りになりません。

維摩。お前。早く迎ひに行つて呉れ。

老僕。へえ。お釋迦樣のゐらつしやる、例の道場へ參つたらいゝので御座いますね。

維摩。さうだ。大急ぎで頼むよ。

老僕去る。

噫！俺も恁うしてはゐられない。

緩いて去る。娘の月女と舍利弗とお這入つて來る。

舍利弗。お家の中が馬鹿に靜かですね。

月女。みんな留守のやうですわ。

果實のバスケを見て眉をひそめる。

障利弗。大變、立派な贈物ですね。誰かお出でになるのではありませんか。

月女。來る方があるかも知れません。

舍利弗。お客樣なら私はこれで失禮します。

月女。いゝのですよ。構ひませんからごゆつくり。

舍利弗。さうですか。ぢやもう暫く遊ばして貰ひませう。

月女。えゝ。今日は思ひがけなく色々な事をお話しましたね。

舍利弗。意外に貴女も手强い敵である事を知りましたよ。

月女。少しはお耳に殘るやうな事を云ひましたかしら。

舍利弗。どの議論も伸々立派でした。

月女。でもまだ駄目ですわ。侮辱なさる方もありますからね。

舍利弗。さう云へば先刻。不空見の奴、何か失禮な事を云つたようですね。

月女。あの小父さんは頭から私を見縊つてゐるのですわ。つまり女だから、どんなに修業を積んだ所で、全人格者には成れないと云ふのです。

舍利弗。では成れる自信をお持ちですか。

月女。えゝ。男だつて女だつて、人としての本體に變りはないのですもの、心懸け一つでどんな立派な人格者にだつて成れると思ひます。恰度、宇宙の本體が常住不變のやうに、全人格者に成る素質は、男女の別なく人類が持つてゐる筈ぢやないでせうか。私はさう信じます。

舍利弗。ます〳〵貴女は、侮る事の出來ない敵です。

月女。敵ではない味方だと云つて下さい。

舍利弗。いや。貴女と私は今、處世上お互に異つた道を歩いてます。だから敵と云つて惡ければ競爭者とでも云ふ間柄ですよ。

月女。敵だとか競爭者だとか、隨分ケチな事をお云ひですわ。

處世法が異つた所で、お互に一つの道を歩いてゐる、道伴れだとは云へるでせう。

舍利弗。所がです。女子の天職は男子のそれとは違ひませう。お互に競走しながら自己の完成を期してゐるのです。別して女は、自分以外の女性を競走者だと思つて、お互に嫉妬さへすると云ふちやありませんか。つまり處世の意義は其所に在るのですよ。

月女。そんな風に、女の外見を批評なさるものぢやありませんわ。私達の心は油斷をすると直ぐ汚い物で覆はれやうとします。時には嫉妬もするでせうし嘘も云ひます、憤つたり泣いたりするのも、女が專有してゐるやうですわ。然しそれは子供が學校からの歸りに、道草をするやうなものですよ。お母さんの待つてゐる家へ歸らうと云ふ考へは、みんな同じやうに持つてます。

舍利弗。さう云へば、女同志はそんなものでせう。

月女。いえ。女ばかりぢやありませんわ。今貴方の仰しやる、男女天分を異にすると云ふ事も、たゞ人生の行路が違ふだけで、目的はどうせ一つなんですよ。先程お話したやうに、全人格に成る事が私達最後の目的なんでせう。すれば男女それ〳〵、道をどこに選んだ所で、何れは一つの所へ行くのです。

舍利弗。さあ。夫にした所でお互は道伴れとは云へませんよ。私の競走者と云ふ意味も、つまり其所に在るのです。目的はそのやうに一つでも、その道程がお互の生活に意義あらしめるのぢやありませんか。目的地へ急けて居る者と、精を出して行く者と、成功不成功の出來る譯も、必然そこに現れて來るでせう。すると成功を期す者は、怠け者と道伴れに成つてゐる譯にはゆきませんからね。

月女。その御意見だと、貴方はやつぱり目的を忘れて道程に囚はれてお出です。少し急けたり遲れたりした所で、行く所へ行きさへすればその道筋の出來事は咎めなくてもいゝでせう。皆がみな、一定のリベルに達した、能力や體質の揃つた者ばかりとは云へませんからね。

舍利弗。御意見には恐縮しました。手強い敵所か、今後は尊敬しなければなりません。

月女。まあそんな笑談なんか仰しやるものぢやありませんわ。まだ〳〵大きな口の利ける柄ではないのです。

舍利弗。いや年長者だと思つて先輩顔をしてゐた自分を恥かしく思ひます。所でどうです。貴女を一つ立派な學校の先生に開設しようぢやありませんか。

月女。有難う。でも私には今決つた仕事がありますから。

舍利弗。たしか幼稚園にお勤めでしたね。

月女。えゝ。保姆を致してます。

舍利弗。貴女程に見識のある方を、幼稚園に置いておくなんて實に惜しいですよ。人材の乏しい折柄です。是非一つ高等の學校へ出て下さい。

月女。御好意は忝けなう御座いますが、私は現職を退かうとは思ひません。

舍利弗。何故です。無論少しは骨の折れる事でせうが、夫だけ子供相手の仕事より報はれる所がありますよ。例へば貴女の全智識を多くの學生に示す事も出來るでせう

月女。でも大學の先生にしろ幼稚園の保姆にしろ、教へると云ふ事には何の變りもないのです。相手が子供であれば夫のやうに、教育の眞髓にふれた教へ方があるでせら、私は夫を思ひますと、現職で十分なんで御座います。

舍利弗。そんな議論をなさるにも及ばないでせう。どん〳〵遠慮なく出て下さい。今は人材登用の時代ですからね。

月女。無意義な遠慮から御辭退なんか致しません。教育者と云ふ使命は、大きくても小さくつても、その本質に變りはないのです。私は自分の仕事に出來るだけ忠實であれば、夫でいゝと思ひます。

舍利弗。成る程、是は私が輕率な事を云ひました。

月女。折角の御親切を無にして、お氣を惡くしないで下さい。

舍利弗。どうして。益ゝ尊敬の念を持ちますよ。歸つたら師匠にもよく貴女の精神を傳へます。

月女。有難う。まだ〳〵足りない所ばかりですか、出來るだけ佛樣のお心に接ふやうに成りたいと、思つて居りますから。

涙組む。

舍利弗。どうしました。氣分でも惡くなつたのですか。

月女。いえ。

舍利弗。涙組んでゐるぢやありませんか。

月女。私急に悲しく成つたのです。

舍利弗。何か思ひ出したのですか。

月女。えゝ。

舍利弗。何です。云つて下さい。

默つて泣き出す。

貴女にも秘密があるのですか。

月女。誤解をしないで下さい。私は自分の佛性を展く爲に、ちようど蠶のやうに一枚〳〵皮を脱いで來たのです。而しては其の中から、少しづゝ本統の自分を見附け出しました。

舍利弗。なる程……。

月女。夫はまるでお產をする人の苦しみのやうに、隨分辛いものでした。

舍利弗。ちや貴女は、精神のお產を經驗した譯ですね。

月女。えゝ。夫が何時も難產のやうに辛かつたのですよ。今ふと其の時の事を思ひ出したら、私だけそんな苦しみをしない事には、眞人間に成れないのかと悲しく成りました。

舍利弗。そんな事があるものですか。さう云ふ風に出產の慘を知つてこそ、生れ出た物に初めて、尊い價値があるのです。さう云へば私なんか、記憶する程苦しんで自己を見出した例がありません。

悄然として考へ込む。

月女。貴方なんか、元々お偉いんですものね。

舍利弗。いや。私には苦しんで自己を見出さうとする、眞無な力がなかつたのです。總てが上滑りであつたのです。で、貴女の物が眞實であるのに、私の物は空虛だと云ふ事に成ります。嵩では貴女に勝つてゐても、量の上では遙に劣つてゐるのです。貴女は實に見上げた方だ。

月女。さう云つて褒めて頂くと、少しは張合ひを覺へます。是からだつて、恐らく私の生涯は、苦しみの中に自己を生すことだらうと思ひます。

舍利弗。私も大いに試練されませう。今日は歸つても、師匠を悅ばす事が出來ます。ちやもうおいとましませう。

月女。さうですか。お構ひしませんでした。

舍利弗。失禮します。

月女。さようなら。

去る。室內を歩きながら獨白。

私の生活もどうやら眞實に成つて來た。たつた一つの魂は、あの方に捧げてしまつたから、何處迄もお心に協ふやうにしなければならない。然も私は、一番捧げ甲斐のある人に自分を捧げたと思つてゐる。

維摩が心配さうに入つてくる。

どうなすつたの。お父樣……。

維摩。お前には俺の心配が分らないだらう。

月女。えゝ。でも別に心配なんかない筈ですわ。

維摩。人は何時も無事だとは云へないからね。

月女。夫はさうですが……一體どうなすつたのですか。

維摩。俺の壽命を縮めるやうな事が、起つて居るのだ。事によると命も危いか分らない。

月女。夫は何の事を仰しやるのです。譯を云つて下さいまし。

維摩。お前に結婚を申込んでゐる、あの婆羅門の貴公子が、萬一の場合には俺なりお母さんをぶち斬つて、お前を、ものにすると云つてゐる。

月女。まあ！そんな脅しに驚いてゐらつしやるのですか。

維摩。脅かしだ。馬鹿な。街ではどんな噂をしてゐるか、お前は何も知らないのだよ。

月女。たとへどんな噂があるにした所で、何もさう懼れるにも當らないでせう。

維摩。生意氣を云ふね。

月女。さうぢやありません。私達日頃の信仰は、恁う云ふ時に役に立つのぢやないでせうか。私はさうだらうと思ひます。だから無分別に恐れる事はないと思ふのです。

維摩。そんな輕氣な理屈を云つてゐて、いざと成つて狼狽るな。

月女。口賢い事を申ますが、決して見苦しいやうな事は致しません。

維摩。俺はどうも案じられる。だから一つお前の決心を聞いて置く。あの話はどう思ふね。

月女。無論いやで御座います。

維摩。お前には此の俺の涙が分らないか。夫より其所にある立派な贈物。俺達の手にはない富の力が分らないか。

月女。お父樣のお心が、どうして何時の間に變つたのでせう。あの方との結婚は、貴方が第一に反對なすつたのですよ。

維摩。俺は今、背に腹は代られないのだ。お前さへ辛棒をして承知をして呉れゝば、お母さんと共々喜ぶよ。

月女。そんなに心配しないで、私に任せて下さいまし。屹度いゝやうに致します。

維摩。ちや承知をして呉れるのかい。

月女。承知は出來ませんが、少し考へてゐる事がありますから。

維摩。詰合つたやうな事を云つて、其の場で困るのぢやなからうね。

月女。どうぞ佛敎徒の權威を見てゐて下さいまし。屹度大丈

夫で御座います。

騒々しい物音が聞えて来る。

維摩。おゝ。本人が訪ねて来た様子だ。成る程、供廻りも大勢らしい。

月女。心配をしないで彼方へおらつしやい。私は強い自信を持つてます。

維摩の手を引いて這入る。婆羅門の貴公子と侍女と入つてくる。

侍女。暫くお待ち下さいまし。

貴公子。ちやお在宅なんですね。

侍女。はい。今しがたお歸りに成つたので御座います。

貴公子。早くお目に懸りたいと云つて下さい。

侍女。はい。

去る。月女出て来る。

月女。おらつしやいまし。

貴公子。暫くでした。何時もお美しいですね。

月女。愉快に日を送つて居りますから、憂ひ顔に成らないので御座います。

貴公子。さうでせう。貴女の美しい容姿に心を寄せて、歡心を買はうと集る青年達が多いさうですから、愉快にお暮しなのも尤です。

月女。そんな邪推をなすつちや可笑しうございますわ。

貴公子。然し城下の富豪の青年達が、貴女を妻にしようと思つて、爭つて居ると云ふちやありませんか。戀に狂ふた男を相手にしてゐたら、定めし愉快だらうと思ひます。

月女。益々可笑しくなりますわ。私の愉快なのはそんな譯ちやありません。

貴公子。時に豫ての話はどうして下さるのですか。今日はお返事を聞きに來たのです。

月女。貴方は私をよく御存じないのでせう。だからあんな申込みをなすつたのですよ。

貴公子。そんな事は問題ちやありません。

月女。夫なら私の一切を所有したいとお思ひでせう。取分け大事な魂を無瑕のままで。

貴公子。無論です。だから結婚の申込みをしたのです。

月女。所が私は貴方の御希望を充す事が出來ないのです。

貴公子。先約がおありですか。

月女。いゝえ。

貴公子。夫なら何でもないちやありませんか。

月女。私は傷ものです。

貴公子。問題にはなりません。何であらうとその美しい貴女を、妻にする事が出來たら我願足りです。又貴女に選ばれた所で、私の地位と境遇は、決して御不足ちやなからうと思ひます。

月女。ですが私は、お心に協ふ譯には參りません。折角ですがあれはお斷りいたします。

貴公子。何が不足です。夫とも私に恥を掻かせるつもりなんですか。それならそのやうに私にも考へがあります。多分そんな事ちやないかと思つたので、實は用意して來ました。云ひ出した男の意地です。場合に依つては、非常手段に訴へて、私の威力を示します。

月女。まあ落ち着いて下さいまし。私の申す事を誤解なすつちや困ります。

貴公子。餘計な云ひ譯は聞きたくありませんよ。此の幾日戀に狂ふた私だ、時間潰しのお說法は止して下さい。

月女。お心はよく分ります。實は私にもその苦い經驗がありますので、十分お察し出來ますわ。

貴公子。おゝ。どんな經驗です。

月女。私の傷ものである說明話なんですから、包まずありのまゝを申ます。その當時、私は貴郎も終來の事も、何も考へられなくつて、たゞ戀しさの熱情に陶へた事があるのです。

貴公子。意外だ。一體貴女の戀した男とは誰です。

月女。名門家で、立派な位置にある、人々よりいつも羨しがられてゐる境遇の人でした、而して私も、澤山の競走者と敵を持ちました。が、その誰が戀慕するよりも、自分の熱愛の情が勝れてゐると自信して、勝利者に成らう爲に種々の計畫を立てました。其の時は理性の判斷なんか無くなつて、たゞ感情の衝動の儘に動くのです。

貴公子。私の心持ちが今それだ。全くその通りだ。

月女。遂には死の覺悟まで出來ました。そんな譯ですから、戀慕の心以外に何等、怖れる物もありません。苦しんだ果にとう〳〵、思ひ切つて打ち明ける氣になつたのです。私はどうして夫を訴へたか覺へません。

貴公子は片唾を呑んで一心に聞く。

私はもう必死です。赤面して恥を掻くか、多くの競爭者に勝つた誇を感じるか、二つに一つの瀨戸際に立ちました、何を犧牲にしてもいゝ勝ちたいと思つたの

です。私の心は、まるで凶暴な虎のやうに狂ふて居りました。

貴公子。分ります。眞鍮に染んで分ります。

　眼を乘り出して緊張して來る

月女。所が私の希望は裏切られました。優しい言葉どころか、たつた一言の挨拶も受ける事が出來ませんでした。私の試みは何の反響もなく、空しくなつたので御座います。私の失望をお察し下さい。

貴公子。あゝゝゝ。

　眞から嘆息する。落膽の體。

月女。私は憤りたく成りました。侮辱されたと思つて腹が立ちました。取り返しのつかない失策をしたと思つて、後悔もしたのです。

貴公子。夫でどうしました。

月女。一さう遠い外國へでも行つて、何もかも忘れて仕舞ひたいと思ひました。

貴公子。復讐をしようとは思はなかつたのですか。

月女。不思議にその念は起らないのです。たゞ自分が惨目で堪りませんでした。いくら泣いても泣き足りないのです。涙が溺れる程泣いた時、私はふと悲しみから覺醒めました。

　貴公子は益々緊張ぶりを見せる。

私は永久にその方を愛さうと思つたのです。

貴公子。木偶のやうな反響のない男をですか。

　暫々呆れた風をする。

月女。えゝ。相手の如何にかゝはらず、私は自分だけで私の愛を育てやうと思ひました。

貴公子。どう云ふ意味です。夫は……。

月女。つまり私の愛が眞實なら、結果の如何に依つて變る筈がないと、思ひ附いたのです。見返られなかつた心の中に、何時迄もその愛が、不變の力で籠つてゐる筈だと考へました。たとへ報はれる物がなくても、愛人は私の心に育つと思ふやうに成つたのです。

貴公子。夫で物足りなくはないですか。

月女。すると以前より以上の力が湧いて來るのです。夫にその方は尊い教をお說きになるのです。私は愛するが故に、その方の仰しやる事は、何一つ無駄には聞くまいとしたのです。私の總てを擧げてその方の敎に捧げました。單に愛慕の念であつたのが、夫では濟ない氣がして來て、改めて尊敬するやうに成りました。今では以前の感情的な愛着から解說して、一心に恁う渴仰してゐます。

　思はず合掌してみせる。

私の愛はもう決して破れる事も損はれる事もありません。久遠の生命と共にあるのです。

貴公子。よく其所まで考へられましたね。

　染々感動したらしく云ふ。

月女。眞から愛する時には、誰でも其所まで考へられると思ひます。美しいの奇麗のと云つて騷ぐ裡は、純潔な心ちやありません。

貴公子。そこ迄、貴女に考へさせた男とは誰でせう。隨分傑い人ですね。

月女。えゝ。本統に傑い方でせう。云はゞ私が誘拐の惡魔でしたのにね。

貴公子、どうかその人の名を明かして下さい。

月女。えゝ。

貴公子。云つちや惡いのですか。

月女。その前に、私の心は今お話するやうな譯で、もう誰をも愛する餘裕のない拔け殼のやうなものだとお分りになりまして？

貴公子。分りました。

月女。有難う。然しお斷りして置きますが、私は戀をしたりされたりする資格がないだけで、慈愛の心は十分に持つてます。人類の總てを愛さなければならない、博い愛はあるのです。恁う私の古い傷をお話して來ると、容易に灰滅する此の肉身に、何の價値がありませう。私はどこ迄も偉大なものは、曾て痛めた魂を育てなければなりません。そんな譯ですから、あの話はきれいに取り消して下さいまし。貴方の尊い魂をお受けになる方は、屹度何處かで機會を俟てお出です。

貴公子。もう夫以上の事は云はないで下さい。私は貴女の尊い淸いお心に感心しました。私の總てを捧げます。どうか貴女に奉仕させて下さい。

月女。夫なら、其の思し召しを、私の渴仰する方に捧げて下さいまし。他でもありません、あの毗耶離城の西の方で、今道場を開いてゐらつしやる釋迦樣ですから。而して人類の爲に、十分盡して敎きたいと思ひます。

貴公子。お心の儘に成りませう。

月女。では澤山のお供の方を、先へお返しに成つてはどうです。二人で尊い方の許へ、參りませう。

貴公子。えゝ。

面目なさゝうに頭を掻く。

ではさう云つて歸らせます。

去る。維摩が出て來る

維摩。馬鹿に話が長いぢやないか。

月女。もう心配はしないで下さい。大勢の供廻りも直ぐ歸るはずですから。

維摩。話はうまくいつたのかい。

月女。えゝ。是より貴公子をお釋迦樣の許へ伴れて行く事に成りました。

維摩。夫はまた思ひ掛けずに……然し俺を擯ぐのぢやあるまいね。

月女。もう婆羅門外道の人ではない誓を立てさせて參ります

維摩。あゝ。やつとこれで助かつた。安神した。

貴公子が入つて來る。

貴公子。一時間前の事を考へると冷汗が出ます。物々しい供廻りをみたら、來る時に通つた路は、二度と歩けないぞと思ひました。

維摩。貴方の御發心を祝賀します。お目出度う。

貴公子。今迄の御無禮をお許し下さい。

月女。誰も咎める者は居りません。さあ參りませう。……。

（幕）

「附記」

豫て月上女經を具體化してみたいと思つて居りました。要然涅槃の經對境を設いた高遠の理想は、とても私なぞの力でどうしようもありませんでした。然し出來ないと見切りを附けてしまふには、最初の思ひ立ちに餘り未練が多いのです。力に相應した物をやればとも思つたのですが、是度思ひ切つて書いて見たのです。元よりつまらない物ではありますが、經典の全部を貫いてゐる、月上女の強い信念は私に此の事を思ひ立たせた動機なので、たゞその信念を扱つて此の試みの目的としたに過ぎません。常に教導者に依つて教へられる所を、體驗する所まで進まなくては、熱と力を伴つた何物をも自己の中に見出すことは出來ないと思ひます。私は夫を此の試みでは戀愛に附してみたのです。云よのは男は常に自己の事業を第一義視してゐます。女性の第一義的なものは戀愛です。此の經典の中心人物は女性です。だから特に戀愛を取り扱つてみる氣に成りました。戀愛の力は女をどのやうにでも支配します。女の周圍に在る物は、殆ど愛の至情を使つて解決する事ばかりです。夫なのに此の大きな力は、決して良い物ばかりを生み出すとは云へません。時に最も醜いものを出すのです。醜惡など云つても夫が人間の本能であるなら、止むを得ないと思ひます、たゞ其の本能を、正しい理性の批判に訴へて、統御する事が必要です。その批判とは教の力と夫に對する信念だと思ひます。從つて此の力は、醜なる物を淨化するエネルギーであらねばなりません。此の場合、眞の信念は少なくも、戀愛の熱情がクライマックスに達した時、驀然と叫び出る物でなければ嘘だと思ひます、愛慕の至情が、渴仰に淨化されなければ、此の月上女のやうな信念が體得されるとは思はれません。で、絶對の信仰を得るには、常に試練されたる物だと思ひます。最後に此の一篇は、そんな譯から經典の事實に囚はれなかつた事をお斷りして置きます。

（大正九年九月三十日）

記事

本多總裁の九州巡錫

岡山、廣島、呉、各地の大講演を了し九州に向はれたる本多大僧正猊下は十一月十二日午後三時四十三分長崎に着し斯波三菱造船所長、長岡職工課長、米原海軍大佐、寺島海軍中佐、井上海軍中佐、其他長崎報德會員、日蓮上人鑽仰會員等多數の出迎を受け自働車にて上野旅館に入る、同日午後七時より市役所樣上に於て報德會及鑽仰會主催の下に思想講演會を開く。

開會宣言、　米原海軍豫備大佐
勅語捧讀、　寺島海軍中佐
開會之旨趣、　永山圖書館長
思想選擇の基準、　本多日生猊下

會衆五百名、二時間半に亘る猊下の大獅子吼は深大なる印刻を留め思想選擇の重大なる事を意識せしめたり、因に當地に於ける日蓮鑽仰會は創立壹ヶ年に過ぎざるも殆んど有識者百三十名を有し毎月第一、第三、金曜日に例會を開催し漸次發展しつゝありと云ふ。

○十一月十三日午前十時三十分より三菱造船所立神工場に於て職工講話、會衆二千名餘、石龜造船部長開會宣言

人格教育　本多猊下

○同日午後三時三十分より飽の浦工場に於て職工千六百名の爲めに、開會宣言、阿部造機部長

人の心　本多猊下

○同日午後七時より中島會館に於て大講演會開催、聽衆千二百名、斯波造船所長開會を告ぐ

思想問題私見　本多猊下

洛々數萬言、東西兩洋の文明思想に就き說き去り論し來て我建國の理想事實に及び大日本國民の自覺を促し二時間の長廣舌に於て偉大なる活力を與へられたり。

○十一月十四日午前九時半より長崎縣立圖書館に至り永山圖書館長の案内にて開港當初以來の歴史其他の珍本圖書を閲覧し序で瓊林館に於ける三菱造船所、報德會、鑽仰會、有志の本多猊下歡迎會に臨み永山圖書館長の挨拶、本多猊下の答辭中餐を共にし午後二時より今町三菱倶樂部に於て日蓮主義研鑽者を中心としたる會合開催せられたり。

開會之辭　　井上海軍中佐

法華經の大綱　　本多大僧正

法華經の奥義、日蓮主義の生命、佛教の眞髓、悉く此法座に於て說示せられ聽者感激の情を呈し共鳴の態度を表はし日蓮教學の高風を見たり因に少女川上初枝猊下を貴賓室に訪ひ、謹嚴なる態度と明晰なる言辭を以て『天照大神と絕待本佛との關係』に就て質疑し、猊下諄々乎として之に答へ給ふ其儀容の堂々たる稀に見る所『巧於難問答乃至端正有威德』の風格を偲ばしめたり主催日蓮鑽仰會々衆約百名

十一月十四日午後七時三十分中島會館に於て大講演會開催、聽衆千二百名、斯波造船所長開會之辭を宣ぶ

感謝の生活　　本多猊下

十一月十五日午前八時三十分飽浦工場に於て千三百名の職工の爲めに卓越せる我建國の理想、使命を自覺すべき所以を說き多大の感激を與へられたり阿部造機部長開講の旨趣を告ぐ

正しき理解　　本多猊下

十一月十五日午後三時三十分立神工場に於て開會々衆千六百名、石龜部長開會宣言

愛國心に就て　　本多猊下

萬邦愛國心の意義を論じ更に個人的、團體的、國家的、利己心の通弊を慨し眞の愛國的精神を發揮するには武力と思想との各方面の調和統一を要する所以を說き日本帝國の地位と使命を示し實力養成の急を知らしめ深大なる活力を喚起せしめたり

十一月十六日午前六時、三菱造船所濱田常務、斯波所長、山口副長、八卷總務部長、長岡職工課長、土山通俗講師、荒木要氏、井上海軍中佐、寺島海軍中佐、瀨戸鑽仰會代表、江葉義成、新宮嘉作、深澤孝諸氏の見送を受け長崎を發し有田へ向ふ

十一月十六日午前六時五分長崎を發したる猊下は、熱誠なる求道者寺島海軍中佐に對し列車中尙も佛教の深義を說き、中佐亦傾聽會得の法門を記錄し法談盡きざるの時、早岐驛にて中佐は佐世保へ、猊下は有田へ向ふ、午前九時十五分有田驛に着し帝國窯業會社足達取締役外數氏の案內にて同會社に至り職工二百名の爲めに有益なる講話ありたり

開會之辭　　取締役　足達喜幸

人と教　　本多猊下

同日午後一時五十七分　足達技師長、本土囑託醫師、外數名の見送を受け有田驛を發し午後三時三十九分佐賀驛に着す、岸川正治氏夫妻、鳴打氏夫妻、添島さと、久納けさちよ、久

富きよ、久富萬次、井內德三郎、平井大敎寺住職、橫尾龍太郎、鳴打はま、大島秀五郎、今泉よね、田中作一郎等の諸氏は紫染貫會旗を翻し出迎ふ直ちに篤信者岸川正治氏宅に案內され鄭重懇篤なる待遇に接し同邸宅に一泊、午後七時より勸興尋常校講堂に於て開會、嘉村彥四郎氏開講旨趣を宣す

思想撰擇の基準　　本多　管長猊下

八百の聽衆、二時間半に亘る熱辯に感激措く能はず一人の中座する者なし、共鳴讚歎の拍手堂外に傳ふ

十一月十七日午前九時二分岸川、鳴打、嘉村、副島、井內、久納、前山、大島、下里、諸氏は佐賀驛に隨送し猊下は久留米へ向ふ、鳥栖驛に久留米天晴會中原、橋本、平岡、幹事、及び野口、國武、本泰寺總代の出迎へを受け十時三十二分久留米驛着、天晴會員、及平岡、吉見、兩師外信徒多數出迎、直ちに本泰寺に至り少憩、午後二時日吉町旭館に於て天晴會主催の下に思想講演會を開く、中原龍已法學士開會の辭を宣べ、中原本泰寺住職の前講に次ぎ猊下の講演、末永伍平氏閉會を宣す聽衆五百

思想撰擇の基準　　本多猊下

同日午後七時本泰寺に於て開會、定刻既に滿堂立錐の餘地なし、中原龍已氏開會を告ぐ

感謝の生活　　本多猊下

六百の會衆、二時間半の大法輪に歡悅の情を呈し、國民思想の中心を把住し以て理想文明の發揮に進擊せんことを期す、中原山主閉會を告ぐるや、高山第十八師團長の發聲にて一同萬歲を三唱し思想戰士の概を示して散會せり

十一月十八日午前七時十四分本泰寺總代、天晴會員、及び多數の信徒は久留米驛に猊下を見送り、中原山主、中原、橋本、三氏天晴會を代表し鳥栖驛へ奉送、猊下と別を告げ猊下は別府へ向はせらる。

歲末掉尾の思想戰

常總統一團の獅子吼

（本多大僧正及野澤陸軍少將の一行）

△大正九年十一月二十一日、郡長其他有力者の發起にて銚子町第一部小學校に於て思想問題講演會を開く、聽衆約七百、

開會の辭　　加瀨文學士

思想と國家　　成島支部長

現代思想大觀　　野澤陸軍少將

△二十二日、茨城縣鹿島郡大田長照寺に於て日蓮主義講演會

開催、聽衆六百。

思想の撰擇　成島支部長

日蓮主義と現代思想　野澤陸軍少將

△二十四日、本多貌下には特別自働車にて銚子驛より今泉に到り、それより大田新田の名物、下座船にて多數禮信徒に出迎られ、長照寺に到着あり、午後二時より、長照寺本堂屋模葺替及庫裡新築落成と兼て檀家祖先追善の爲に、音樂天童大法要を嚴修せられ、成島布教師の落成式慶讃文あり、法要後

信仰と社會　本多貌下

なる講演あり、本堂に滿てる約七百の聽衆感激して、或は流涕するあり、或は合掌唱題するあり、此處に娑婆即寂光土を現出す。

△二十四日、銚子より講師出迎の時友太助海上賢司の兩氏に迎へられて、本多貌下には特別仕立の發動汽船にて利根川を下り、歡迎の煙火數十發空中に轟く中を、銚子町第二部小學校に到着あり、直に講演會に移る、聽衆約八百。

思想撰擇の基準　本多貌下

十項目に分ちて、沿々說き去り說き來る事前後三時間、熱すれば直に聽く者の肺腑を刺し、輕く諧謔の頻發する時座にある者の頬を解く、或は小鳥の枝間に囀々するが如く、或は鳳凰の虛空に飛躍するが如く、大自在無碍辯の獅子吼は、八百の聽衆をして恍惚として暫し靈山會上佛陀說法の座にあるの想あらしめたり、當總の野日蓮主義に風靡せらるゝの秋近きにあらん。

京都の佐藤將軍歡迎會

十一月十七日午後四時、妙滿寺方丈に於て、天晴會主催、舞鶴鎭守府司令長官佐藤海軍中將の歡迎會を開催す、來會する者、桂少佐西村吉右衛門大阪の上田京藤和井田名古屋の清水馬場氏等總計四十有七名、萩原本山部長の歡迎の辭、佐藤將軍の熱烈なる感想談あり、西村氏の發聲にて佐藤將軍の萬歲を三唱し、佐藤將軍發聲にて　天皇皇后兩陛下の萬歲を三唱し、芽出度歡迎の宴を撤す。午後七時より講堂に於て、國民思想善導の大講演會を開催す、相憎の豪雨なりしも推寄する聽衆滿堂。

開會の辭　金光孝碩

文化政策に就て　佐藤文學士

國民思想善導に就て　佐藤海軍中將

閉會の辭　有田宏道

國友監督布教師の巡教

△十一月十二日夜丹波綾部了圓寺に於て、國友師導師の下に、宗祖御會式法要を嚴修し、終て日蓮主義講演會開催、聽衆二百。

感恩の精神　金光布教師

信仰より法悅へ　國友監督布教師

△十二日午後同寺に於て講演會開催、聽衆八十。

峯の石　國友監督布教師

△同十三日夜、大阪市蓮成寺に於て、宗祖御會式法要嚴修後講演開催、聽衆百二十。

追懷は力なり　金光布教師

地獄に落ちて何の詮かあるべき　國友文學士

△十四日夜、堺市妙滿寺に於て日蓮主義講演會、聽衆百五十。

人と敎　金光布教師

赤奉ふべからず　國友文學士

△十五日午後、大阪府三島郡耳原法華寺に於て講演會開催、時恰も秋季敎護の眞最中にて、猫の手もいる農繁期なりしも、平素の化導に依り、熱心に道を聽き、感極つて嗚咽し合掌唱題する純信の參詣者約五十。

國民自覺の時　金光布教師

法顯三藏の話　國友監督布教師

△同十五日夜、神戸布教所に於て、御會式法要後講演會開催、聽衆滿堂立錐の餘地なく無慮二百五十。

我が願　吉永日洋師

信仰へ信仰へ　國友日斌師

△十六日夜、鳥取市法泉寺に於て、本化聖敎團主催の下に日蓮主義講演會開催、聽衆約三百本堂に溢る。

國民敎化の徹底　川崎布教師

佛と地獄の間に立ちて　國友文學士

△十七日午後、伯耆倉吉町に於て講演會開催、聽衆約五十。

現代思想と國民の自覺　川崎布教師

懺悔より信仰へ　國友文學士

△同日夜、桜崎町本立寺に於て日蓮主義講演會開催、聽衆約六十、嘗て振はざりし同地に取りては前代未聞の盛況なり。

敎虔の念を持ちて　川崎英照師

信仰に安住せよ　國友日斌師

△十八日午後、同地市橋家に於て講演會開催。

女子と信仰　國友惜正

△十九日夜、明石市圓乘寺に於て日蓮主義講演會開催、聽衆約八十、數は少しく貧弱なるも質に於ては中川軍醫少將、加

藤判事等の知識階級を集めたり。

華は根にかへる　熊井特命布教師

感激と懺悔と信仰と法說　國友監督布教師

△同二十二日午後、姫路市妙立寺に於て、御會式法要後講演會、十四年前妙立寺に於て剃髮し、姫路岡山の信徒に送られて丹波綾部の任地に赴きたる國友師は、今再び歸り來つて宗祖御會式の日故郷の信徒諸氏に會見するは、無限の喜なりと冒頭して、涙と共に信仰の妙諦を說く。

臨終の覺悟　國友僧正

△同日夜、明治幼稚園にて日蓮主義講演會、聽衆滿堂

國民教化の徹底　川崎英照師

我等の道　熊井本光師

物質と精神との間に　國友監督布教師

各地の教戰

△**姫路地方**　妙滿講例會講話、一日午後八時、姫路市菊本忠氏宅、「信仰の力」矢部事正師△一心會講話、二日午後二時、印南郡西神吉村大國松蔭氏宅、「公益の精神」矢部事正師△報恩講例會講話、四日午後八時、姫路市武田てる宅「法性の空に月明らかならん」矢部事正師△姫路第十師團兵器部講話、五日午前十時、「心の錆は兵器の錆」矢部事正師△陸軍整治隊講話、九日午後九時、「修養と自覺」矢部事正師△立善婦人會講話、十一日午後七時、姫路市妙善寺講堂、「因果の道理」大河原尙志氏、「力ある婦人」矢部事正師△妙滿講例會講話、十三日午後八時、姫路市倉賀野氏宅、「岸の上に人ありて」中川日史師△高祖日蓮大聖人御會式講演、十九日午後七時、姫路市妙立寺講堂、「報恩は正信に依つて」矢部事正師、「立教開宗より入滅まで」吉永日洋師、「大聖人御入滅に就て」中川日史師、△御會式法要講話、二十二日午後九時、姫路市三浦幸作氏宅、「日蓮聖人の大慈大悲」矢部事正師△御會式法要講話、二十五日午後九時、姫路市中村鋼之祐氏宅、「聖訓を生活の背景に」矢部事正師△地明會例會講話、二十六日午後一時、姫路市妙立寺講堂、「罪障觀と佛性觀」大河原尙志氏、「生活改造と和樂の家庭」矢部事正師

△**岡山縣下**　十一月一日午後一時、和氣郡日笠村小學校にて民力涵養講話、聽衆八百餘名、「行政警察に就て」湯淺警察署長、「免囚保護事業」原田日勇、「民力の涵養」能仁事一、「精神の修養」寺阪郡長△同十日夜、和氣郡曾根講法會、聽衆四十五名、「七福神」原田日勇△同十二日午後六時、和氣町本成寺に於て宗祖御會式修行、參拜者八十名、「法華經の行者」原田日勇△同十三日午後一時、改宗者三名（眞宗眞言單稱）の爲に、「本宗の教義と信條」原田日勇△同廿八日午後六時、和氣郡山田村公會堂に於て修養會を發會す、近來青年の風儀の惡化せるを改善し信念の增進を期せんとて、同所の從野健藏氏發起し、入會する者既に百名に及び、猶續々入會申込ある由。「修養會發會式式辭」從野健藏。「信仰の本義と修養」原田日勇。

△日蓮主義講演會十一月十三日、勝田郡河邊村にて開催、聽衆三十八名、「成佛するまで」能仁一十師△宗祖御會式、津山本蓮寺に於て十一月二十日嚴修す、報恩講德の修法の後、「教育と宗教」和氣善勝氏。「今身より佛身に至るまで」能仁一十師。參詣者七十餘名△日蓮主義青年會發會講演會、苦田郡高野村の青年を中心として作東日蓮主義青年會組織さる、十一月二十五日、同村妹尾平次郎氏宅にて發會講演會開催聽衆百餘名、「現代と日蓮主義」和氣善勝氏。「日蓮主義を要求する所以」能仁一十師。

△十一月四日、赤穗郡草生橋草安次郎宅にて講演會、「本宗の教義に就て」吉塚通榮△同二十二日午後八時、同所久成寺に於て御會式法要後講演、「信徒の心得」吉塚通榮。

△**名古屋地方**　十一月二十八日夜、新川町日進教會に於て日蓮主義講演會開催、聽衆百五十餘名、「身讀法華」長谷川義一。「人の心と信仰の悅び」國友文學士△十二月五日午後、一宮町平松氏宅に於て統一團分會主催思想問題講演會、聽衆百二十餘名、「思想統一に就て」山內機溪。「信仰より法悅と精進へ。」國友日斌、講演後會員一同國友師を導師に大本尊の御寶前に立正安國の熱誠を捧ぐ、此地統一團は今や研究より信仰に入れり、將來の活躍期して待つべし。△同六日夜、東狀把鳥町彥坂氏宅に於て日蓮主義講演會、來會者三百五十餘名「命者はるるとも」國友日斌。「沖國の根本義諦」山內機溪。「明治天皇の御聖德」丹羽陸軍少將△十一月十二日名古屋市靈山寺に於て、御會式法要後講演會開催聽衆八十名。「日蓮聖人の奮鬪」山內機溪△同廿一日名古屋市常德寺に於て、御會式法要後講演會開催、參詣者百五十名。「宗祖の遺訓」國友山主△十一月十一日、岐阜縣大垣市常榮寺に於て、御會式法要後講演會開催、聽衆百名、「一心欲見佛」清水一乘。「殉教者の事蹟」國友文學士。

△**豐橋地方**　十一月二十日夜、豐橋市妙圓寺に於て立正會例會開催。「一念三千と文化主義」滿井文學士。△十一月二十一日、統一團附屬少年會發會式挙行、來會の兒童三百名、松本師導師の下に御寶前に一同跪坐三寶三禮し、松本氏開會を宣し、鳴歌君が代の吹奏、加藤少將の教育勅語奉讀。次で同將軍の講話あり、一同記念撮影の後、お伽噺に移る。「猿の膽取り」「滿井文學士。「五人男」「大竹直治君。終つて滿井文學士の作歌「猿の膽取り」の印刷を來會見童に配布す、和氣講々裡に散會せり△十一月二十三日午後二時、部落宿本郷講中主催の舊暦御會式を利用し講演會開催。「全國特殊部落成績表に就て」岡田運吉。「火災豫防に就て」松下部長。「日蓮聖人の信仰」松本堅晴師。右終つて御會式法要を營み、直に隣接部落伊奈新町に至り、午後六時より同講中の爲に講演開催「日蓮聖人學生の主張」松本堅晴師。終つて法要を營む、聽講者二部落共戶主青年を中心とし婦女子亦之に加はり、敬聽滿足の有樣面に溢れ中には手帳に記する者すらあり、彼等團結力の強固及世の進運と共に意外に覺醒し來れるは大に啓發の急務あるを感ぜしめたり。

△**見付敎報**　開祖日什上人の靈蹟地たる見付玄妙寺は、現住職山本師赴任以來特に布教宣傳に勞め、檀信徒亦能く外護の本分を完了し、大正二年布教基金九百圓を募集せしが、時代の推移と共に增額の必要を認め、今回更に布教基金貳千圓餘營繕費壹千五百圓を募集し、四菩薩の造立、須彌壇の修飾、門前道路の大修繕等を爲せしに依り、十一月十二三兩日御會式法要に兼ねて、四菩薩造立開眼供養及講演會を開催せり、十二日は午後八時より法要、次で講演に移る、聽衆滿堂立錐の餘地無し。「開會の辭」山本通雄師。「信仰の活動」豐田通泰師「求道の精神」石川一郎君。「靈格の修養」管事高橋邁碩師。△十四日午後一時より四菩薩造立開眼供養大法會を營み、山本師の開眼供養願讀文、匂坂德代の式辭、高橋管事及豐田師の祝辭あり、次で講演に移る。「日蓮

主義の擁護」石川一郎君。「立正安國」松本堅晴師。

△神戸のほちす婦人會　十二月五日午後一時、大同通統一閣神戸支部に於て第六回婦人修養會を開く、「佛陀の婦人訓三」無井本光師「時の强健法」齋師遠坂晃文先生。時恰も年末の多忙なるにも係らず清信の婦人は、萬難を排して參會し熱心に聽聞せり。無井師は過日來風邪にて氣分惡しき中を當會の爲めに病床を蹶つて講演せられ、佛法のため不惜身命の手本を示されたり。又遠坂先生の信仰を元にしたる衛生講話は多年の經驗上より割り出したる活教訓的療法にして、宗教信念が如何に吾々の健不健に影響を及ぼすかを知れり。勞働の神聖を今更の如くに覺りたる婦人達は、今晩の夕餉の支度等を如何にいそ〳〵と感慨に充ちて聽まれし事かと想像せらる。

巡回教化

大正九年も早や餘す所僅かに三十日、此記事が讀者諸君の目に觸れるは、新年の屠蘇に頬を染めて居る時であらう。此時に當つて、吾等は先づ一年のくゝりをつけて、來年活動の準備をせねばならぬ。省れば、過にし一月の新年宴會に於て發表されたる總裁猊下の抱負は、有ゆる方面に、行き亘つて居つたが、其中にても、勞資問題に對しては、自慶會をして之に當らしめ、學生善導に對しては、日蓮主義宣傳學生聯合會を起し、思想界に對しては、大々的に日蓮主義を高唱し、細民教化、民衆教化に對しては、統一閣社會部をして之に當らしめ、全國に亘つての大活動を開始されたのである。

然して各部員は、それ〳〵大奮闘をなし、其成績は毎月、統一誌上の記事欄を飾つて居るのであるが、吾人は之に滿足してはならぬ。見よ、過激思想は有ゆる階級に浸入して、停止する所を知らざる有樣ではないか。近時勞働問題が、靜かになつたと思ふは、大なる間違である。彼等の思想は、富士瓦斯紡績の同盟罷工以來、一層深刻に急進化しつゝあるではないか。家主對借家人の間には、糞尿問題あり、これ又輕々に看過すべからず。若し家主の自覺なき時は、米騒動時の大爭闘を、引き起さぬ共限らず。加ふるに、細民は近時、內職拵定より生ずる不安の念に襲はれて、何時如何に赤化左傾せぬ共限らぬのである。

內憂外患交々至ると云ふ字句は、辯論を飾る修辭句ではない、現に吾人の眼前に迫つて居るではないか、此時に際して、若し日蓮主義者が立たずんば、何時立つべき時ぞある。常に勤王愛國を口に唱へて居る日蓮主義者は、どうしたのであるか。社會主義者等の凄味を帶びたる活動に、恐れをなしたのであるか、心讀也讀すべき不惜身命は、浮言に云ふべきものではないぞ。『此こそ宇治川渡せし所よ、是こそ勢多を渡せし所よ、名を揚るか、名をくだすか也。何となくとも一度の死は一定也、色ばし惡くて人に笑はれさせ給なよ』の御聖訓を何と拜するか。殊に來年は、聖祖御生誕七百年忌に相當し、一眼の龜、浮木の孔に値ふの好時機ではないか、此際此時、日蓮主義者が奮起して、大活動を成さずんば、何の類あつてか、大聖人にまみへる事が出來る、迦葉の入定も時にこそよれである。

我社會部の活動は、年末の大活動を最後に、第一期戰の幕を下して、來春早々第二期戰に移り、雲天動地の大奮戰を試みる計畫である。其活動方針は、既に國友部長より定示され、今や準備中であるが、如何なる方面に如何なる突擊を成すかは、毎月統一誌上に發表する故、活目して之を待たれよ。

□—十一月十三日南千住、畫小供會三百名、講師川島松雄。夜大人會二百五十名、(うどくてらの趣意)高木日靖、(佛の慈悲)野澤少將。□—同十四日同所、畫小供會三百五十名、中村藤吉、川島松雄、高木日靖。夜大人會二百名、(開會の辭)高木日靖、(日本人の氣風)笹川日堂、餘興講談、桃川蝶花。□—同廿四日川崎町女子高等裁縫學校、畫同校及高等科生徒四百名、(忠義に就て)毛見龍太郎、(孝行に就て)川島松雄。夜大人會五百名、(開會の辭)高木日靖、(佛と地獄の中間に立ちて)國友文學士、餘興筑前琵琶、中山榮三郎。同廿五日下谷區龍泉寺町、畫小供會三百名、川島松雄、高木日靖。夜大人會三百五十名、(うどくてらの趣意)高木日靖、(心の光り)國友文學士、餘興講談、桃川蝶花。□—同廿六日同所、畫小供會四百名滿員にて入場謝絶、川島松雄。夜間、大人會三百名(開會の辭)高木日靖、(信仰は力なり)中川文學士、餘興講談、桃川蝶花。

統一閣月報

○十一月七日、明治神宮鎭座記念大講演會を開く。「明治神宮と信仰」井村日成師。「明治天皇御聖訓につき」關田日城師。「日本の文化と佛教」本多日生猊下。聽衆七百を算せり。

○日曜講演、十一月十四日、「佛教處世觀」、秋山乾英。「西行と佛教」、妹尾義郎。「唱題について」、笹川日堂師。△二十八日、「愚禿と日蓮」、妹尾義郎。「法門可申抄講義」、本多日生猊下。

○二十一日、午後六時より宗祖御會式法要及記念講演を開く。夜來の細雨からりと晴れて、秋氣清澄、しつらはれし聖境寶前も、講堂も一入色さへて法味掬すべきが如し。增榮せられし講堂に早くも來聽者みち〳〵て立錐の餘地もなし。定刻、本多總裁猊下を大導師として僧俗一音、恭しく御會式の御法味をさゝげ、了つて講演にうつる。開會の辭につ

いで、海軍造船少將、岩野直英閣下は「歐米漫遊の所感」をのべられて法登甚大。次いで本多秘下は「日蓮聖人の大恩」と題して二時間餘に亘りて大說法せらる。いつもの事なれども、わけて今宵は法音いと朗らかに、又力强く、聽衆の感激一方ならず、感涙に咽べる者その數をしらず。法燈いと輝かいて聖悅つくし難し。大聖人、地下に善哉と讃し給はざらんや。

常樂寺の開堂供養

管長秘下の英斷により、大正七年定期宗會の決議に基き、公けなる宗門事業として着手せられし慶印久成開寺の合併統一は、八年一月所轄官廳の許可を得、爾來開寺住職尊心鉛意其事に從ひ、久成寺墓地の大整理、慶印寺檀家全部の墳墓移轉、本堂客殿鐘堂表門等大建築の全部移轉造營等略ぼ完成を告げ、客冬十一月廿二日（日經上人の御正當會）をトし、开が開堂供養と日經上人三百回御忌を營ね、秘下御親修の下に音樂大法要を修行せられたり。

此日天氣晴朗、準備萬端整ひて午前十一時、國友部長と石川副住職自動車を品川に走らせて秘下を風請し上り、午後一時より約二時間秘下の懇切なる御講演（日經上人の功勳と題し舊譜統一臨時號として近刊）あり、三時半より大法要慶修、詣者滿堂、議員評議員其他東京寺院概ね亦隨喜參列せられ、山根住職の慶讚文朗讀、石川副住の祝辭祝電披露等かたの如く、極めて嚴肅に寬事なく法要を終へ、一同歡喜法悅に浴ちて祝酒折詰を手に散會したり、今左に住職の朗讀せし慶讚文を掲げて事の大要を明にせん。

慶讚文

謹而奉勸請本門常住之三寶來臨影響知見冠覽

山門今日內外を淨め香華を獻供し恭しく總本山妙滿寺貫首管長大僧正本多日生秘下を風請し上りて常樂寺再興開堂供養の大式典を擧げ一實醍醐の教義を强る宣「奈何となれば宗祖南無日蓮大聖人御合式開基常樂院日經上人三百遠御忌報恩謝德に奉し奉るもの也矣

史を案するに慶印久成の開寺は同根一帶殉教の聖者日經上人の草創に係る上人の素敵を江都に打つや弘通根本の道場として常樂寺を創建し地を日本橋小傳馬町にトして西町四方の淨域を占め七堂伽藍の結構を備ふ規模の宏壯理想の道大意氣眞に天を衝くの概あり四民の渴仰教風の愉揚日を逐ふて盛んに奉戴擧々屬左の天地を震動す偶々金鶏の信者德川家康の基壓に遭ひ一朝破却の悲運に接す弟子城智院日秀久成寺を此地に同知見院日忠慶印寺を淺草に開いて門徒を引率し爾來三百年悲風慘雨星移り物換りて今や開運の發展と共に法運民開の佳會に遭遇す管長秘下時代の逸運に乘み給ひて開寺住職に命じ合併統一の事を畫せしむ開寺住職旨を承じて檀信と共に和衷協同遷元復興の聖業に從ひ指折經營三閱年略ぼ成就を告ぐ規模甚だ大ならずと雖も基礎漸く固く前途活動の一歩を轉ぜんとす上人在天の靈照覽加被前途に光明を與へ給へ

此日天氣清朗一天雲なく金風皆として意氣緊張春ふ所は正法興隆品道繁榮國運隆昌萬民快樂寺檀和合眞俗知意踏顧圓滿皆合滿足慶讚一章仍如件

大正九年十一月二十二日

常樂寺再興第一世住持沙門　日東　敬白

新年の御慶
芽出度申納候
本多日生

謹賀新年
總本山妙滿寺

恭賀新年
顯本法華宗宗務廳
鈴木日雄
國友日斌
森川日修

石川顯隆
中川日史
大森日榮

謹賀新年
顯本法華宗評議員
野口日主
笹川日堂
關田日城
飛山日甫
木村日保

賀正
統合宗學林

謹賀新年
統一團

謹賀新年
統一團名古屋支部
同　四日市分團
同　豐橋分團
同　一宮分會
同　枇杷島分會
同　新川分會
同　南郊分會

謹賀新年
統一團大阪支部

賀　正

主義を同ふする各位の御清昌を祈り併せて本年も不相變爲國爲法神戸教田開拓の爲一層の御聲援を乞ふ

統一團神戸支部
熊井本光
外團員一同

恭賀新年

統一團社會部
うどくてら同人

恭賀新年

自慶會

賀　正

財團法人自慶會名古屋支部

賀　正

自慶會京都支部

謹賀新年

自慶會大阪支部

謹賀新年

自慶會神戸支部

謹賀新年

自慶會明石支部

謹賀新年

統一編輯局
國友日斌
長谷川義一
川島松雄
小林順雄

謹賀新年

四日市市
山路元吉
兒玉小治良
佐藤柳
服部隆
外一

年頭の辭

普く世界を照らす太陽を以て理想とする大日本國は日の丸の國旗を其の表現として久遠の光宅を莊嚴す

此に大正十年の元日を迎へ我徒同志は本誌上に於て年頭の賀意を交懽し虔んで正法の興立と皇道の隆昌とを奉祝し國光の增輝と國運の發展を期す殊に今歲は聖祖降誕七百年の佳辰に相當す我徒同志は道念堅固弘通不退の地に安住して四海歸妙立正安國の祖願を成辨し四表の靜寧を庶幾する處なり

東京府品川町本光寺住職　今成日誓
東京府品川町妙蓮寺　笹川日堂
東京府品川町直了院　大森日榮
東京府品川町本榮寺　高木日靖
東京府品川町清光院　伊保內教精
東京府荏原郡入新井町善慶寺　石渡英哉
東京市赤坂區一木町常玄寺　森川日修

千葉縣山武郡成東町本因寺　堀江誠一
千葉縣市原郡姉ヶ崎町行傳寺　山本日悟
東京府品川町妙國寺　溝口會旭
靜岡縣濱名郡吉津村妙立寺住職　岡本圓正
千葉縣印旛郡酒々井町經藏寺住職　前田日應
千葉縣長生郡豐田町行光寺住職　前田孝信
東京府下葛飾町蓮華寺住職　松田宏榮

東京市小石川區原町本金寺住職　大須賀玄遊
千葉縣千葉町本圓寺住職　廣部永眞
廣島市新川橋町本願寺住職　島田日關
樂路市五軒邸妙善寺住職　吉永日洋
東京市下谷區上根岸町根岸教院　柳生正生
同所　子安華丈
靜岡縣菊原郡松野村妙松寺住職　大津日文

東京市牛込區原町常樂寺住職　山根日東
同　所　常樂寺副住職　石川顯隆
岡山縣和氣町本成寺住職　原田日勇
千葉縣山武郡豐成村法華寺住職　小川恭俊
神奈川縣橘樹郡大綱村本長寺住職　今井警敏
東京市淺草區吉野町圓常寺住職　鈴木日雄
東京市淺草區南松山町法成寺住職　關田日城
東京市千込區早稻田南町正法寺住職　木村日保
東京市本郷區駒込蓬萊町願本寺住職　池澤日辰
高田市上紺屋町願本寺住職　矢野聖顯
靜岡縣賀名郡吉津村妙立寺內　藤本智宏
千葉縣千葉郡夏科村正福寺住職　林孝叔
鳥取縣東伯郡松崎村本立寺住職　富田日進

千葉縣長生郡新治村萬光寺住職　渡邊乾航
千葉縣君津郡飯野村法性寺內　秋葉日敬
東京府高田村雜司ヶ谷本敎寺住職　井村日成
東京市下谷區谷中初音町本授寺住職　笠原琢瑞
東京市下谷區池ノ端七軒町妙願寺住職　木村義明
東京府高田町雜司ヶ谷寬受院　田島義潤
東京市四ッ谷區南寺町法慈寺住職　秋山乾英
千葉縣長生郡長柄村光明寺住職　木村令快
京都市京都總本山妙滿寺內　萩原日道
金光孝碩
有田宏道
清水純榮
村岡本量
熊井乾堂
京都府北桑田郡知見谷本妙寺住職　大塚會叔

千葉縣市原郡市西村泰安寺住職　秋葉日虔
福島縣二本松町蓮華寺住職　米良惠長
盛岡市外北山法華寺住職　渡邊日研
千葉縣山武郡源村聖王寺住職　齋藤日章
千葉縣印旛郡八街町新藏寺住職　因幡善英
千葉縣印旛郡佐倉町妙經寺住職　田邊慎一
千葉縣千葉郡夏科村寶泉寺住職　夏目智誓
千葉縣印旛郡川上村本源寺住職　山本信讓
千葉縣印旛郡用草村直福寺住職　花澤輝哲
千葉縣長生郡新治村光明寺住職　久松光道
千葉縣山武郡片貝村本覺寺住職　土屋真容
千葉縣山武郡豐成村妙善寺住職　小竹俊堆
神奈川縣小田原町妙經寺住職　三橋會

福井縣足羽郡社村妙正寺住職　梶木顯正
福井縣遠敷郡小濱町本行寺住職　石塚日進
神戸市大開通六丁目願本布敎所主任　熊井本光
靜岡縣函南村大土肥妙高寺住職　木下圓通
統合宗學林內　高田日暢
千葉縣山武郡福岡村飯鳴寺住職　龜崎日惠
千葉縣市原郡市東村本宮寺住職　西村會立
千葉縣市原郡姉崎町妙經寺住職　武田顯龍
千葉縣市原郡姉崎町常敎坊　齋藤立靜
千葉縣君津郡佐貫町安樂寺住職　齋藤見玉
千葉縣山武郡豐成村蓮成寺住職　鵜澤諦溫
千葉縣市原郡溫津村泰行寺住職　梅澤天純
千葉縣長生郡豐成村廣敎寺住職　池澤快整

○千葉縣千葉郡春田村妙本寺住職　鵜澤純貞
千葉縣山武郡片貝村妙覺寺住職　大橋日襲
愛知縣渥美郡田原町寶行寺住職　野中通玄
山形郡東置賜郡樂郷村本覺寺住職　宮代向政
千葉縣山武郡源村本極寺住職　土持良達
千葉縣市原郡菊間村行光寺住職　横山會章
千葉縣市原郡市東村法行寺住職　富田廣演
靜岡縣賀名郡吉津村榮餘坊住職　增田智靜
靜岡縣賀名郡吉津村正住坊住職　猪野貞立
千葉縣君津郡木更津町成就寺住職　飛山日甫
岡山市山崎町本行寺住職　能仁事一
姬路市五軒邸妙立寺住職　中川日史
千葉縣山武郡東金町西福寺住職　山岡日紹

千葉縣山武郡東金町本願寺住職　中村日
大阪市東區西高津蓮成寺住職　上田智量
大阪市南區生玉前町堂圓寺住職　京藤義應
久留米市寺町本泰寺住職　中原通應
愛知縣碧海郡刈谷町長遠寺住職　武藤照惠
名古屋市古渡町願山寺住職　清水一乘
岡山縣勝田郡飯岡村本經寺住職　三須敎英
福井市相生町妙經寺住職　石井寬俊

賀正　法緣統合會
賀正　千葉縣　宗典請究所
賀正　福俵立正修養會
千葉縣山武郡大和田村法光寺住職　成島日衛

茨城縣長生郡東郷村龍經寺住職　小川玉秀
青森縣八戸町本壽寺住職　中田量叔
岡山縣赤磐郡周匝村久成寺住職　吉塚通榮
明石市大藏谷圓乘寺住職　川崎英照
千葉縣山武郡豐海村善立寺住職　鈴木正二
京都府下綾部町了圓寺住職　武聖麟
千葉縣山武郡大和村本福寺住職　堂亮雄
千葉縣山武郡土氣本郷町長興寺住職　米倉義明
千葉縣山武郡丘山村東成寺住職　高貫見龍
千葉縣長生郡長柄村廣福寺住職　河野見中
千葉縣長生郡長柄村妙典寺住職　山本賢乘
千葉縣長生郡本納町蓮福寺住職　井口善叔
千葉縣山武郡大網町本圓寺住職　土屋賢生

千葉縣市原郡湯津村安立寺住職　山下純秀
千葉縣山武郡福岡村要本寺住職　栗原顯有
千葉縣長生郡茂原町圓藏寺住職　宇津木玄英
千葉縣山武郡瑞穗村正法寺住職　初芝智泉
千葉縣山武郡東金町正教坊住職　鈴木乾泰
千葉縣山武郡大網町長福寺住職　北田信昌

新正法與隆
第三教區青年布教團

千葉縣長生郡豐田村寶泉寺住職　成島隆康
千葉縣長生郡長柄村道隱寺住職　山田誠心
千葉縣長生郡岡村本法寺住職　松井道安
千葉縣長生郡長柄村滿願寺住職　長岡育應
千葉縣長生郡二宮本郷村妙行寺住職　竹內端嚴
竹內顯領

千葉縣長生郡白潟村安住寺住職　酒井眞隆
千葉縣長生郡豐岡村本大寺住職　北田知一
千葉縣長生郡豐岡村圓立寺住職　吉見俊敎
千葉縣山武郡睿穗村東光寺住職　今井俊貞
千葉縣長生郡豐田村大乘寺住職　宮川日佑
豐橋市清水町妙圓寺住職　松本堅晴
愛知縣緒川驛越境寺住職　長谷川日濟
愛知縣渥美郡二川町妙泉寺住職　加藤圓順
靜岡縣磐田郡見付町玄妙寺住職　山本通辨
千葉縣山武郡土氣本郷町藝術協會主任　千代木常整
同　同　寶藏寺住職　內田專學
靜岡縣濱名郡白須賀町妙泰寺住職　高橋進

福岡縣三池郡黃瀨新興寺住職　出海俊義
久留米　天晴會
大牟田　天晴會
神奈川縣大綱村大豆戸大乘寺住職　前田圓整
愛知縣渥美郡野田村法華寺住職　西山日諦
福岡縣若松市甲賀町妙玄寺住職　竹內無着
千葉縣山武郡公平村本松寺住職　草切信榮
同　同　願成就寺住職　淺井常忍
北海道札幌郡江別法華寺住職　田久保日城
岡山縣津山町本蓮寺住職　能仁一十
名古屋市新榮町常德寺內　長谷川義一
同　八百屋町妙行寺住職　伊藤日顯

金澤市橋島町安立寺住職　杉田常敬

謹賀新年

統一閣幹事

久富久子
宮岡ふさ子
五十嵐正
中村壽市
水野三太
藤澤智明
早川太吉
山本嘉七
中村藤吉
坂本泰造
內海穎二
山田英二

野島進
高橋辰二
小島傳平
窪田貞二
龜井利一
山田豐次郎
竹下龜次郎
猪又金太郎
玉川由太郎
中村光太郎
島田愈五郎
中澤平五郎
久保田雅己
大原亮
勝田茂
加藤寅五郎
時友仙治郎

謹賀新年

清明會　千葉縣人　桃花郎　宮木原六　磯部又雄　大江重吉　藤原肇甫　馬場元門　内田喜男　大口右衛　白倉元郎　大原全子　岡田三郎　安川鑑子　竹内久郎　高野太吉　和田秀郎　彦村次郎　濱田善助　林鍬兵衛　伊藤萬太郎　藤島健藏　幸坂鐵嗣　惣田五郎

謹賀新年

大正十年の初頭に當り、北海の地に住む吾等同志百餘名は、深く感ずる所あり、一同扶を連ねて、顯本法華宗に歸入し、誓つて正法正義の宣傳に從はんとす、願はくば先進の道俗諸賢、異體同心の聖調に基き、吾等を指導し、策勵し、啓發せられん事を。

北海道札幌區白石町廿番地

本澤隆正
兒玉舜澄
瀬木增太郎
大河原直四郎
佐藤與會八
篠村榮太郎
北岡勘次郎
外信徒百一名

統一定價改正

大正十年一月號より本誌定價を改正し、從々內容の充實を計り、以て時代の要求に對應せんとす。乞ふ倍爲の愛讀あらんことを。（國體其の他に對しては事情により市教育援助の意味にて十二分の割引あり）

改正定價　一部　金參拾錢郵稅金壹錢
一ヶ年　金參圓參拾錢郵稅共　金參圓參拾錢郵稅共

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金壹圓八拾錢
○東洋文明の權威　金壹圓八拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓（卷一、二、三、四、五、壹部金壹圓七拾錢　卷六、壹部金參圓）
○聖訓要義
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓
○聖語錄　金貳圓貳拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢

以上各送料一部金八錢

○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金貳拾四錢
○大藏經要義　一部金參圓四拾錢　送料一部金十八錢　年前金送料不要
○法華經要文　上卷既刊一部金參拾錢　送料一部金貳錢

○思想の惡化善化
○人類文明の基礎（各一部金六　送料一部金壹
○正しき理解と信念
○日經上人の功勳　一部金十錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし

東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一一五九六番

統一定價	一冊	金參拾錢	送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢	送料共	

廣告料	一頁	金參拾圓
	半頁	金六圓
	四分ノ一頁	金參圓半
前金の事		

大正九年十二月廿五日印刷納本
大正十年一月一日發行（第三百十一號）

不許複製

發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
東京府荏原郡品川町南品川四百十番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番
名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺內
編輯所　統一編輯所

目次

大正十年と日蓮主義（時言）……本多日生
一、日蓮聖人と聖德太子……二、國家統治の新宣言……三、國防上の第一義……四、殖産の巨效と日蓮主義……五、精神生活と日蓮主義……六、宗教撰擇と日蓮主義……七、思想戰と日蓮主義

思想戰の意義（法幢）……本多日生
教育勅語と思想問題……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
日蓮聖人教義綱要……井村日威
宗門史料……山根青村
赤化の西伯利より歸りて……野口日生
佛陀と神明と……松尾鯱城
改造と信仰……武田顯龍

第廿五年三月號

郵税金壹錢を許り、
多拾錢郵税共らんことを。
の意味にて十二分